花聚文話

本閲
文庫
D2

本間文庫
文庫 14
D 284

袋華

花袋文話

東京 博文館藏版

京都府立図書館

田山花袋著

花袋文話

東京 博文館藏版

文庫14
D284

文藝と文章とに就いて著者の述べたものを輯めて見たのが此書である。講話もあれば談話もある。長い間研究して置いて書いたものもあれば、其折々に就いて單に自己の意見として述べたものもある。文藝に携はる若い人達に取つて、多少の參考になり得ればそれで著者は滿足する。

明治四十四年十二月　著者

目次

描寫論……一
明治の作品研究……四五
紅葉の「多情多恨」—一葉の「たけくらべ」—柳浪の「今戸心中」天外の「はやり唄」風葉の「青春」二葉亭の「平凡」獨歩の「牛肉と馬鈴薯」藤村の「春」漱石の「それから」上田敏の「うつまき」白鳥の「落日」
卓上語……七〇
剪裁—剪裁と度數—雜多紛々—新しき理解—タイプとパアソナリチイ—新傾向の俳句—說明と描寫—逸し易き印象—人生批判—筋書評—新聞記事と藝術—フロオベル—「ホルラ」—皮剝の苦痛—殘酷—トル

ストイ—トルストイとモウパッサン—「夜の宿」—爾人間よ—子供と旅—想像と作品—眼の藝術—洪水—平凡の痛苦—「をんな」—全責任—俳人一茶—田園の子弟—强弱—田舍の人への手紙—横と縱—心理描寫—チエホツの「決鬪」—理解—選擇—再び作者の批判—事件—印象主義—印象に富んだ書—微かなる匂ひ—人情—人情の撲滅—束縛—涙—「出發前半時間」—「生田川」—細かい心理—平行線—覺醒—「寄生木」と書いた理由—麥の道—模擬者—寂々—肯定?否定?—作品の價値—逼眞—背面—雨—友—感激のライフ—南の窓—自然物—眞劍—此頃の脚本—新しき刺戟—生効—現實—誤解—弱者の文藝—上と下と—イブセン—背面の主觀—アルツエハアセフの「妻」—享樂—ある對話—ライフ—一葉—獨步—西鶴の「置土產」—アンドレーエフ—客觀といふこと—完全と矛盾—現今の文壇—デカダンの群—

文章より見たる現代の小說……一七六

一　革新以前の文章
二　鷗外と二葉亭
三　物語風の小說と描寫式の小說
四　白鳥と靑果と未明と
五　讀賣新聞に揭載された小說
六　自己描寫—草平
七　所謂新しい文章
八　荷風の文章
九　漱石と虛子
十　葉舟と小劍
十一　秋聲と藤村

文章新語……二一九
説明の文章—狀態描寫—印象的描寫—離れた氣分と情調—ノートと寫生—「筋」—文章と對話—新しき記行文—文章の調子—自然の描寫—手紙の雰圍氣—日記の種類—新しき情緒—新傾向の俳句—模倣と創意—文字の選擇と辭句の排列—觸れるといふ事—自然と不自然—再現といふ事—文章と型—
旅のインキ壺……二九五
三浦半島—漁師の家—波濤—岬頭—小國の美—大阪の感化—港
山水小論……二九八
現代の紀行文……三二七
諸家文章短評……三四九
短篇小説の話……三六〇

フロオベルとゴンクール……三七一
アルフオンス・ドオデエ……三九二
太平記と南朝の遺蹟……四〇三
「方丈記」に現はれたる源平の盛衰……四一五
「浦のしほ貝」に見出したる「自然」……四二六

目次終

花袋文話

描寫論

一

描寫論を始めるに當つて、先づ描寫と記述との區別を說きたいと思ふ。記述をデスクリプションとすれば、描寫はペインテングといふ字が適當して居る。

記述は叙述でする。一度頭腦に入つて抽象的になつたものでも、獨斷的になつたものでも、何でも彼でも記して置く。平面的であらうが、立體的であらうが、また作者の主觀が入つて居やうが、主觀と客觀とが混雜して居やうが、そんなことは何うでも好い。

物を記述するといふ心の狀態にある人は、實際から物を見て、それが實際に迫るといふやうに——讀者がその文の面から實際をそのまゝに見るといふやうに心懸けて書かうとしては居ない。寧ろ自己の見たり聞いたりしたものをある筋に抽象させたり、集中させたりして、そしてそれを傳へるやうにする。語る、話す、傳へるなどといふ狀態、さういふ處に留つて居る。

歷史の文章、科學の文章、哲學の文章、それから下つて、吾々が今日新聞雜誌に見るところのもの總ては、皆な記述——デスクリプションの文章である。

記述は平面と立體たるとを問はない。具象的たると抽象的たるとを問はない。意味が分かれば好い、筋がよく飲み込めれば好い。語らんと欲するところ、傳へんと欲するところがよく傳へられさへすれば好い。

從つて記述には說明が必要である。寧ろ說明があつても害にならないばかりではなく、それが簡單に筋なり趣意なりを語るのに有効なる場合が多い。

しかし、描寫といふ方から言ふと、それが全く違つて來る。描寫――描くといふことの目的は、趣意を傳へたり、筋を語つたりするのではない。又、事件を傳へるのでもない。眼から頭腦に入つて生々として居る光景をそのまゝに文の面に再現させて見せやうとするのである。ある三面種があると假定する。新聞記者はそれを見るなり探訪するなりして、それを自分の頭で判斷して、その一伍十什を記述してそれで滿足して居るが、描寫の方では其光景を其まゝに生生と再び現して見せやうとする。

かうであつたと說明せずに、かうであると描いて見せるのである。

梅が咲いて居る。これでは記述であつて描寫ではない。白く梅が見える。かうなると、いくらか描寫の氣が出て來る。吾々の前に咲いて居る梅の狀態が分明と眼の前に見えるやうになつて顯はれて來るやうに心懸けるが描寫の本旨である。

かれは雨戸を閉めた。

雨戸を閉める音が聞えた。

波の音がした。

波の音が聞えた。

何方も後の方が描寫の氣分に近い。

「鱗を書いた魚の形」とか「煙草を勸める女」とか言ふのもさういふ處から來て居るのであらうと思ふ。

寫生と言ふことも、其作者の心懸や氣分に由つて、或は叙述になつたり、或は描寫になつたりする。寫生文といふものは、文の種類で分類されたものであつて、記述、描寫といふやうな氣分から分けられたものではあるまい。寫生さへすれば描寫であるといふ風に考へて居る人があるが、あれは記述と描寫との區別をよく知らない爲めである。

二

小説に物語風のなくなつたのは、近代のことであつて、バルサツクあたりでも、隨分長たらしいお話風のテデアスな記述が多い。それは中心に入つて行けば、ペリ、ゴリオだのユーゼネだのには、いつか記述を離れて描寫に入つて行つたやうなすぐれた處が澤山あるが、それでも、其時分にはまた作者が自覺して描寫を心がけて居たとは思はれない。記述をしたり、お話をしたりしてゐる中に、いつとなく興が出て、我知らず描寫三昧、狀態描寫に入つて行つたといふやうな處がある。ツルゲネエフの「獵夫日記」なども記述と描寫と相半ばして居て、森林を描くにも、後に出たインプレツショニストのやうに、外面的に投り出したやうな描き方をして居ない。作者が記述したり説明したりして居る。

實際——現象に對しての作者の氣分如何。これが描寫と記述とに自づからな

る區別をなしてゐることは爭ふべからざることである。描寫論は無論、此處等あたりから説いて行かなければならない。

自然主義の運動、繪畫に於けるインプレツショニストの運動——かうした處から段々下つて説かなければならぬ。

現象を明かに映す主觀の心の鏡、その明快透徹なると、その朦朧曖昧なるとに由つて、主觀に映る現象が明かにもなれば、暗くもなる。

作者には、これを縱にして才分を要し、これを横にしては年齡を要する。其質如何に由つては、無論物を描寫するといふやうな氣分になられないものがいくらもある。寧ろ普通の大多數はそれに屬して居る。普通人の心理——さうしたものを此場合研究して見る必要がある。

人間——大多數の人間は生きるが爲めに生きて居る。實行の爲めの實行生活である。利害損失の上に築かれた利害損失である。

人間は必ず理想に捉はれてゐる。戀に於てもさうである。愛に於てもさうである。死に於いてもさうである。富貴名譽に於てもさうである。物質上にも、精神上にも何うかして滿足するやうな効果を得たいと思つて居る。

そしてまたこの理想といふものが、少くとも人間改善の方便として必要なものとなつてゐる。進化の理などといふものも此處に置かれてある。どんな人間でも、この理想を全然排除することが出來ない。

しかしこの理想に捉はれて居れば居るだけ、知識の道が開けずに居ることも事實である。理想のユートピアに住んでゐる人間は、多くは人間の本體如何といふ知識を缺いたお目出度い人間であるといふ傾向がある。

ごく通俗に碎いて言つて見ても解る。熱中したものは、多く誤つて居る。巴渦の中に居るものには、其眞相は解らない。憧憬と知識とは伴はない。

自然主義に排理想、排道德といふことがあつた。勿論、御存じであらうが、

これは知識を主とした文學上當然起つて來るべき問題であつて、またこれが文藝上の主義にとゞまらず、實際上の主義となるに及んでは、普通人間實行の狀態から、反對運動の起つて來るのも當り前のことである。

排理想、排道德、これを實行の上から言へば、到底絕對に行はるべきことではあるまい。生存を捨てゝまでも、吾々は理想を排し、道德を排することは出來ないものである。實行上に、新しい道德を提斷し、舊い理想を排却するのはそれは好い。私などもさうした人間でありたいとは思つてゐる。しかし生死を賭してまでもといふ段になると大に考へなければならない。

近代の文藝に勝利の悲哀といふことがある。又、肉と血の敗北といふことがある。押つめて押つめて行つて見て、そしてそこに悲壯を感ずるといふやうなキャラクターが多くの作の主人公になつて居る。しかしこれは藝術である。實行ではない。

生死を堵しても實行に赴く人は、一種のキャラクターには相違ない。しかしそれは藝術家には遠い。

しかし實行は其人の藝術の背景を成してゐる。であるから、私はかう言ひたい。熱烈なる實行家にして、それに捉へられざる忍耐と知識とを有せる人――精神上の火水の爭ひをもじつと默つて見て居るやうな人――

此處に至つて、藝術家の心理の悲痛といふことが起る。

熱烈なる實行の精神を有しながら、それに捉へられざる心の忍耐、苦痛。

三

『描寫は描寫の爲めに貴いのではない――』

これは實際であるが、私は更に問はうと思ふ。

『描寫する氣分にはいかにして到達した？』

普通人の言ふを敢てしない、語るを敢てしない、記するを敢てしない陋劣卑怯の狀態をも、人性陰忍の狀態をも、殘酷無慘の狀態をも猶ほ且つ描寫して憚からないやうな心の狀態に何うして到達したか。それを考へて見ることを諸君に勸める。單に「われは藝術家たるが爲め」であらうか。又、「かういふ處を覘つて寫生しなければ變つた作が出來ない」爲めだらうか。それはさういふ作者もあるかも知れない、さういふ藝術家たる人もあるかも知れない。――否さういふ藝術家があるとすれば、さうした記述なり描寫なりに、一種面白い可笑い色彩をつけて描くに違ひない――諸君は之の忌憚なき描寫の陰に作者の悲痛なる主觀の悶えを見なければならない譯である。作者の大小緩急の主觀を見なければならない譯である。

何を描いても、作者が描寫する氣分になつた處に、少なからざる藝術の意味がある。記述したり、說明したりする中は、また其作者の主觀が普通の人々の

やうに熱したり覺めたり、批判したり斷定したりする程度にあるのを證明して居るが、それが一度實行に捉へられざる忍耐と智識とを具へて來ると、其處に初めて現象を其まゝに描寫して投つて置かうといふ氣分が出て來るのである。

傍觀的態度にいふ言葉は、いろ〳〵に誤解されたり、惡用されたりしたが、私はさういふ意味に於ての傍觀的態度でなければならぬと思つてゐる。つまり實行を敢てしない忍耐と知識との間に生れた態度でなければならぬと思ふ。

傍觀的態度は、さういふ風に藝術の境に留めて置いてあるが、これが實行の場合にもある程度まで用ゐられ、で行く。この態度は改めて言ふと、分析即ちアナリシスといふことになつて行く。

分析といふことは、實際方面に於ては、無意識にはよく用ゐられてあるが、意識的に餘り極端に用ゐられると、實行の妨害をしたり、實行の熱を失つたりすることが尠くない。意識的分析といふことは、藝術家にして始めて許される

ことではないかと思はれる位危險なるものである。

冷淡、冷笑、否定――かうした氣分がこの分析といふ態度から、必然の結果として生れて來る。白眼世上を見るといふやうなところも出て來る。

ニイッチエの影響を受けた無數の小ニイッチエの弊害が、一時獨逸文壇に跋扈したやうに、分析の氣分に到達せず、分析の質を有せざるものが、一時分析の模倣をしたその弊害は、矢張我が文壇にも、我が實際社會にもかなりに多くあると思ふ。

分析を好むものゝ弊は、無信仰に陷り、懷疑に陷り、不安不定に陷り、空虛に陷り、敗德に陷る。

『良醫にして始めてメスを取るべし』

私は常にかう思つてゐる。

バウル、ブウルジエの作に『弟子』といふ作がある。それはフランスの青年の

分析癖を諷したもので、分析の結果思ひもよらぬ身の破滅に到達することが書かれてある。そして著者は長い序文を書いて、To young men と書いて居る。

分析をして、分析に捉はれない人にして、――傍觀的態度を持して、傍觀的態度に捉はれないやうな人にして、始めて分析、傍觀的態度を口にすべしである。

描寫の氣分に達することと、描寫的に物を見る質の有無とは、藝術家の資格を横からと縱からと說いて見た形になつてゐる。描寫にあらずんば、現代的小說の極致に至ることは難い。

四

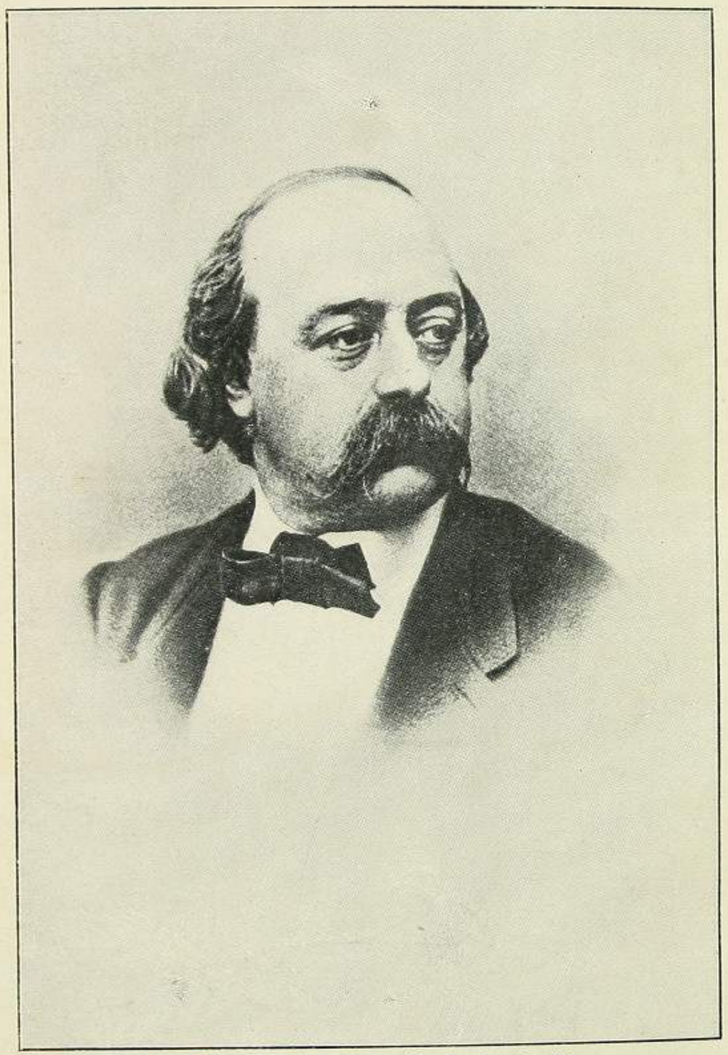
描寫する氣分に赴くといふことは既にこれを述べた。そしてこの氣分の度數が千から億までである。

其度數は作者の頭腦と修錬とにある。頭腦の方は記憶力の健全、觀察力の正確などである。修錬の方は現象の顯はれ方に注意して自然のコンポジションを洞察するやうに心がけることである。

記憶力と言ふやうなものは、其人々の箇々の質に由つて、其根本は如何ともすべからざるものであるけれど、注意する度數如何、熱心の度如何などに由つて、其力を增進することはいくらも出來る。

觀察力、これも矢張才分にあるが、物に促はれずに、少しく心を落附けて、其の周圍を見廻すといふ習慣をつければ、其正確の度を增進させることが出來るものである。

觀察力には、經驗の豐富といふことが何うしても伴ふものである。經驗が無ければ、どうしても物を見るのに、一角から見るといふ形になる。彼方からも此方からも見るといふやうな複雜した觀察が何うしても出來ない。それに、一



グスタアフ・フロオベル

角から見れば、何うしても觀察が不正確になり易い、偏より易い。行き屆いた觀察が出來ない。

しかし經驗をしろと言つても、無闇矢鱈に經驗に經驗をせよといふ譯ではない。世の中には多い經驗を積んだ人はいくらもある。苦しい辛い此世では得られないやうな經驗を積んだ人も少くはない。しかし普通人に取つてはそのやうな經驗が大した利益にならない。大抵は忘れて了つて居る。忘れて了つて同じやうな經驗を二度も三度も繰返して居るものさへある。かういふ人に取つては、豐富なる經驗も決して豐富とは言へない。私の言ふ豐富なる經驗と言ふのは、經驗した事件の心理を細かく注意して見て置いたものの幾箇も重さなつたものを言ふのである。

ある事件――どんな事件でも好い、小さくつても、大きくつても。その成行をじつと見て居て御覽なさい。其處からいろ〳〵な無言の教訓が得られるもの

である。かうなるだらうと想像して居ることが事件の心理的進行につれて、グングン變つて行く。吃驚されるほど思ひもかけない方に變つて行く。つまり「行かんと欲する處に行く」といふその行き方が人間の想像では何うしても知ることが出來ないほど、複雜を極め、變化を極め、微細を極めて居る。私などもさういふ時に當つて、いつも人間の小にして自然の大なるを痛感させられる。

處がかういふ微細な心理的經驗を幾箇も積んで知つて居ると、その想像も單なる想像ではなく、事實を背景にした想像になつて居るから、中らなくとも遠くない觀察をすることが出來るものである。

自然のコンポジションといふことも、小說構成上には、甚だ必要なことである。或はこの自然のコンポジションといふことが藝術に於て、最も難かしい、最も意味のある深い處かも知れない。

自然のコンポジション。かういふと簡單だが、實際自然のコンポジションと

いふことを考へると餘程難かしい。自然にコンポジションありや否？これが既に一問題である。自然は外物としては、唯あるだけで、ザインだけで、コンポジションなどといふものはないと言へないこともない。

翻つて自然の一部分たる人間たる自己を考へて見る。自己にコンポジションありや否？これ又一問題である。自己といふ、ある心理を持つた人間が此空間に存在して居るといふだけで、別にコンポジションと言つたやうなものもない。

しかし無いと言へば無いが、あるといへばある。自然の推移、なるやうにしかなつて行かない、逝くものは再び歸つて來ないといふやうなものがある。

自己の無と外物の無と相觸れて、其處に一種の有を生じて來る。

私は私の經驗上、この自然のコンポジションの剪栽如何と、印象描寫の色彩の用ひ方如何と、この二つが一番藝術製作上に必要であると思つて居る。

繪畫上のインプレッショニズム。私は餘りその方を詳しくは知らないが、モネの停車場だとか、舟行だとか、ピッツアロの田舍の景色だとかに、さうした著しい傾向が見えるやうに思ふ。

ある場所からある場所までを、ちよきんと切つて、無造作に投り出してある。畫面の上にも何等の剪栽も何等の統一をも加へて居ない。舟がごた〳〵と並んで通つて居れば、ごた〳〵通つたまゝにして置く。がらんとしてをれば、がらんとして置く。昔の理想家はこの舟が餘り重り過ぎる。この家が餘り出すぎてゐる、この松は少しじやまだ。かう言つて、あつちこつちを切つたり取つたり加へたりして、それを自分の美と思ふ所へ持つて行つて好いやうに塗抹した。つまり自然のコンポジションではなくつて、自己のコンポジションになつて居る。自己の好んだまゝに自然を修正したり、自然を潤色したりした。インプレッショニストには、さうしたところはないやうだ。舟が重つて居れば重つたま

まで好い、松が出て居れば、出て居るまゝで好い。つまり現象の再現を無條件で試みやうとしてゐるのである。

であるから、無條件であるから――インプレッショニストの繪畫には、鳥渡見ると、技巧が見えるばかりで、主觀方面、即ち作者の内部の方面は、丸で無いやうに見える。作者は唯、自然の複寫を造つてゐるやうに見える。色彩の濃淡、光線の感じなどにのみ心を注いで居るやうに見える。これが印象派の技巧派と見らるゝ所以である。しかし作者の考では、決してさうではないと思ふ。自然を其まゝに寫さうとした心持が一つ。自己の考へや思想判斷などは到底生々としたものは出來ない、其位の思想、判斷程度の人にはいゝかもしれないが、それよりもつと進んだ人、眼の明かな人、頭腦の複雜になつた人には、偏つたものとしか見えないに違ひない、それでは自然を寫すといふことに於いて不滿足だから、出來るだけ自分を空うしやうとしたことが一つ。主觀を思想や批評

見たやうに表面に明かに出さずに、唯作者の持つてゐる總て――人格、技巧、修養、趣味、などを具象的に顯はさうと心懸けたところが一つ。またその他にもあるかも知れぬが、兎に角かうした作者の内部方面の苦心があると思ふ。

印象派は、だから、繪畫でも、小説でも、そこから受ける感じは、作者の主觀全部が具象的になつて入つて來る感じである。作者に由つて――作者の個人的内容に由つて、其全部の感じが、個々別々で丸で違つては居るが、自然に對してある成心や判斷を持つて居ずに、モネの見た自然ならモネの見た自然、シスレーの見た自然ならシスレーの見た自然、ゴンクールの見た現象ならゴンクールの見た現象と言つたやうに、動かすべからざるものになつてゐることは一樣である。この主觀方面を考へて見ることは肝腎である。

主觀と言ふと、人はすぐ思想とか判斷力とかに持つて行きたがる。しかし主觀にも無數の度數がある。ピンからキリまであるのである。青年時代の主觀も

ある。中年時代の主觀もある。老年時代の主觀もある。これは縱から見た主觀の度數である。經驗の多い人の主觀もある。經驗の少ない人の主觀もある。經驗をしたり學問をしたりしても更に大きな影響を受けない人の主觀もある。これは横から見た主觀の度數である。だから作品を見て、其作家の主觀如何を點檢するやうになる批評家及論者は一度を進めた批評家及び讀者であると私はいつも思つてゐる。

この人の作品に顯はれた主觀は、何の位の程度の主觀であるか、この作者の作品に顯はれた主觀は、何の位の主觀であるか。批評家及び讀者は、先づ第一にさういふところを見なければならない。主觀が思想や判斷になつてゐるか、それとも作者の總てから出て來る感じになつてゐるか、これを見分けなければならない。そしてまたその感じの無數の度數を點檢して見なければならない。更に詳しく言へば、批評家及び讀者も自然に似た心を持つて作品に向はなければ

ならないのである。

これは今日の文壇に例を取つて見ても直ぐ分る。昔の作家は落ちを考へた。序破急などといふことをも考へた。今の作家でも思想を得、構圖を得て、これに肉をつけたやうな作をする人がいくらもある。さういふ人は現象から生々としたものを捉へて來たのでなくて、思ひ付きから得て來て作をするのである。主義、主張の方便に藝術品を遣ふのと、いくらも違はないことになる。淺薄ならざらんと欲するも得んやでする。

人によると、ゾラのルーゴンマッケルの計畫——あれを大規模だとか何とか言つて賞する人があるが、私などはあの計畫を賞めやうとは思はない。むしろその細かい處に奇姿横生と言つたやうなところがあるのを取る。ゾラにその細かい處がなくつて、あの大規模だけだつたら、決して人を動かしはしまいと思ふ。

フランスのあの自然派の中で、トオデエなどの貶されるも、さういふ處である。かれは長い作を書くやうになつてから、識者の間に段々聲價が落ちて來た。普通では、ナポップだとか、ヂヤックだとか、フロモンリスリーだとか、ポピユラアノーベリストになつたのであるが、全體に一種の趣向があり、構圖があり、場當りがあるので、何處かかう通俗小説と言ふやうな臭氣が出て來た。文章の旨いといふことより外には、全體に藝術的といふ感じが少くなつて來た。

處が、かれの長篇の中に、Kings in iexile いふのがある。これはゴンクールにヂデケートしてある。フロオヘルが死に、ツルケネッが死に、段々其群が凋落して、後には兄のコンクールがドオデエと非常に仲が好くなつた。かれはドオデエの家族ともよく往來した。かれがドオデエの別墅で死んだ。これを見ても、その交情のいかに濃かであつたかが解る。私が思ふに、それで、ドオデエはその Kings in exil. をコンクールにデヂケートした、それもあらうが、その外にゴンク

ールの手法の感化を大變に受けたといふ意味もあらうと思ふ。

Kings in exil はドオデエの他の長篇に比べては、見方描方が非常にインプレッシーブである。餘程ゴンクールの手法に似たところがある。あの大きな通俗的の材料が藝術品の色を帶びて、かれの長篇中にかゝやいてゐるのは注意すべきことだ。

フロオベルがその複雜した性格と類ひ稀な勇しい藝術觀とを抱いて、其の不遇文人の群中に長者の趣を呈してゐたことは、誰も知つてゐることである。サランボーのやうな濃厚なる方面と、センチンタル、エヂケーションのやうな平淡なる方面と、行く所として可ならざるなきかれの才能と努力とは、實に驚嘆に値する。ゴンクール兄弟が、フロオベルと稍々趣と異にして、この群の中に居たことを此處に少し言つて見たい。

ゴーンクールは飽まで人生派であると共に藝術派であつた。矢張フロオベルのやうにロマンチック、リアリストであつたが、フロオベルのロマンチックの方面を内容まで持つて行つたのと違つて、かれは手法描法にそれを持つて行つて、内容にはつとめてさういふ傾向を避けやうとした形跡がある。ゴンクールの作には、内容にはロマンチックといふやうなところは少しもない。ロマンチックのことでも、ロマンチックに見て居ない。

かれの書いた作は、多くは心理小説である。病的小説である。かれの作中には屹度精神に異狀を呈したやうな人物が出て來る。ゼルミニイ、ラセルトウ然り、シスター、ヒロメーヌ然り、ルネ、モノラン然り。ラ、フオスタン然り、もしこれが現今の露西亞の作家であれば、グン〳〵内部まで入つて行つて、其病的心理を解剖し盡して見なければ止まないやうな材料である。つまり實感を以て人を動かせば、どのやうにも動かすことが出來る材料である。それをかれ

はつとめて冷靜に、つとめて平氣に描き出した。作者が作中の人物と一緒になつてゐるやうな處は少しもない。また作中人物の心理を想像して、無理に取つてつけたやうな描寫を遣つたやうな處は何の頁にも見えない。いかにもノートにノートを築き上げて、その中から必要のことだけを省略してホツ〳〵と印象的に並べたといふやうな處がある。つまりかれは實感的效果の多い材料をつとめて殺して書いてゐるのである。

であるから、かれの作品から受ける印象は、作者が判斷したり、考へたりするより來る感じではなく、かれの持つてゐる總べてを透してあらはれて來る人生の姿である。漠然として居るだけそれだけ、種々の問題を其中に包んで居る。

私はこのフランスの作家の描法を、露西亞の作家の描法に比べて見て、いろいろなことを考へさせられた。其の差違殆と兩極とも言はるべきほど離れて居るのを先づ第一に考へた。露西亞の作家は、何も彼も書かうとした。何んなに

混雜して居ても構はない、何んなに密細なことでも構はない、作者が離れやうが即かうが、そんなことを顧みて居る暇がないといふ風に見えた。ゴンチャロフの『コンモン、ストーリー』を讀んで見ても解る。また此人の感化を受けたといふ二葉亭の『浮雲』を見てもわかる。『浮雲』の作者の書いたものと、『春』や『家』の作者の書いたものを比へて見てもわかる。同じ心理描寫を心がけて居ても、その藝術的なところと實感的なところとは夥しい差違である。一は內面から外面に行き、一は外面から內面を透して見るといふ趣があるばかりではない、全體の調子に於て、心持に於て、觀方に於て既に全く根本を異にして居る。トルストイ、ドストイフスキー皆んなさうしたゴンチャロフの脈を引いて、そしてそれよりも一層熱烈な人生派に進んで居る。同じ病的な人物を取扱つてゐながら、『罪と罰』と『ゼルミニイ、ラセルトウ』との差違を見たならば、人はその描法のかくまで違つてゐるのを驚かないものはあるまい。

フランスの作家の群の中で、ソラが何うかするとロシアの作家のやうな心理描寫を遣ることがある。かれの作に、『テレセ、ラカン』といふのがある。初期の作で、かれの出世作と言つても好い位の作である。それの出た時には、褒貶共に盛で、一面では其暗面描寫のすぐれてゐるのを認められると共に、一面ではその不道德の書であることを烈しく非難された。此作がロシアの作家の遣るのと稍々似たやうな心理描寫を遣つて居た。全體の調子がペインテングといふよりも、デスクリフチーブで、グン〳〵太い線で、遠慮せずに書いて行つた處がある。しかしこれでも、『罪と罰』と比べて見ると、また餘程藝術的なところがある。『罪と罰』を讀んでゐると、次第に暗い人生の巴渦の中に引込まれるやうな氣がするが、ゾラの方のは、矢張暗黑な人生を藝術的に見せられたといふやうな氣がする。その結末などは、ことにさう思はれる。

五

人生派と藝術派といふ言葉を此頃よく耳にする。開いた心と押へた心。それで稍々此の二つの態度を區別することが出來ると思ふ。勿論此處に言ふ藝術派はデレッタンチズムを指して言ふのではない。自然人生を前に置いて、そして其の現象を離れて見るといふやうな作家の群を指して言ふのである。今の明治文壇で言つて見れば、泡鳴君の態度と藤村君の態度と言つたやうな違ひである。

ロシアには、開いた心の作家が多い。ロシアでは、ナチユラリズムはコゴリあたりから出發して、自然に發達したと言つて居る。フランスのナチユラリズムなどとは丸で系統を異にしてゐると言はれてゐる。實際さうだ。フロオベルのやうな押へた心の作家は殆どない。ゴンチヤロフなどは比較的客觀的の要素と備へだ作家だが、それでも決してフランス流の藝術派ではない。チエホフが

稍々離れた技巧を備へてゐるが、これとて、偶々かれの經た時代が消極沈滯の時代であつて、實際上には、手も足も出なかつたところから出て來た「離れ方」であつて、藝術上の主張から來た「離れ方」でないのは、モウパッサンの作品と比べて見ても、よく解る。

トルストイの「藝術論」は主としてフランスの藝術を評したものである。贅澤無意義、虚僞などといふ字で、かれはフランス風の藝術と藝術家を批評してゐる。人生派たるトルストイの立場からは、藝術派たるフランスの作家の群の心持が解らなかつたと言はれても仕方がない。むしろ自己告白の作家、實感を唯一の内容とした大作家には、フロオベルのやうな藝術萬能の心持が解らう筈はなかつたのである。

「モウパッサン論」の中にある作品に對する道德論も矢張さうした人生派の立場が出て來てるので、かれは「女の一生」から「ベラアミ」「ピエル、ェ、ジエン」と

段々その背景のモラルトオンが低くなつて、段々流行作者の低い列に落ちて行つたと言つてゐるが、私などの考では、「女の一生」よりは「ベラアミ」、「ベラアミ」よりは「ピエル、エ、ジエン」と段々再現の境に近くなつて作者の人生觀、思想などといふことに支配されなくなつてゐると思ふ。モラルトオンなどといふもので背景を塗られてゐずに、もつと廣い意味の自然に近い主觀になつてゐると思ふ。

批評家は「ベラアミ」の陰には作者の人道に對する憤怒の聲が聞れるやうだと言つた。しかし私は思ふ、さう見るのは、人生派の立場から見た見方であつて實はあの作の陰に憤怒の聲などを聞かれやうとは作者は豫期して居らなかつたのではなからうか。作者は唯冷靜に自然の再現を試みたに止まるのではないだらうか。

再現——描寫と言ふことを完全に行はしむるには、人生派の立場では、ま

だ本當にその目的に進むことが出來ないと私は思ふ。泡鳴君の『放浪』あれを近頃讀んだが、あれなどを例にして見ると、一番それがよく解る。人生派に近い泡鳴君は、まだ好惡是非などといふ處を離れて居ない、現象を現象として見るといふ氣分に達して居ない。その證據には作中の人物に對して、作者は恐ろしい判斷の斧を振つてゐる。勇夫婦に對し、氷峰に對し、作者は如何なる權利があつて、かうした判斷を下すことが出來るかと思はれる位である。それは『放浪』の主人公と勇夫婦と氷峰と、皆違つて居るのは異論はない。しかし藝術家の立場として、殊に再現を作品に望む私から見ては、區別差違は認めるが、その間に價値は置きたくない。價値は讀者がその描寫の中から得て行くのに任かせて置きたい。それから又『放浪』の作者は何故勇夫婦や氷峰に向つて揮つた判斷の斧を主人公の身の上に揮はなかつたか？これを私は考へて微笑した。主人公を主人公と是認してゐるのは好いが、作者が主人公の遣つたことを肯定して、あ

まつさへ其處に意味をつけやうとしてゐるのは、餘りに無邪氣でそして滑稽ではあるまいか。

人生派の作者はよく內容のことを云々する。內容、內容とは何ぞやと私は反問したくなる。內容とは作品が持つて居る再現の度數の高低多少、それならば私は異論はない。しかし多くの人のいふ內容はさうではないやうだ。作品の中に含まれたる作者の人生觀、思想から來る判斷、材料から來る事件の大小、さういふものを指して、內容と言つてるやうである。それならば、私は內容といふことは作品の筋などに一歩を進めた位のもので、別に大したものではないと思ふ。

しかしこれは、私が再現——描寫といふ氣分に到達する道順から言つた議論であつて、人生派の藝術に價値を認める認めないとかいふこととはおのづから別問題である。

六

トルストイは苦んだ人である。しかしフロオベルの苦しみ方は丸で別であつた。苦しい時には神をも念じ、無意味と感じた時には藝術をも捨て、押へずにドシ〴〵進んで行つて其處に何んな意義でも好いから生存の意義を發見して行つた人である。垂死の老翁にして猶且つ夫婦喧嘩を遣るやうな即いた人である。であるから、かれはフロオベルのやうに人生を醜惡だなどと見て、藝術にかくれるやうな心持を一度でも起したことはない。人生が醜惡と見えた時には、かれはそれを醜惡でないやうにしやうとした。人道の賊と見れば、直ちにそれに向つて攻擊した。惡いところはドシ〴〵改めて行つた。これが自分の人間としての勤めだと、かれは思つてゐる。かれは藝術家といふよりも人間であるといふ立場に立つて一生を奮鬪の中に送つた。

アナリシスにアナリシスを重ねて、冷かに人生と自然とを見た果てには、何うすることも出來なくなつて、暗い壁に向つて一日じつとして居るやうな人になつたフロオベルに比べて見ると、其處に藝術派と人生派の好い對照を認めぬ譯には行かない。

フロオベルが、閨秀作家ショージ、サンドと往復した手紙が數通ある。フロオベルがアナリシスに就いて言つた手紙の返事に、サンドは『さう言つても同情といふことをさういふ風に排しても、人間には同情といふことがあるぢやありませんか』とかう言つてゐる。つまり哀憐(ヒツチーレスハート)なき心になることは到底出來ないといふことを言つたのである。

「椿姫」のやうな人情小說を書いた小デユマも矢張哀憐なき心になることの出來ない作者の一人であつた。動物學者が一動物を分析するのと人間が同じ血の通つてゐる人間を分析するのとでは大變な違ひである。動物學者は一動物を平

氣で分析することが出來るが、人間ではさうは行かない。そこに同情に對する議論も起るし、モデル問題も起る。實行と藝術との矛盾衝突も起つて來る。ブルンチエルはナチユラリズムを評して、此處に蔽ふことの出來ない缺陷があると言つて居る。

フロオベルが晩年其の藝術論に捉へられて、足も手も出なくなつて、暗い壁を見詰めて日を暮すやうになつたといふのも其處から來て居る。

モウパッサンの晩年の作品が段々主觀の色を加へて來て、遂にあゝした最期を遂げるに至つたのも其處である。

今の文壇が冷めたい灰のアナリシスに滿足することが出來なくなつて、主觀方面に出て行かうとして居るのも、矢張其處から來て居るのである。

私はある友達と此の難かしい境を話し合つたことがあつた。『其處は苦しい辛い場所ですからな』其友達はかう言つて、長大息を吐いた。そしてすぐ言葉を續

いで、『何うもさういふ境にまで跟いて行く人もありませんからな……しかし、私の考では開いた心より押へた心、そこに行つたフロオベルの方がトルストイの行つた道路より大きいのではないでせうか』

何方が偉いか、何方が大きいか、それは別問題として、兎に角この二つの路があることだけは確かである。無意識のアナリストと意識せるアナリストと、ロシア文學には無意識のアナリストが多い。

私は又他のある友達に此の論をした。と、其友達は、『僕等も分析といふやうな氣分になる事は度々ある。しかし實行上では、このアナリシスといふことは好いことぢやないと思ふ。何うも分析する心地はヒュマニチーと相阻格するところがある。不眞面目になつて行くやうな氣がする。』かう言つて私の顔を見た。

私は續いてそれから起る實行と藝術との矛盾を話し、藝術家は普通の人間の樂み苦み考へるところのものとは全く違つた路を行かなければならぬといふこ

とに及び、其處に如何ともすべからざる寂しさ苦しさがあると話すと、其友達は輕く、『藝術はいかに貴くとも、さういふ苦しい境に入つてまで、懊惱する必要はあるまい。厭なこと、苦しいこと、不自然なことは、ドシ〳〵やめて了つた方が好いぢやないか』

私はこれが普通の人の心であると思つた。即ち好惡を有し判斷を備へた心である。敵を惡み味方を愛し美を好み醜を憎む普通の人の心である。更に詳言すれば、アナリシスの加はらない心である。

『藝術あつてのライフではない、ライフあつての藝術である』これはフロオベルの向ふ側に立つた小デュマなども言つて居る。しかしそれは普通の心であつて、フロオベルのやうな藝術觀に到達しなければ、本當のライフを再現させることが出來ないのではあるまいか。いかなるものをも忍び見る冷かなる心、それがあつて、始めてライフが明かに描かれるのではあるまいか。

しかし人生派と藝術派、この二つのものをかういふ風に分けて言はずに、二者の統一と言つたやうなところに一種の調和を見出すことが出來るかを知れない。しかし、これは單なる理想であるかも知れない。

七

兎に角現象を現象として見る氣分、其處から新しい描寫論が出立する。そして始めて再現といふことが言はれる。

事實と想像といふ議論も、この現象を取扱ふ上に於て、非常に注意すべきことであると思ふ。事實其ものに意味を發見して、人生の雜多紛々を唯單に雜多紛々とせずに、其處に意味を發見する處に、現象を現象として見る氣分がある。

これは平凡なる事實、これは煩瑣なる事實と言はずに、平凡煩瑣の中に意味深い事實を發見するところに、事實といふことが意味を持つて來る。

自然はいかなる形式を以て顯はれて來ても、必ず人の想像することの出來ないオリジナリチーを持つて居る。想像はいかにも自由である。何んなことでも想像が出來る。しかし自然に逢ふと、雪が朝日に逢つたやうに忽ち解けて了ふ。アンドレエフの作品が讀んで居る中は面白いが、跡に深い強い印象の殘らないのはその爲めである。夏目漱石氏の描く人物が深い個性に入らずに、類型の程度に留つて居るのもまたその爲めである。

「門」に出て來てお米と宗助に就いて見ても、二人があゝいふ生活をしてゐるだけは解るが、それ以上に三人のパアソナリチーといふやうなものは出て居ない。あゝいふ三人を自然にあつたものにして考へて見ると、何うしてもあれだけであるとは思はれない。生きたモデルがあつて、作者が十分に其眞相を描かうとする心があつたら、決してあれだけではたゞ下らないと私は思ふ。そればかりではない、漱石氏の作には、よく作中人物の心理を揣摩して書いてある。

そしてそれが作者の想像した一般的類型的の心理で、作中人物の箇々の心理でないことがよくある。そして氏はさうした心理は描くが、狀態描寫（此處から默つてゐても作中人物の心理が出て來るのである）には、甚だ力を注いで居たい。細かい雜多紛々が狀態を現はす上に於て、非常に有益であるといふことなどは殆ど考へて居られないやうに私には見える。

作中人物の心理を揣摩して書くことが、創作上、類型に陷り易く、說明に陷り易いので、それで或たけそれを避けて、狀態描寫を遣らうとするのである。想像に賴らずに事實に賴らうとするのである。想像と事實との本體論などは、實は何うでも好いのである。

世の中にはよく完全にいふことを心がけて進んで行く人がある。結論に達しなければ承知が出來ない人がある。由來結論とか法則とか言ふものの役に立たないことは分り切つて居る話である。私はいつも文壇で度々論じられる「事實

と想像」との問題がいつもこのつまらぬ本體論になつてゐるのを馬鹿々々しく思ふ一人である。

何事に由らず、實際界に於ても藝術界に於ても、結論に達しないまでの間に於て、面白い有益な價値のある氣分があるのである。其の細かい空氣を知らずに、すぐ結論に持つて行つて、其是非を一擧に決しやうとするのは、甚だ淺薄なつまらないことである。「事實と想像」の問題も其細かい處に入つて、今少し深く考へて見たなら、描寫といふ上に於て、非常に利益のあることゝ思ふ。

描寫に就いては、また言はなければならないことがかなり多い。しかしそれは一々作品の文章、氣分に立入つて論じなければならないことで、此處では詳しく論ずることが出來ない。しかし現象を現象として見る氣分が分析といふ位置を基礎にして出發して、人生的藝術派と言つたやうなところに進んで行つて、

其處に眞の描寫の氣分を出して來るといふことに就いては、一通りは言つた積りである。

明治の作品研究

一　紅葉の『多情多恨』

紅葉山人の作中で、兎に角批評することの價値のある作は、『多情多恨』一篇である。流石に作者自身も、『自家の米の飯だ』と言つただけあつて、あの時代にあつて、あゝいふ平凡日常の境に手を着けたのは偉いと言はなければならない。兎に角全體のコンポジションがライスライキと言ふ處を覘つて居るし、それに平凡日常の生活に再現の氣分を現はさうと心懸けて居るところがある。結末の一段、鷲見が葉山の家を去つて下宿住ひをする所などは殊にすぐれて居る。

「花も無しに……」といふ一句で解決をつけずに筆を擱いて居る氣分がいかにもアーチスチックである。此作中に書いた人達以外のライフが卷外に無限に展けられてあるやうな氣がする。

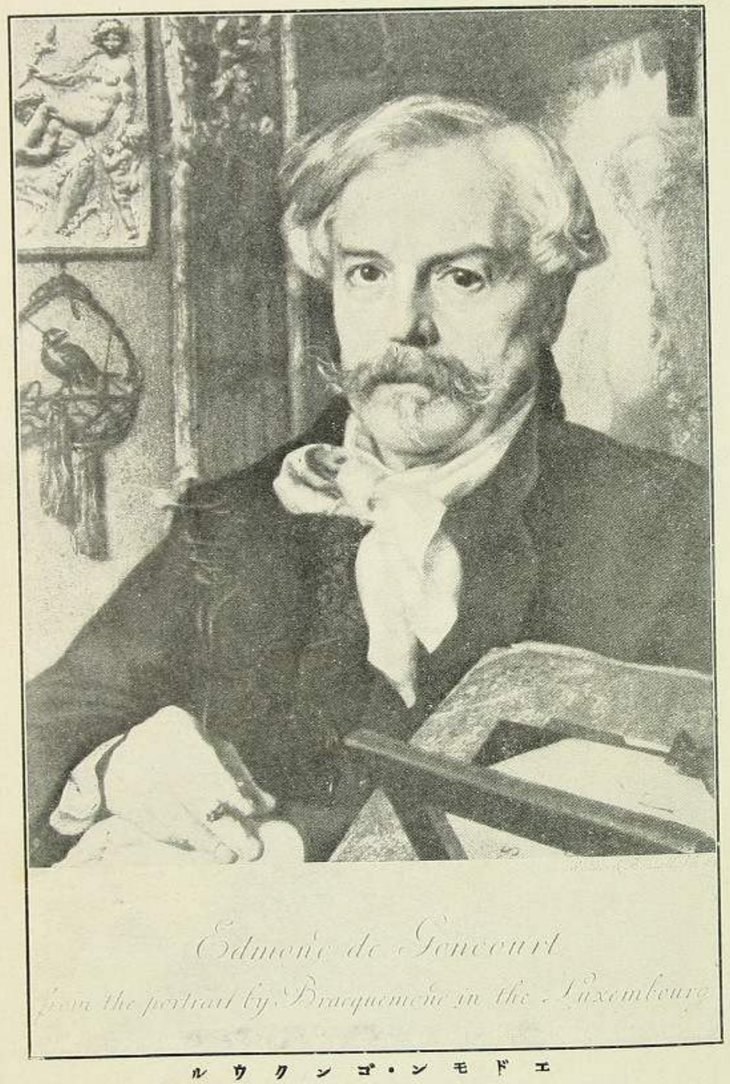
しかし鷲見の描寫は非常に拙い。想像で、無闇に誇張して書いてある。人形を取扱ふやうな心持で、作者の目的通りに右に向かせたり左に向かせたりして居る。血の通つて居る人間とは思はれないやうなところが到る處にある。鷲見柳之助は個性を完全に持つて居る人間ではなくて、作者のある思想の下に拙く集中された人物と言つて差支ない。墓詣に行く途中、二人乘の車に打つかつて南天の枝を落すところなど、作者は最も得意らしい筆を用ゐて居るが、この得意が尠なからず作品に惡結果を齎して居る。苟くも筆を執る以上、其事件や其内容に興味とか判斷とかを持つてはならないといふ嚴正な藝術的氣分は、まだ其頃には作者には解つて居なかつたと見える。お島の眼鏡を壞すところなど殊

に厭だ。

それから注意すべきことは、想像と事實とのいかに此作品に働いて居るかといふことである。モデルがなくて、想像で書いたところは皆な拙い。また、モデルがあつても、作者が面白がつて書いて居るところは、屹度その眞相が出て居ない。葉山と鷲見と、待合に行くところなどはその好い例である。それに引かへて、モデルがあつて、作者が面白がつたり興がつたりする餘裕のない葉山やお種や老人は非常によく出て居る。生々としてゐる。いかにも作者が生きた人生の中から其まゝ再現して來たやうなパアソナリチーを持つて居る。

想像は證券のある想像でなければ、作中に用ゆべきものでないといふことはこれでもわかる。

二　一葉の『たけくらべ』



エドモン・ゴンクウル

一葉は内容と再現の氣分に於て、紅葉山人よりも或はすぐれて居たかも知れない。かれには紅葉の作品に見るやうな面白がつたり興がつたりするやうなことがない。生活難の中に、短かい一生を終つたかれには、さうした贅澤な暢氣な不眞面目なところはなかつた。寧ろそれとは正反對に世を呪ひ人を呪ひ自己を呪つたといふやうな處が到る處にある。かれの初期の作品を見ると、さうした傾向が歴々と作品の上に現はれて居て、誰も作者の艱難と不遇とに同情して呉れない恨が露骨に出て居る。『ひねくれた女の作』と言つたやうな厭な臭がある。

女の作者が、所謂分析の境に達することが出來ないのは、ジョルジ、サンドがフロオベルに與へた手紙を見てもわかる。女は男よりも一層同情の境を脱することが出來ないものである。主觀の境を脱することが出來ないものである。普通の人のするやうに、恨んだり嫉んだり泣いたり笑つたりしてゐる。そしてそれをすぐ作品の上に顯はすものである。それを一葉はその後半期に於て全く

脱却して居る。如何な心の閲歴の下に、さうした境に達したか解らないが、『濁江』を書く頃から、作者の心の上に大きな變化が起りつゝあつたことは事實であるらしい。

『たけくらべ』は再現の氣分に富んだすぐれた作品である。其當時多く世に顯はれた作品のやうに、中心點を求めたり、燃燒を施したり、觀念をあらはに露はしたりして居ない。解決を欲さずに、ライフの赴くまゝに赴かしめて居る。そして其背景に如何ともすべからざる一味の悲哀を藏して居る。いつまでも殘る作だと思ふ。

三　柳浪の『今戸心中』

柳浪のリアリズムは、矢張判斷の加はつたリアリズムである。それに、かれは人情といふ境を一歩も越えることが出來なかつた作者である。かれの作は『黑

蜥蜴』のやうな觀念小說となつたり、『今戸心中』のやうな同情小說となつたり、『目黑小町』のやうな人情小說になつたりした。

リアリズムの作者が必ず注意を拂はなければならない寫生、それをかれ位おろそかにした作家はない。紅葉は寫生を重んじた。天外も亦寫生を重んじた。しかしかれは一室にこもつて、自己の經驗したことと、その經驗の達することの出來る範圍内の想像とに由つて筆を執つた。郊外に出て天然を寫生するといふやうな畫家の氣分は、遂にかれに望むことが出來なかつた。

從つてかれのリアリズムは、深く核心に達したものではなく、平板な抽象的なものであつて、深く人生を味はせるといふよりも、實感を以て低級の讀者を動かすといふ程度に止まつてゐる。一時、『變目傳』『龜さん』などといふ暗面描寫の作を公にしたが、それとても中心からそれに深い意味を感じたといふよりも、さうした異常の事件と性格に興味を持たといふ程度である。

普通に言ふ人情といふことは、藝術家に取つては低い程度のものである。人情といふ境に留つて居る作家は、アナリシスなどといふ氣分には達することが出來ないものである。自分も解剖されるのが厭だから、他人も解剖しない。かういふ氣分ではまことの深いリアリズムに達することは難い。

小デユマの『椿姫』や『クレメンソオ、ケース』や『マダム、アンネツト』や、さうした作品が同じリアリズムであつても、フロオベルやゴンクールの執つたリアリズムに比べて、其の深さに於て、分析の度數に於て非常に相違のあるのは誰も皆知つて居る。それからまた、人情化、道德化してあるのも知つてゐる。つまり作中の人物に對する好惡の判斷がまだ取り切れない程度のリアリズムである。『今戸心中』の作者に對しても、又如是觀をなして可いだらうと思ふ。

從つてかれの作品から來る感じは、人情に訴へると言つたやうな處から來る感じで、人生の再現と言つた風な處から來る藝術的の感じではない。

描寫式のやうな形で、實は描寫でないのが、かれの作品の缺點である。

四　天外の『はやり唄』

天外は『はやり唄』あたりで、そのリアリズムの頂上に達してゐる。かれのリアリズムは決して田舍の豪家の細君以上に發展しなかつた。

無論、天外のリアリズムは柳浪より一歩を進めて居る。もう人情化などといふ赤く爛れたリアリズムではない。寫生の氣分もかなりに出てゐるし、平面的な感じもよく出て居る。判斷と言ふことも成たけ加はらないやうに、やうにと心懸けてゐる。

しかしかれの宣言に拘らず、かれには天才を重んずると言つたやうな空想的な氣分が大分にある。クリエートするといふやうな氣分が到る處に滿ちて居る。

かれの宣言から言へば、かれは現象を現象として見るやうな境に達しなけれ

ばならない作家である。ライフライキといふことなどを一番先に念頭に置かなければならない。それであるのに、かれはよく人物とライフを自己の想像（かれより言へば天才）に由つて創作した。そしてそのライフ、そのキャラクターなるものが、いつも類型的に墮ちて居るのを悟らない。『魔風戀風』の女主人公『ゴフシ』の多賀子など皆なさういふ風である。生々としたところに乏しい。自然の持つてゐるパアソナリチーがない。

何と謂つたつて、創造と言ふことは容易に行れることでもなければ、言はるべきことでもない。假令天才を持つて居ても、其天才は作者が頼りにすべきものではない。作者は謙遜した態度で、現象の中から生々とした人間を捉へて來なければならない。一生の中に一人でも二人でも好いから、生きた血の流れるやうな人間を捉へて來なければならない。

『はやり唄』の作者は、後には盛に空虛な人物の創造をするやうになつた。そ

して、その立派なリアリズムの意義を失つて來た。果ては通俗小說と思はれるやうなところまで落ちて行つた。

會話は現象中、最もその人物の心理を語るものである。其の複雜とその變化とは容易に端倪すべからざるものである。であるから、作者が作中人物の會話を取扱ふには、ことに意を用ゐて、現象を對照にしなければならない。硯友社時代には會話が旨いとか拙いとかよく言はれたが、旨い拙いなどといふやうなそんな暢氣な沙汰では、生々とした會話は書けるものではない。であるのに、柳浪を始めとして、この『はやり唄』の作者も、矢張會話を、筋を運ぶ道具に使つたり、頁を殖やす方便に用ひたりした。『魔風戀風』などには確かにさう言はれても仕方がないやうな處が到る處にある。

この作者に望みたいのは、この空想的創造を去つて再び忠實な心を抱いて、現象に相對せんことである。まことの意味に於て、その立派な宣言を實行せら

れんことである。

五　風葉の『青春』

風葉は一種複雜した觀察と資質とを持つてゐる。硯友社の系統を帶びては居るが、それに飽足らないといふやうな處がある。『青春』はよくそれを示してゐる。それから、彼はかなり熱心な藝術的良心と藝術的憧憬とを持つてゐる。新しいものと望むといふ心、現象を感受する鋭敏な力、さう云ものも多い。しかし彼の經て來た道路は、動搖の多い混亂の多いものであつた。硯友社時代の文章を作るといふ風、事件の對照を重んずるといふ風、筋の面白いのを貴ぶといふ風、それに西洋の新しい文藝の影響が、一緒になつてかれの頭に往來した。『青春』は硯友社時代の意味に於ての文章が旨い。それに、人間の根本に横はる官能描寫に於て、當時の文壇に一歩を進めた概がある。其意味に於て、ロマ

ンチック――リアリストと云つたやうなことがある。しかし、ライフを見る上に於ては、天外ほど現象的、外面的になつて居ない。ライフライキといふ氣分は何處にも見られない。自己の興味を惹いた人物事件をのみ濃く書くのに力を盡して、人生の雜多紛々には餘り注意を拂つて居ない。雜多紛々を捨てずに描くといふ處から眞のライフが描き出されて來るといふことは念頭に置かなかつたらしい。從て理解された處だけが、濃厚に書かれてあるのが際立つて眼に付く。

『青春』は『魔風戀風』と共に、當時の女學生を書いたといふので評判の高い作であつた。女學生の一部は實際よくかけてある。しかし全體のコンポジションから言ふと『多情多恨』の再現の氣分といふ處には達して居なかつた。作者の抱いた一種のアイデアが絶えず全體のコンポジションを小さくして居た。

六　二葉亭の『平凡』

『平凡』をすぐれた作品だと思ひ始めたのは、つひ近頃のことだ。何だか不思議な作品だとは、新聞に出た時から思つては居たが、しかし最近に讀んだ時の感じは味はれなかつた。『平凡』は一人稱で書いてある。それでゐて、三人稱で書いたものよりも、再現に近い離れた味が味はれる。作者の位置が全く作中にかくされてゐて、何處にも出て來ない。作者は巧に作者の眞意の所在を讀者の眼から晦ましてゐる。

ロシヤ式の烈しい即いた作品で、そして一種不思議な藝術的の匂ひがする。

私は作品に對して、いつでも一番先に作者の位置といふことを考へて見る。即いて居るか、離れて居るか、熱して居るか、覺めてゐるか、先づそれを見る。即きすぎてもいけないし、離れ過ぎてもいけないのが作者の位置である。

また私は作品に對して、作者がいかに其自己の影をかくして居るか、顯はしてゐるかを考へて見る。ゾラなどの作は、他人のことを書いても自己が出て居

るし、モウパッサンの作は自己を書いてゝ自己が巧にかくされてある。私の考では自己を作品の陰に完全にかくし得た作から、ことに再現に近い感じが味はれるやうに思ふ。

『平凡』は立派な再現をして居ると思ふ。そこからは無限の人生が味はれるやうな氣がする。『平凡』に描かれたあの平凡な一ライフが空中に漂つて居て、そこからそれ以外のさま〴〵のライフが無限に想像されるやうな氣がする。

好い作、不思議な作。

七　獨歩の『牛肉と馬鈴薯』

『牛肉と馬鈴薯』の作者は趣味といふことをよく口にした。人を罵倒するにもあいつはBad tasteだから駄目だとか話せないとかよく言つた。それから趣味に關する議論を文章に書いて雜誌に載せたこともある。實際、かれは談話にも趣

味を貴び、議論にも趣味を貴んだ。從つて感興といふものがかれにはかなり大きな事實として取扱はれた。分析の斧を無意識には用ゐるが、意識的には餘り用ゐたことがない。ある批評家が、かれの作品には英國風の紳士と言つたやうな瀟洒なクリインなところがあると言つたが、さうした情調はかれのその趣味中心から來てゐる。『牛肉と馬鈴薯』それを讀んだゞけでも、その會話のいかに機智に富み、いかに諧謔に富み、且つまたいかに熱情に富んでゐるかゞわかる。

かれはまた到る處で、小説家よりも詩人だと言はれる、これもその趣味中心のところから來て居る。

だから、彼の作には機微を穿つたものが多い。人生の一角――かれの敏捷な眼に觸れた人生の一角がいかにも手際よく描かれてある。しかし其根本が既に趣味中心であるから、醜いものを醜くは寫さない。現象を現象として見るといふやうなアナリストの態度はない、『正直者』などは日本の最初の肉慾描寫と言つ

ても好いやうなものであるが、それでも綺麗に手際よく書いてある。從つて、かれの作品にはライフライキと言つたやうな感じを持つたものは甚だ少い。廣くライフを見るといふよりも、一角をつかんで來て、これに深く入つて見るといふ行き方である。

曾て『破戒』を讀んで『僕ならこの十分の一で書く』と言つたのを聞いたことがあるが、かれの眼に映るライフは、『春』や『家』の作者の眼に映つたやうな廣い散漫な無解決なものではなくて、むしろ刹那的な區切のついたものであつたに相違ない。かれの見方は輻射的でなくて、集中的である。客觀的でなくて、主觀的である。

かれの作に『一家内の珍聞』といふのがある。あめん棒事件とハガキ事件とを二つ合せて書いたもので、頗る機微にふれた、日常生活中の一片であるが、それがそのまゝに見ずに、解釋を加へて書いてある。Bad tasteだから、かういふ

ことが起るのだといふ風に書いてある。私の考へでは、その事そのものが既に人生の意味を語つてゐるので、それを其まゝに描いた方が解釋をつけて書くよりも却つてライフの意味が出ると思ふが、一方から見れば其處がかれの主觀的たる所以である。

かれの作では『二老人』『疲勞』などが、オブジエクチイブで、餘程再現の氣分に近い所がある。

八　藤村の『春』

作者は飽まで再現を心がけて居る。そして細かい處に注意して居る。青木の死ぬところなど殊に落着いて書いてある。普通の見方から言ふと、此處は色を濃くして書かなければならぬところであるが、作者はそれを際立ないやうに巧に筆を運んでゐる。青木の死は若い人達に取つては、大きな事件に相違ないが

廣いライフから見れば、さう力を盡して描くべき所ではない。かう見て筆を惜んだ處に、作者のライフに對する廣い客觀的の見方がある。現象として見やうといふやうな處がある。

それにこの作者ほど斷定を用ひない作者はない。今少し入つて行つても好さうなものだと思はれる位に作中人物の心理を書くことを避けてゐる。狀態ばかりを書いて、そして心理を歸納させやうと志してゐる。手法がすつかりオブヂエクチーブで行つてゐるのである。

一つの事件、一つの話、一つの思想、さういふものをかれは決して書かうとしない。選んだ事件、選んだ人物でなくて、複雜した狀態につゝまれたライフをかれは常に目がけてゐる。ライフの雜多紛々が非常にライフ其ものに意味を有つてゐるといふことを考へてゐるらしい。

西洋にもかういふ作風は餘り多く見當らない。大小の別はあるが、フロオベ

ルの『センチメンタル・エヂュケーション』などが稍々これに似てゐるところがあるばかりである。

藝術派でそして人生派のやうな處があるのが此作者の特色である。

『奉公人』は殊に勝れた作だと私は思ふ。作者が自己の周圍を書いて、そして此位の程度まで再現の氣分に達したのは珍らしいことである。しかし『芽生』あたりから、作者は自己を押へずに、ある程度までは主觀的であつても構はないといふやうな氣分を出して來た。『家』『犧牲』などにも其の傾向は明かに顯はれて居る。勿論全體のコンポジションはライフライキと云ふことを失はないが。

九　漱石の『それから』

漱石の文章には理窟ぽい、厭に煩瑣なところがある。才に任せて輕く筆を走らせて行くやうな氣分である。作をするといふよりも文章を作るといふ調子も

ある。從つて書いてあることゝ文章とがしつくり合はないやうなところがよくある。

それから此作者の文章の煩瑣な感じを與へる理由の一つは、作者が常に作中人物の心理を說明する處から起つて來る。作中人物の個性の持つて居る心理ではなくて、作者の揣摩し推察した心理が常に行を逐ひ頁を逐つて出て來る。說明せずに、狀態だけ描いて置いて呉れゝば、讀者は其處から心理を歸納して、いかやうにも自由に解釋することが出來るのであるが、かうである、あゝであると作者に解釋を加へられては、その作者の解釋以內に限られて、感じが全く小さくなつて了ふ。

『それから』はかれの作中最もすぐれた作である。一種の方式を用ひた心理描寫は、其才と其學とを十分に現はして居る。しかし感じは矢張煩瑣に陷ちてゐる。遣り方がいかにもしつゝこく、いかにも理窟ぽい。それに全體が說明的で

ある。作者は讀者を前に置いて、常にくどい說明を遣つてゐるといふやうな風がある。

從つてかれの作品は、內容の量よりも文章の量が多過ぎる。『それから』なども、描寫式で行けば、其半分位の長さで、十分に其內容を示すことの出來る作である。『門』などは殊にその弊が甚しい。宗助とお米と小六との生活が、別にその細かい氣分をも見せずに二百頁も續いて居る。

次に內容に入つて言つて見ると、其趣味、其嗜好、其の人生と藝術とに對する氣分がさうなつて居るから仕方がないのかも知れないが、想像と嗜好とが其內容の全部を占めて居て、現象からつかんで來たやうな生々とした氣分は人物にも事件にもない。拵へた作品と言つたやうな感じがどの作を見ても起る。

『門』は自然主義に近寄つて來た作品だなどと世の批評家は言つたが、私は決してさうは思はない。矢張漱石一流の輕い見方から出來た作品である。

一〇　上田敏の『うづまき』

學者の小說たるを免れない。ライフを見た作品ではなくて、ライフに對する考へを述べた作品である。

具象的な氣分は何處にも出て居ない。議論やら思索やらの中に挿んだ人物と社會との描寫も眞に迫るなどといふことは目的にして居ない。それから、その根本の調子が矢張趣味嗜好から來て居る。

私はこの作を讀んで、この作者の知識といふことを考へて見た。中々よく知つて居る。しかし知識であつて理解ではない。人生の意味を闡明するといふ風でなくて、單に社會の事物を知るといふ風である。

作中の議論は作者のこれまでに經て來た思想態度がナチュラリズムの勃興に連れて、所謂人生派と言つたやうなものに合一を求め、ネオ、ロマンチシズム

に入つて行かうとする努力にある。其議論には流石に新しい人と言ふやうな處があつて、面白くもあれば意味もある。スタンダル會の話なども面白い。

しかし私の考では、作者は何故說明の易きに就いて、描寫の難きを捨てたであらうか。議論思索などを正面から示さずに、かうした議論思索を持つた人物側面から描かうとしなかつたらうか。また、春雄を取卷いた社會の人々を今少し深く研究して、それを描かうとはしなかつたであらうか。

即き過ぎた Ich-Roman。主人公と作者の位置が一緒になつて、再現などといふ氣分は何うしても味はれない。

とは言へ、議論だけでも、兎に角新しい變つたものを聞かされたといふ感じのする作品ではある。

鷗外漁史の作品にも、此作者の作品から受けた感じと似た感じを受けることがよくある。要するに面白いものは面白いと言つたやうな行方である。漁史の

作品には種々のものがあつて、寫生文らしいものもあれば問題小説のやうなものもある。批評を小説に托したと言つたやうなものもある。狹い自然主義などに拘泥して居る必要はない。かういふ書き方もある。かういふ形式もある。かう言つて作をして居るやうに思はれる。これも文壇の空氣を複雜にするには好い事だ。

一一　白鳥の『落日』

白鳥の作は規模は小さいが、しかしよく緊張されてある。人生自然に對する觀察も理解も深い。

再現といふ氣分から言ふと、『落日』はまたその目的を達して居ない。主人公と作者とが矢張即き過ぎて居て、周圍の人々に對する主人公の判斷が、主人公自身の判斷になつて居ずに、作者の判斷になつて居るところがかなりに多い。

つまり自己に對する判斷の斧が十分に揮はれて居ないのである。しかし主人公が料理屋に泊つてのあくる朝、人間の淺間しさを感ずるあたりは、隨分思切つた大膽な書き方がしてあつて、大分再現に近いやうな氣分を起させられた。同じことを材料にした泡鳴の『放浪』とは、氣分に於て餘程分析の苦痛と言つたやうなものが多い。

『二家族』は『落日』に比べて、一層再現に近い作品である。『落日』のやうに深くはないが、全體の感じが廣い。コンポジションも解決のないやうなところが面白い。結末の墓場の一章などは今でも印象がはつきりしてゐる。

短篇では『一夜』といふのが好きだ。

卓上語

剪裁

「日本及日本人」に出て居た作品の中心點に關する碧梧桐氏の議論を私は近頃大變面白いと思つた。結果を有効ならしむる爲めに、中心點を集中して自然を改造する在來の俳句及び俳論を非難したのは、至極同感である。

自然は雜多紛々である。しかし自然の生々として居るのは、その雜多紛々があるから生々として居るのである。これを「美」とか「思想」とかを現はす爲めに篩にかけて、必要なものばかりにして了つては、決して自然はその生々とした

姿を示すものではない。

雜多紛々を拂ひ去つて、無遠慮な剪裁を遣つたのは昔の作者のことである。剪裁を加へたところから、いつか自然が拔て逃げて行つてゐるのを知らずに居る。

剪裁と度數

剪裁と言ふことは、難かしいやうで實は容易なことである。黑いものを黑しとし、白いものを白しとする謂である。簡單なる現象觀察である。これに引かへて作者の心理狀態が細かくなつて來れば來るほど、黑いものを單に黑いものとして了はず、又白いものを白いものとして了はず、もつと複雜した箇性に向つて進んで行く。

しかしこの剪裁といふことも、度數の議論で、作者の修養、年齡、人格の上

に無限の關係を持つて居ることは勿論である。だから、碧梧桐氏の議論は、議論そのものより、かうした議論をするやうな心持に到達したところに意味があり價値があると思ふ。

雜多紛々

要するに、雜多紛々に意味を發見して來たのである。雜多紛々たる自然は雜多紛々たるまゝでよろしい。かう思つて來たところに新しい自然の見方を發見したのである。

自然は平凡だとか無意味だとか、事實は無理想だとか醜惡だとか、世の中にはさういふことを言ふ人がよくある。自然を平凡だと見る人の眼には平凡に自然は映るであらう。醜惡だと人生を見る人の眼には、醜惡に人生は見えるであらう。しかし自然と人生とは平凡が全部でもなければ醜惡が全部でもない。

關係のないと思つた人物が、ある大きな悲劇の中に間接に大きな影響を來してゐることは、實世間にもあることだ。細かいことが存外大きなことをしてゐる。つまらないことが存外立派な事業の基礎となつて居る。雜多紛々、そこに自然の意味を發見しなければ、自然は容易に見えるものでない。

私の經驗から言ふと、この雜多紛々の事實に意味を發見するといふところから、自然人生に對する私の考が變つて來た。

新しき理解

一歩退いて平凡なら平凡でも好い。醜惡なら醜惡でも好い。さういふ人は、如何に平凡なりや、如何に醜惡なりや、その平凡な狀態、醜惡な狀態をぢつと平氣で見て居ることが必要である。其處に新しい意味が出て來る。新しい理解が出て來る。

「タイプ」と「パアソナリチイ」

自然はその複雜した「あらはれ」を種々にして見せて呉れる。時には、問題劇以上に立派な解決をつけて居るやうな事件の發展を見せて呉れることもあれば時には首尾もなく連絡もなく殆んど解決に苦しむやうな事件を見せて呉れることもある。しかし何んな風にして見せて呉れても、自然の見せて呉れたことは少くとも自然である。何んなに型にはまつたやうな形式を以て顯はれて來ても、自然の見せて呉れたことは、其處に人工と異つた活動と生氣とがある。藝術家が自然を師にするより他に仕方がないといふのは其の爲めである。

他人のことを書くと、何うも『眞に迫る』度數が足りないといふことを誰もよく言ふ。實際それは止むを得ないことだ。押詰めて行くと、何うしても其處まで行かなければならない。

タイプとパアソナリチーといふ言葉がある。モウパッサンがフロオベルの研究をした文章の中に、「マダム、ボワリー」はまだタイプを描いて居るが、「センチメンタル、エジュケイション」になると、もうタイプではない、吾々が日常逢ふ處の各種の人間を描いてゐると、かう書いてゐる。私は成程と思つた。普通では、タイプを書く方が作品として有効であると誰も思つてるし、在來の審美學にもさう書いてあつた。女學生を書くと、成程今の女學生らしいところがあるなどと言つて、批評家は賞賛したり何かしてゐる。何うも旨い、ルーチンの性格はロシアの空想家のタイプだなどゝ言つて賞める。しかし、タイプといふ位の程度では、「眞に迫る」度數が足りないのである。實際の自然の狀態を見ると、決してタイプといふ位の程度ではない。個人個人の持つてゐる細かい深い鳥渡名狀せられないところが、空氣といふやうなものになつて漂つてゐる。そしてそれは個人同士が實際生活にあつて互に觸れ合ひ語り合つても、容易に理解する

ことが出來ない程度のものである。『センチメンタル・エジュケーション』はその難かしい處に手をつけてゐる。

『センチメンタル・エジュケーション』は餘り評判が高い作ではなかつた。どちらかと言へば、賣れない小說であつた。冗漫、零細などゝいふ批評をかなり多く受取つた。その原因をモウパッサンはかう言つてゐる。『それは毎日起るところの立派な幻像であつた。それは實生活の精確な記錄であつた。しかし作者の哲學はその陰に深く隱れて居た。事實の背景に全くかくれて居た。心理は人物の言葉とか擧動とかの陰にすつかりつゝまれてゐて、說明をしたり、敎訓めいたことを言つてその理由を語つたりしない。從つて、多數の讀者はその立派な作品の眞價を判斷することが出來なかつたのだ』

私はこの言葉を面白く感じた。實際パアソナリチーと言つたやうな深い細い處に入つて行くと、實生活で個人同士相觸れ相語り合つてさへ解らないのであ

るから、藝術では一層多數の人に解らなくなるのは、止むを得ないことである。

しかしタイプは其時代が過ぎると、其印象が薄く抽象的になつて行くのに反して、パアソナリチーはいつまで經つてもその個性の持つてゐる印象を失ふことがない。『センチメンタル、エジュケーション』が當時に於て批評が惡かつたにも拘らず、識者の間に立派なる傑作として生き、新らしい幾種の小說の模型となつたのは、意味の深いことだと思ふ。

新傾向の俳句

新傾向の俳句は、このパアソナリチーといふ處を狙つて居るやうに見える。從つて起つて來る難解の非難が多いやうだが、これは元より累とするに足らない。

由來、パアソナリチーとか、中心點を排するとか言ふことは、抽象的のこと

でないから、何うしても、それに心から觸れた人でなければ理解することの出來ないのは當り前のことである。

說明と描寫

說明は解り易い。しかしその印象は薄くなりやすい。描寫は解りにくい。しかし印象はいつまでも消えない。描寫といふことは、タイプで滿足せずに、パアソナリチーに向つて進んで行く運動である。

自然に似た主觀

自然に似た主觀、私はその近くまで行つて、そして初めて主觀といふことを云々する權利が出て來るのだらうと思ふ。自然を疑つたり自然を崇拜したり、自然に卽き過ぎたり、自然に離れ過ぎたりするやうな主觀狀態にある人は、そ

の主觀を喋々する前に、先づ謙遜な態度で、心を虛うして、自然に向はなければならないのではあるまいか。私などは自然の偉大なのに常に驚嘆する一人である。

逸し易き印象家

狀態を描く小說より筋を追て行く小說が矢張多い。讀む人もまた多く筋を追ふのを好むやうに見える。

筋ばかり立つて居たッて仕方がない。筋書ばかりでは小說にはならない。私達はかういふ言葉を二十年も前から聞いて居る。それでゐて、矢張作者は小說の筋を書いて居る。讀者は小說の筋を好んで讀んで居る。

描いた筋に藝術の價値や面白味があるのではない。筋を包んだ肉、輪廓を包んだ濃淡の影——さういふものに面白味を發見するのである。其處に藝術の價

値があるのである。其處にまことの人生の意味をも探し出すことが出來るのである。

現象から得た印象を其まゝ具象的にして置くといふことは、普通には容易に出來ることではない。飜つて考へて見ると、人は必らずその印象を何等かの抽象的狀態に集中させて、そしてそれを判斷したり批判したりして居る。複雜した印象の中から單純な筋とか輪廓とかを捉へて來て、そして逸早く逸し去らうとする印象を保留しやうとする。しかし具象的印象は大抵の場合、逸早く逸し去つて了ふのが常である。

藝術家は此の逸し易い印象を具象的に書く人であることを、いかなる場合にも忘れてはならないと思ふ。

人生批判

レオ・トルストイ

人生批判は何んな作品にも加はつて居ないものはないといふ。それには相違ない。しかしそれは度數であつて、現象から受けた印象の分明して居れば居るほど、具象的になつて居れば居るほど、批判や判斷が加はつて居ないといふことは事實である。

『はゝア、これはかういふ譯だな』かう考へた時には其印象は既に最初の具象的な境からいくらか遠かつて居るのは爭ふべからざることである。藝術家が小さい主觀に捉へられるのを忌むのは、その根本の理由を此の微妙なところに置いて居ると私は思ふ。

捉へやうとして容易に捉へられない心理狀態や、周圍の空氣、氣分に由つてその濃淡が無限に變化する人間の複雜した狀態や――さうしたものを、現實から受けた印象そのまゝに再現して見せるといふことが、藝術家の第一の責任である。

從つて作者は筋を包んだ肉、輪廓を包んだ影に力を用ゆることになる。筋は作者が描いて居る狀態の中から自然に出來て來るやうなものでなくてはならない。

筋書評

だから、私は筋書とか梗概とかいふものは昔から嫌ひであつた。如何なる傑作でも、筋で見たり聞いたりしては、常に平凡極まるものであつた。すぐれた高遠の哲理の一章よりも、細かい複雜した日常生活の一端が、却つて私に深いいろ〳〵な意義を敎へた。

此頃、新聞で小說の筋書評が流行る。あれなども隨分馬鹿々々しいものだと私はいつも思ふ。筋書になど書けないやうな小說、私はさうしたものに、却つてすぐれた狀態描寫を見ることが多い。

新聞記事と藝術

何うかすると、評者は三面記事の引延ばしたなどゝいふ評をすることがある。新聞の三面記事——私などは毎日見る三面記事の一つでも好いから、詳しく知つて居て、其狀態描寫が完全に出來たなら好いと常に思つて居る一人である。其狀態さへ細かに描き得れば、三面記事は總て立派な小說であると信じて居る一人である。

新聞では、狀態描寫の筆は先づ不必要である。それよりも事實を報道することが必要である。眞相を描いて讀者に判斷をさせるよりも、小主觀でも何でも構はぬから、ドシ〳〵其事實を判斷して說明して聞かせなければならない。新聞では、筋で好い。しかし藝術はそれでは駄目だ。

かうした事だと簡單に書いて了ふのと、狀態を詳しく描いて見せるのとでは

その文の種類までも違つて來る位の著しい相違がある。

現代の小說はお話風になることを嫌ふ。また人から聞いた物語と言つた位のところでは滿足が出來ないやうになつて居る。此處を考へて見る必要があると思ふ。

しかし普通の讀者に取つては、筋のあり、コンポジションのあり、思想のあり、判斷のあり、理窟のある方が解りよくもあり面白くもあると見える。描いて示されるよりも、說いて聞かせられる方が理解し易いのは止むを得ないことかも知れない。

私の歌の師匠が『歌はことはるものにあらず』といふ桂園の敎を最後まで私に言つて聞かせた。『ことはるものにあらず』といふことは、即ち描寫であるといふことを私はいつも思つた。

『描けるものは常に新しい』私はかう言ひたい。

描かれたるものは、描かれたる事態其物の持つて居る價値であるといふことを考へて見なければならない。

ある人は西鶴からその皮肉を取上げて言ふかも知れない。又ある人はその冷靜な觀察を取立てゝ賞めるかも知れない。經驗を取る人もあらう。批評眼を取る人もあらう。それは、さうしたものが西鶴のあの文章を成せる原因になつて居るには相違ないが、それよりも私は描く氣分にになつた其氣分を尊重する。其時代の現象から受けた印象を具象的に生々と書いた處が其總ての價値である。

西鶴を讀んで、何よりも先に生々とした其時代の男女、其時代の生活狀態、其時代の心理狀態が私を動かす。

フロオベル

自然主義を單に習俗破壞とか時代反抗とか言ふ方面にばかり見て居る人がある。さういふ人は、其點で自然主義が社會問題、人生問題に觸れて居るのを力强く思つて居る。つまりゾラの立場などゝ似て居る。

しかし習俗破壞以上に發展して行つて居ることは事實である。モウパッサンになると、もう習俗破壞とか時代反抗とか言ふものよりももつとぐつと先に出て居る。かれに取つては自然主義は本能上の自然主義である。時代反抗でなくて、本能反抗である。かれは習俗どころか自己を破壞するといふ境まで猛進して居る。

又自然主義がフロオベルのやうな人を持つて居るといふことも考へなければならぬ。渠に取つては、藝術は習俗破壞なぞといふやうなものではなかつた。また本能反抗といふ處まで突進して考へて行くやうなものでもなかつた。じつと沈着いた態度で、かれは人間と人生とを見た。精神上の火水の戰鬪をも默つ

て見るといふほどかれは强かつた。かれの自然主義が一種底深い厭世的藝術の調子を持つてゐるのは其爲めである。

刺戟もなく思想もなく筋もなく、唯狀態描寫ばかりある "Simple Heart" は實にかれの手から生れた。

『ホルラ』

今このやうな明るい心、それが忽ちにして暗い〳〵心になる。其力は何處から來る？　かうしたことが、"Holra" の中に言つてあつたと覺えて居る。實際この複雜した心的現象には一種の恐怖を感せずには居られない。理由があり、原因があるものなら、何うでも出來るが、それが全然無いのだから、愛想が盡きる。神經ばかり尖つて來て、それが眼に見える何物にも觸れて行く。前に坐つて居る平凡な穩かな顏を見ても、心が顫へる。電車に乘つて居ても、不安で不

安でたまらない。さうかと思ふと、夕暮の空の雲の晴れて行くやうに段々蔽ひ冠さつた其力が離れて行つて、いつかケロリとした氣分になる。其力？　其力は何處から來る？

皮剝の苦痛

藝術家の心理をモウパッサンは『水の上』に書いて居た。物に熱中されない心の苦悶、物を見てばかり居る神經の糜爛、同じ人間でありながら、普通の人間のやうに動くことの出來ない畸形の人間――

『その受ける苦痛は皮剝の苦痛である』

かういふ風に言つて居たと私は記憶してゐる。

『何も、さういふ風に藝術家といふ一種特有な人間になる必要はあるまい』ある人はかういふかも知れない。

『藝術家といふ立場よりも人間といふ立場から出立すれば好いぢやないか』ある人はかう言ふかも知れない。しかし問題は其處ではない。モウパッサンのやうな人は生れながらにして、既にさういふ質と性とを有つて居るのである。寧ろ藝術と藝術家は始めからさうした約束と性とを持つてゐるのである。

複雜した心理を磨くと、それが何んなに鋭くなつて行くか解らない。何んな殘忍酷薄な心を齎らして來るか解らない。

『不健全！』

かう言つて、その弛めた韁を引しめることが私にも度々ある。

殘酷

無邪氣なものに加へた殘酷は、殘酷な中でも一番殘酷のやうな感を人に起させる。しかし加へられる當體に取つては、無邪氣なるが爲めに、自覺したもの

よりも、寧ろ多くの殘酷を感じない譯だ。私はこの理由を考へて見るが、何うしてもよく解らない。

トルストイ

トルストイが死んだ。

トルストイは、私に取つてはかなり古い馴染であつた。トルストイの名を始めて知つたのは明治二十二年頃であッた。確か蘆花君が國民の友の六號活字でツルゲネーフの『獵夫日記』とトルストイの『コザックス』との梗概を西洋の雜誌から譯して載せて居たのを見たのが初めであつたと思ふ。それも上野の圖書館で見たと覺えて居る。二十六年に私は『コザックス』の抄略譯を『シイサイドライブラリー』といふ二十五六錢の本で丸善の二階で買つて來て讀んだ。そしてそれを自己の修業の爲めに譯して見た。トルストイの性格は其主人公オ

レニンにもかなりよく現はれて居ると今でも思ふ。老獵夫と高加索の深林の中に入つて行くあたりは、今でも眼の前に浮んで見える。眞面目で、熱心でそして絶えず内部の動搖を感じて居た青年が、八十何歳の老齢を經て、あゝいふ特色ある最後を遂げたいと思ふと、いろ〳〵なことを考へずには居られない。

『アンナ・カレニナ』は國木田君の本を借りて讀んだ。國木田君は金子馬治君から借りて來たと言つて居た。其時分はアンナのライフよりもレキンのライフの方が私達の若い心をより多く動かして居た。本能に引摺られて行くアンナのライフは、私達にはよく解らなくもあり、又怖ろしいものゝやうにも思はれて居た。『戰爭と平和』は上野圖書館に毎日通つて行つて讀んだ。それから農夫の金を失つて縊死することを書いた短篇に烈しく撲れたことがあつたのを記憶してゐる。紅葉山人が小西增太郎氏と共に、其頃世に公にされたばかりの『クロイセル・ソナタ』を譯して、國民之友に載せたことがあつたが、それを讀んだ時に

は豪いことを書く作者だと思つて吃驚した。

ツルゲネーフに讀耽る頃には、『何うもトルストイには生の材料がごろ〳〵轉り出てゐるやうな氣がして居て、何うも藝術品のやうに思はれない』などゝ言つて居た。

ある時はまたそれとは正反對に、『矢張トルストイは豪い。力の強く頭に來る點に於ては誰よりもすぐれてゐる。この間、家庭のことを書いた小說を讀んだ。自分のことを書かれたやうな氣がした』こんなことを言つた。其時、私は妻を持つて居た。

トルストイの人生に關しての議論は餘り讀んだことがなかつた。トルストイに限らず、私は議論を讀むことを餘り好まなかつた。エキスにしたライフは餘り見たいと思はないのが私の平生の習慣である。『議論など何うでも好い。抽象的に報告した人生のことなど何うでも好い。本當に、トルストイも藝術にかへ

れば好いに』などゝ言つたこともあつた。

『藝術論』を讀んだ時には、『お爺さん、豪いことを言ふな……』こんなことを言つて、それでも、書いてある事實に興味を以て結末まで讀んだ。

『暗の力』を讀んでから、トルストイに對する考へが一變した。『クロイセルソナタ』を讀返して一夜寢られなかつたのも其頃である。自分等の經て來たライフがいかに輕い薄つぺらなものであつたかといふことを飜つて考へたのも其頃である。

イブセンをも其頃好んで讀んで居た。併しイブセンでは、力の強いものを見せられるが、それは曲らない、無理に曲れば、ポキと折れるやうな強さであつた。イブセンには柔かなところがなかつた。其處に行くと、トルストイには同じ強さでも、柔かな、しなやかな處があつて、折らうとしても折れないやうな處がある。それは何故だらうと私は考へて見た。尠くともトルストイの方がイ

プセンよりも根本的なところがあるからではないだらうか。厚く襲ねた皮を忽ち破る力を持つて居る爲めではないだらうか。私はメレジコウスキーがトルストイを評して、肉と血の人だと言つたことを其時思ひ出した。

本能に絶えず動搖させられた作家――其處に折られない柔かさがある。私は其處を考へて見た。

トルストイとモウパツサン

本能をも藝術の境に入れて了はうとするやうな處まで行つて、そしていつも引返つて來る。これがトルストイの人生であり藝術である。

モウパツサンは、本能をも人生をも悉く藝術の中に入れて了はうとしたやうなところがある。其處に缺陷がある。かれの短篇に誇張と衒氣とのあるのはその爲である。これに比べると、本能に對するトルストイの考へは、餘程純であ

る。かれはいつも藝術よりも本能を尊重した。

此處にフランスの文學とロシアの文學との行き方の相違も見られる。

『夜の宿』

最後は宗教に行く。新文藝に對する將來を多くの人は皆さういふ。トルストイ、ドストエフスキーなど皆その例に引かれる。

私もさう思ふ一人ではある。しかし私はまた其處まで行き度くない。

ゴルキーの『夜の宿』にもさうした解決らしいものがついてゐる。

私は『夜の宿』に於ける作者の立つて居る位置といふことを考へて見た。ルカ。ペ、ル。サチン。私はサチンの地位に作者を置いて見た。

ルカは好い役を働いては居るが、私の考では、餘りよく出來た性格ではない。

ちと出來過ぎてゐる。

ルカの位置は人々の理想としてゐるところかも知れない。しかし作者は自己の位置を其處に置いて居はしないと私は思ふ。ルカの位置に達せずに居るところにあの作のすぐれた價値がある。ルカの位置は作者が作中の人々と共に仰いてゐる場所ではないだらうか、作者はサチンと共に其の最後の幕に於て之れを示しては居ないだらうか。

ルカの悲哀は人間離れのした悲哀である。空想の悲哀である。でなければあきらめの悲哀である。私はそれよりもサチンが最後の幕の言葉の中に、深い暗い如何ともすべからざる人生の悲愁を感じた。

從つて、サチンを演じた役者の振はなかつたのを殊に遺憾に思つた。

爾人間よ

光明を望み、宗教を望み、理想を仰ぎ、猶且つ豚の如く生活しつゝあるあは

『矢張ナチユラリズムもさうした突詰めたところまで行つてゐるんですね』

私はかう一人の友達に言つた。

『何うも不思議ですね。何うも想像だと思ふと權威がなくなる。そんなことを言つたか何うだか解らないと思ふと、底が見透されるやうな氣がして、興味の半分はなくなつて了ふんですね』

其友達はかう言つた。

『しかしそれも度數ですねえ。經驗をしない人には、想像で書いてあつても、それが想像で書いたのではないやうに見えるし、又その反對に、眞實を書いてあつても、その經驗をしない人には、それが眞實だか想像だか解らないやうなことがありますね。吾々だつて、經驗を積んで、何事をも知つたやうな顏をして居るけれど、十年も先の人から見たら、何も見て居ないといふやうなことになるかも知れませんね』

私はかう言つて、『しかし突詰めた形は好いですね。人に由つては、もうそこがどんづまりである、ざまを見ろと言ふかも知れない。しかし私達は其處から——その突詰めたところから新しい泉の滾々と湧き出して來るのを知つて居る想像でない眞實——いかにも貧しい眞實でも——それを書くといふことが、むしろそれを書き得る氣分になり得たいといふことが、新しい泉の湧き出して來る源であるといふことだけは確かですね。何故かと言へば、私達の前にはまた年齢がある。眼で見なければならない年齢がある。』

私はかう言つた。

眼の藝術

眼の藝術、眼から頭腦に入つて行つた藝術。私は繰返して言ふ、眼から頭腦に入つて行つた藝術である。心の藝術ではない。感情の藝術ではない。

洪水

今年の洪水では、私の故郷は最も甚しい損害を受けた。久しい間水が引かず、汽車は船で連絡を取つて居るし、住民は皆な水上生活をして居る。私は私の姉の墓と大きな欅の樹のある故郷の町が、四面濁水の中に僅かに被害を免れて立つて居る光景を想像せずには居られなかつた。

利根が切れるか、渡良瀬が切れるか。私達は八月になると、いつもそれを心配した。母親は幼い私達を周圍に寄せて、御國替の翌年と翌々年とにあつた恐ろしい洪水の話を話して聞かせた。下町は全く水に浸つて、あの坂の下からは船でなくては通行することが出來なかつた。流された家も多かつた。海老瀬といふ村では、寢て居る中に水が押寄せて來て、あれ！　といふ間に多くの家が流されて了つた。かういふ話を母はさも恐ろしさうに數限りなく言つて聞かせ

た。其の翌年には、遠い野の畑に澤山つくつて置いた綿を流すのも惜しいと言ふので、母は父と一緒に出かけて行つた。『あの時位恐ろしいことはなかつた。水がもう押寄せて來るのがピカ〳〵と向ふに見えて居る。それを見い〳〵、少しでも多く掠らうと思ふのだから大變だッたよ……それに丁度其時鎌が二つ位で、負つては居るしね』私はその自分のことをいろ〳〵と想像した。

渡良瀬川は岸に竹藪の多い川であつた。それが漲る濁水に浸つて、藻のやうになつて漂つて居る。川岸の人家の家根は頭だけ水の上に見えて居る。

私は兄と一緒に水を見に出懸けて行つたことを思ひ出した。

『もうぢき一升だ』

かう兄は土手に立てゝある量水標を見て言つた。兄も其頃は中々の腕白者であつた。岩魚を釣りに、泳ぎに、よく此川に遣つて來た。其日も危ないからと達つて母の留めるのを無理に遣つて來たのであつた。

はれむべき爾人間よ。

子供と旅

明治四十四年の元日は上諏訪温泉で迎へた。山の雪に日が光つて、寒い風が肌に染み渡つた。半凍つた湖水には二三日前まで通つて居たといふ小蒸汽船が氷に閉ぢられて居た。

昨夜遅く此處に着いた。温泉の湯壺は階梯を下りて行つたところにあつた。昨夜も今朝も浴して居る客は一人もなかつた。私はつれて行つた取つて十歳になる男の兒と戯れながら一緒に其處に長くつかつて居た。

『誰れも沸かす人がなくつて、獨りでにこんなにお湯が出るの？』

男の兒は眼を睜るやうにして言つた。

綺麗な湯であつた。手も足も皆なすき透つて見えた。男の兒は大きい湯壺を

わが物にして泳いで廻つた。退屈した昨日の長い〳〵汽車、頭痛のする無數の隧道、それをも全く忘れたやうに見えた。

日野春と小淵澤の間で夕日に映つた赤い富士を見た時には、男の兒は流石に驚いたやうな顔をして、窓から首を離さなかつた。しかし山や雪や谷や町や、さうしたものは、また稚いもの丶眼には餘り多くの好奇心を惹かなかつた。男の兒は矢張遠い母親のことを思つて居た。

火燵の上の板の上に、茶碗やお椀を並べて、私達はお雜煮の箸を取つた。父親は子供に氣に入るやうな話を何彼として聞かせたが、いつかそれが大人に話すやうな調子になつて居た。

諏訪湖の縁を汽車の駛る間は、山と山の間から濃い碧の富士が見えた。鹽尻驛に近いた頃には、日本アルプスの連山が或處は晴れ、或處は曇り、或處は吹雪に包まれたやうに見えた。停車場の前の旅籠屋の二階の一間には、午の暖かい

日影が明るくさして、男の兒の剝いた蜜柑の皮が火燵の周圍に二つ三つ散らばつて居た。

木曾の谷は雪が深かつた。石を載せた板家が其處にも此處にも見えた。長い氷柱の軒に下つて居るのを私は子供に指さして見せた。見ることの多い世の中、考へることの多い世の中、それに初めて向つた男の兒の心持が私には意味が深かつた。

解らない、しかし知り度い。

知りたい、しかし解らない知られないものは、默つて見て居るより他に仕方がない。

男の兒はいつも默つて見て居る方であつた。山が聳えて居ても、川が流れて居ても、谷が山と山との間に開けて居ても、旅店の女が白粉をつけて笑つて打解けた言葉をかけても……

男の兒は默つて見て居た。

ライフは考へるライフよりも見るライフである。聞くライフである。見る處から、聞くところから、いろ〳〵な現象が、その意味を豐富にして行つた。

眼さへあれが好い。眼がつぶれたら、耳さへあれば好い。耳も聞えなくなつたら、觸つてゞもライフが知りたい。

想像と作品

新年の小說を一通りは讀んだ。

痛切に感じたことがある。それは矢張想像は駄目だといふことである。

想像で書いた作品に、權威のある、心から人を動かすやうな力を持つてゐるものは一つもなかつた。想像で書いた作品の中にも、此處が烏渡光つてゐるなと思ふと、それは想像で書いた處でないのがすぐ知れた。

家と實行と藝術とを一緒にする藝術家との二つの區別を見ることが出來た。

一茶は自己を顯すことが目的である故に、自己は非常によく顯はれてゐるが自己以外の生活には甚だ遠い。偶々それを歌ふことがあつても、それは自己を透して見た生活——むしろ自己の小主觀で見た生活で、人生の現象を其まゝ傍に離して再現して見せたといふやうな處は少しもない。かれの句に見る客觀性は自己の主觀をさらけ出した處に自然に備つて來た客觀で、蕪村のやうに印象風に描寫したやうな處は決してない。

この二種の區別——これが矢張今の新しい文壇の傾向にもあるやうに私は考へる。そしてこの二種の遣り方は、共に作者其人の性格に基ゐしてゐるので、並び存すべきものであるのは勿論だと思ふ。

しかし私の考へから言ふと、自己の爲の人生といふ風な考へ方はしたくないと思ふ。藝術家は自分以外の人々の生活を、細かに離して見る必要がある。そ

こに藝術の複雜といふことも味はれる。藝術が藝術家の日記として役立つばかりでは甚だ心細い次第である。

けれど一茶は豪いと思ふ。純たる抒情詩人の範圍の中にゐて、其の小主觀に捉はれずに、グン〳〵自分の思ふ所を出して行つた。自己の內部に冷かな解剖刀を用ゐたといふほどの自覺はないまでも、世間の習慣的因襲の力などに支配されずに、ドシ〳〵自分の領分を廣げて行つて、更に世間に頓着しなかつた。で、主觀を押詰めて行つた客觀の三昧境に進んだのは面白いと思ふ。

田園の子弟

バサンの小說に、田舍の青年の都會に憧れる狀態と壯丁が居なくなつて老父母がさびしく田園を守る狀態とを書いたものがあつた。そして其中心思想をその問題の解決に置いた。

子弟が都會に憧れ、名譽富貴にあくがれるといふことが、田園に幾多の悲劇を作りつゝあるのは、日本にも其例に乏しくない。年一年、其傾向は募つて行つて、安んじて農に從事してゐる青年などは段々田舍になくなつて行くといふことである。即ち一度都會に出たものは、もう再び田舍の人となることが出來なくなるといふ狀態である。私は思ふ、流るゝ水は堰き止め難い。さうした悲劇は段々重要な社會問題になることであらう。私も一度詳しく其消息を探つて書いて見たいと思つてゐる。

强弱

國と國との爭鬪が力の競爭であるやうに、また社會競爭が力の强弱であるやうに、家庭の爭ひも亦その消長に基ゐしてゐると思ふ。强者の世界、實際それより他に何物もない。道德も習慣も愛情もこの力のバランスを保つ機械に過ぎ

ない。しかしこの力の消長が千變萬化してゐる爲めに、其悲劇も亦千變萬化の狀態を備へて來る。

田舍の人への手紙

此頃田舍に居る人に書いて遣つた手紙にかういふ言葉があつた。『田舍の人は祖先より傳へ來れる一區劃の中に滿足して、將來よりは過古に生活するやうに小生には見え申候。小生の故鄕に公園あり、其公園に十二三の碑あり。これ等は皆な其地に生死せし人々の過去を追憶せる頌德碑の如きものに有之候。小生はこれを見て、田舍にある人の何故にかく過去にのみ執着するかを考へずには居られず候ひし。田舍の生活は共同生活、保守生活、同情生活、因循生活と存候。活躍とか進步とか申すことは田舍の生活に無意味のことゝ存候。相扶け相憐む。これ田舍生活のモットーなり。從つてそれに附隨して起る情實繫累は辭すると

凄しい勢で巴渦を卷いて流れる濁水が今も眼の前にある。

平凡の痛苦

年々同じことが繰返される。

少し注意して居ると、必ず其時々につれて其時々の狀態がある。十度、二十度繰返しても、それを忘れて了つて、新しいものゝやうに人間は思つたり感じたりする。それで人間は生きて居られる。

刺戟のある中は好い。欺かれたり迷はされたりしてそれで濟んで行くから好い。しかしそのなくなつた時は？　其處に色彩のない平凡な痛苦が始まる。

そして一度平凡な痛苦を味はつたものは、いかなる刺戟にも刺戟されなくなるから困る。

「をんな」

「をんな」といふ小説が發賣禁止になつた。私は讀んで見た。當局が「思想」といふことに注意を拂ひ始めたのは當然のことだと思つた。しかし「をんな」一編がそれに該當してゐるとは勿論思はない。

或は當局にはこの位の程度の思想を危險に思ふ位の判斷しかないのではないかと思つて見た。私の見た處では、若い人々の思想はこんな甘い生優い單純なものではあるまいと思ふ。もつと深くもあれば、もつと複雜してもゐる。それに背景もある。

かうして思想は何處から來たか？　單に現代人だからといふやうな人眞似から來たとすれば甚だつまらないものである。さういふ立場から來れば、「をんな」乃至他の作品に見るやうな淺薄の作品が生れるのも無理はないが、苟くも「をんな」の女主人公が心底から深くあゝしたことを感じたとすれば、今少し深い作品が出來なければならない。成程女がかう思ふのも道理だと考へさせる處がない。不健全でも構はないが、その不健全たる理由がない。こんなことを言つてゐると輕く人に思はせるやうでは駄目だ。

或は當局はこの淺薄な傾向に標準を置いたのかも知れない。

全責任

深く苦しんだものでなければ、深く言ふ資格もなければ權利もない。漫然、其思ひ附を言つたッて何の甲斐もない。

苦しみやうの足らない小説や、心持の徹底して居ない小説が餘りに多過ぎる。今少し眞面目に考へて見ることが必要だと私はいつも思ふ。

少くとも自分の遣つたことに就いての全責任は帶びなければならない。親に

對し、子に對し、乃至妻に對し、普通の道德に對し、否定の思想を抱くのはそれは好い。しかしその理由が大きな背景を成さなければ藝術上でも實行上でも深い意味や大きな悲壯が伴つて來ない。

俳人一茶

俳人一茶の傳記を讀んで感ずる處が多かつた。實行と藝術、それを一茶ほど完全に一緒にしたものは先づ珍らしい。一茶に取つては藝術は實行であり、實行は藝術であつた。

だから、一茶の俳句を讀むと、一茶の一生がすぐついて來る。その俳句の中に一生が歴々と詠み込んである。

蕪村などになると全くこれと趣を異にしてゐる。蕪村の句を讀んだッて蕪村の生涯が一茶のやうに明かには浮んで來ない。私は此處に藝術を重んずる藝術

井原西鶴

ころにあらざるべし。これを都會生活の將來のみあつて過去なきに比す、その差は實に霄壤も啻ならざるを感じ申候』

又次のやうなことも書いた。

『小生は唯行く處までは行かんと存候。過古はわれにありて益なし、追懷はわれに一片の怡樂を齎すに止まる。新しき計畫に伴ふ新しい希望――それに比ぶれば、過去の追懷のごときは言ふに足らずと存候。同情の憑むべからざる、共同生活の安んずべからざるは、今更これを言ふを須ひず、……小生には唯小生あるのみに御座候』

横と縱

今日は靜かな日だ。子供等は妻と共に親類に遊びに行つて、いつもの騷しい聲も聞えて來ない。昨日蠶駝師が綺麗に刈つて行つた庭の芝草の上には、打水

をしたばかりの雨が降つて、梧桐の葉から葉に落ちる滴がをり〳〵聞える。敷石が濡れて居る。

自己の存在――他人の存在かうしたことを私は考へて居た。小説に作者即ち主人公の場合と作者と主人公と全く離れて居る場合と、かう二つの種類があることを續いて考へて見た。

『自己の事を描くのは容易なやうで、實は甚だ難い。自己を全く客觀化することはある度に於て不可能である。自己を描いて告白のやうな形になるのは、それは客觀化の足りない爲めであるのは勿論だが、さうかと言つてそれを單に技倆と見方の上で解釋することは出來ないと思ふ。現にトルストイのやうな離れて見ることの出來ない煩悶家もある。』

かうある人と話し合つたことをも思ひ出した。

心理は自己の心理以外に多く深い處に達することが出來ない。縱にしては自己がある。横にしては、他人がある。縱でなければ深い心理に入つて行くことが出來ない。横でなければ、この世相の千態萬狀を究ることが出來ない。――寧ろこの横と縱との交接作者は縱であると共に横でなければならない。

點に深い洞察と大きな調和を要すると思ふ。

心理描寫

心理を描くに至つて作者は毎に惑ふ。

描かれた所謂心理を見るに、鍍を施してないものがない。想像の多く憑むべからざるを私は感せずには居られない。

所謂心理描寫は多く説明に墮ち易いと私は思ふ。

チエホフの「決鬪」

チエホフの『決鬪』を小山内君の譯で讀んで見た。好い作だと思つた。しかし心理描寫は少し入り過ぎて、誇張に失し、對照に失しすぎたやうな處があると思ふ。作者の頭腦にさうした種類の相異つた性格を先つ描いて置いて、そしてそれを有効に紙上に現はすといふことにのみ餘り力をそゝぎ過ぎたやうなところがある。描寫が描寫として生きて居ずに作者の目的の爲めに描寫が使役されて居るやうな處がある。

描寫が說明に墮ちるのは多くさうした場合にある。

描寫は單に眞なる描寫としてのみ價値がある。性格の說明乃至性格の對照の爲めの描寫は多く生氣を失ふものであるといふことを私はそれに由つて見た。

會話は性質上飽まで外面的現象的でなければならぬものであるが、それが矢張說明になり、事件の筋を運ぶ上の道具になつて居るのを發見した。

つまり人物を描くに當つて餘りに多く想像を用ひ過ぎた爲だと思ふ。

私はかういふ場合には、「自然のあらはれ」といふことをよく考へて見る。自然は其の目的を示さない。示すやうに見えることがあつても、決してそれを斷定的には示さない。いかなる場合にも抽象的にはなり得ない。一面甚だ明瞭であると共に一面甚だ朦朧である。いかやうにも解釋が出來る。性格描寫の上にも作者の想像と斷定との顯はれて居るやうな作品を私は取らない。

理解

性格を描くに當つて作者の理解がなくては駄目であることは言ふを待たないが、しかしその理解が作者の想像的理解でなく、感じの上から來た複雜した現象的理解でなくてはならないと私は常に思ふ。

つまり眼から頭腦に入つた細かい理解でなければならぬ。

それから綜合的のもの——作者が目的の爲めに實際にある種々の人物から其

一角々々を捉へて來て縫ひ合せたやうなものも、多くは生氣を失つて了ふ。

選　擇

作者が目的の爲に（其目的の如何を問はず）作をして居ればして居るだけ、其目的に支配されて、其の不都合な處を削り、其の煩瑣な處を捨て、これに適合したものだけを用ふるといふ形になる。私は自然主義以前の文藝にさうしたものをよく見る。また、自然を見るに一種の解決を持つた人々は、その人々の主觀に應じてそれを必要なる選擇だといふのをよく聞く。しかし私はさうは思はない。雜多紛々、何んな煩瑣なことにも、作者は十分な注意を拂はなければならない。それが現象である以上、それが自然の「あらはれ」である以上――

選擇といふことは、常に其作者の自然に對する見方の深淺を表白することになるものである。

再び「作者の批判」

主觀に就ての議論は果てしがない。

しかし主觀問題は私達は言ふ必要はないと思ふ。又主觀に就いて、批評家の作者の主觀に對する批評も要するに、批評家の批評であつて、作者に取つては關するところが少いと思ふ。私などはいつも「主觀の修養鍛錬は言說を待たざるなり」とかう思つて居る。

天弦君は『作者の批判』といふたやうなことを言つて居たが、あれも今少し入つて行つて、『作者の批判の程度及び狀態』まで議論して行かなければ甲斐がないことではないだらうか。

批判のある文藝が自然主義の文藝だといふ。それには賛成である。ロマンチックとナチユラリスチツク。さうした處に意味があることも賛成である。しか

しモウパッサンやゾラの作品には批判に過ぎて、淺露になつたものも隨分多い。だから作者の批判と言ふことも、一々その批判の程度狀態を研究して一々考へて見なければ、具象的の議論は出來ない。作者にも批判を用ゆる時と用ゐない時があるし、材料にも亦さうした細かい複雜したところがある。一概には言はれないと思ふ。

事件

異常なる事件必ずしも異常なる作品を成さない。平凡なる事件、必ずしも平凡なる作品を成さない。

異常と平凡といふ風に單に材料の上で、現象を區別して見たくない。死も妖怪も時に由つては神祕でも何でもない。異常なる事件も私は平凡なる事件として見たい。又書き度い。

印象主義

印象主義は、客觀的外面的でなければならない性質を持つてゐるといふことを私は曾て言つた。印象主義は眼から入つて行つた藝術である。色彩を重んじ、刹那の感じを重んずるものも無理はない。

印象風に出て行つた作品は、唯其外面から受ける感じ——それに由つて味はれる味はひより外に何物をも要求して居ない。見る人の解釋の何物をも容れないと共に、また何物をも容れるといふ餘裕がある。

眼だけで、頭腦まで入つて行かない處に此主義の面白味がある。

印象に富んだ書

竹越君の『南國記』は近頃にない興味を以て讀んだ。文章に非常に氣の利いた

印象的のところがある。熱帶地方の光景が明るい繪となつて私の眼に映つた。

觀察といふ點から言ふと、或は今少し細緻なところがあつても好いと思つた。空想を餘り多く使役したやうな痕もをり〳〵はある。しかし私はこの一冊によつて、一種の新しい藝術的印象を受けたことは爭はれない。それはヂレッタンチシズムの上に積み上げられたやうな一種の印象である。

柳田君の『遠野物語』これにもさうした一種の印象的の匂ひがする。柳田君曰く『君には僕の心持は解るまい。』又曰く『君には批評する資格がない。』

粗野を氣取つた贅澤。さう言つた風が到る處にある。私は其の物語に就いては、更に心を動かさないが、其物語の背景を塗るのに、飽まで實際を以てした處を面白いとも意味深いとも思つた。讀んで印象的、藝術的のにほひのするのは、其内容よりも寧ろ其材料の取扱方にある。

明治時代の『老媼茶話』と云つたやうな處をねらつて書いたところが面白くも

あり可笑しくある。道樂に過ぎたやうに思はれる。

『石神問答』といふ方は中々難かしい。これは、本當に私には批評する資格がなかつた。

微かなる匂ひ

日影がさしたり細かい雨が降つたりして今日も暮れた。書齋の前の芭蕉の大きな葉は濡れて、それに夕暮の窓のランプの光がさした。雨がまたサッと一しきり音を立てゝ通る。それが何となく心の底をそゝるやうに思はれる。微かなる藝術の匂ひ——さう言つたやうな感じが薄暮の光の中に漂つて、難かしい理を談する氣にはなれなくなつて來た。

妻や子供等はまだ歸つて來なかつた。

人情

世の中に普通に言ふ所の人情といふものがある。あの人は人情が無いとかあるとかよく言つて居る。私は此ごろある事でその所謂人情と言ふことを考へた。

私の今の考へでは、人情といふことではまださう深い處に達して居ない。人情などゝ言つて居られない場合がある。人情と言ふものは即いた形である。同情した形である。離れて見た形ではない。人情を主とした近松の戯曲が何處かに小さい主觀の面影のほの見えるのは止むを得ないことである。

涙が大抵の場合虚僞である如く、人情も亦同じく虚僞であると思ふ。離れた形から冷靜に見た時には。——私は普通に言ふ人情などゝいふ處に止まつて居られない。

人情の撲滅

この人情と言ふものは、兎角人をして行く處まで行かしめないと言つたやうなところがある。多くの人間は人情といふところで妥協して、其奥には入つて行かない。寧ろ入つて行く勇氣がない。人情を撲滅したところに初めて新しい意味が出て來る。

束縛

深く互に愛すれば愛するほど、其束縛が解けなくなる。一面離るべからざる味方であると共に、一面また離るべからざる敵である。親は其子をよく勘當する。しかしまことに勘當し盡したものはない。他人ならば——悠々行路の人たる他人ならば、勘當などゝいふ心持にはなれない。さういふ心持になるだけそ

れだけ、その束縛が解けないのである。

私はある母親に言つた。『餘りに可愛がつたから、さういふことになつたんです。子の生存と親の生存との烈しい衝突です。だから、昔から賢母といはるゝ人は其子に白い齒を見せないと言はれたものです。慈母であると共に嚴しい母親でなければならなかつたのです。母親が其子を愛する。唯それだけなら、それは溺れたものであります。捉はれたものであります。私のいふ離れた形ではありません。少くとも物を見た形ではありません。今になつてさういふ小悲劇の起るのは仕方がないです。』

涙

人の泣くのを見ると謂ふことは、不愉快なものだ。同情の起るといふことよりも、何だか腹立しくなる。さういふ世話場を見せられた報酬に、うんと骨に

徹するやうな皮肉を言つて遣りたくなる。

涙は虚僞である。激した感情は酒に醉つた時のやうなものである。理想を抱いて容易に誓つたり何かする人は、内心いやと思ひながら、好きなやうな顔をして遣つて行かなければならないやうなハメによく陷る。そして其人はこれを理想に對する努力だといふ。

この理想に對する努力が精神肉體の勢力を消耗し盡すといふことを知らない。

そればかりではない、さういふ人はそれを『虚僞』だと自覺しないのだから困る。それが『眞』だ、『人情』だ、少くとも、『自己の衷心だ』と思つて居るのだから困る。

よく泣く女、よく誓ふ女、よく激する女、さういふ女には『虚僞』が多い。

『出發前半時間』

今度の自由劇場でやつた『出發前半時間』は面白かつた。矢張、脚本の荷が勝つたといふ處はあつた。しかしあれだけに見せて呉れたのは嬉しかつた。あゝした烈しい思想と見物人とのコントラストが一種のアイロニイのやうにも思はれた。役者(主人公)の言つて居る言葉の中には、實に近代的思想がよく出て居る。

唯私の不思議に思つたのは、脚本で讀んだ時には、役者(主人公)の言葉に、一種實感から來るいやな感が伴つたが、劇で見ては、それが出て來なかつた。私はそのいやな感が伴つて出て來なければいけないのではないかと思ふ。

ヱデキントはさういふ處が特色ではないと思ふ。

『朝日』のある批評家は、其皮肉が淺薄でいけないと言つて居た。痛切なところがないと言つて居た。それは單に役者の技術を評した言葉ではなかつたやうだ。

近代文學に痛切といふことを求めることがよく流行する。痛切といふのは何ういふ意味か分らないが、『出發前半時間』から痛切なる皮肉が見出されなかつたとすると、其所謂痛切は第一義とか、憧憬とか、感激とかに生ずる甘い痛切であるらしい。それを要求する眞面目な心も矢張甘い眞面目な心であるらしい。

痛切といふことにも階級があるし、眞面目といふことにも度數がある。

『生田川』

そしてこの批評家は『生田川』が面白かつたやうに言つて居る。

私の見た所では、『生田川』は甚だあつけない劇であつた。私はあれを見て、私共が曾て學んだ舊派の和歌を思ひ出した。私の歌の師匠は桂園派の人であつ

た。私達はあゝしたやうな心地――あの劇に味はれるやうな柔かいやさしい心地でよく歌を詠んだものだ。あの最後の幕の餘情の殘し方などはそつくり舊派の歌のやり方である。

私と一緒に見て居た友達は、昔、矢張一緒に歌を詠んだ人であつた。あの女が後姿を見せて川を見て居るところだの、二人の男が門の前に來る處だのは、流石に好い味がすると言つて居た。しかしそれは矢張舊派の歌の味である。クラシックの味である。

それからあのくゞひを使つた處を象徴だと言つて居たやうだが、あれだつて象徴的と言へるか何うだか覺束ない。あゝいふ運命の前兆と言つたやうなことは日本の古い文學にも澤山ある。少しヤリ方に新味があつても好いと思ふ。

それから言葉などでも、折角現代語を用ゐたのだから、今少し突込んで入つて行つて貰ひたかつた。あれだけなら、何も現代語を用ゆる必要がない。

『出發前半時間』のやうな烈しい新しい劇の次に、あゝした柔かなクラシックな味のする劇を出したのは、舞臺監督の苦心の存する處かも知れないが、私達には何だか日本の作者の劇が西洋のに比べていかにも内容がないやうに思はれて殘念であつた。

しかし『朝日』の批評家のやうな人も居るから、一概には言はれないかも知れない。

細かい心理

眞面目と虚僞、痛切と不徹底、同情と皮肉、説明と描寫――かうしたものゝ中には細かい心理がある。

平行線

ルシアノ、ジユコリの『平行線』といふ小説は、別にたいしたものではない。最後など殊に甘いところがある。しかし、『平行線』といふやうな見かたは面白い意味のあることだと思つた。世の中には平行線が多い。觸れさうで觸れずに展開して行くライフが意味が深い。親と子も平行線である。戀人同士も平行線である。友達も平行線である。

覺醒

『出發前半時間』の中で、役者が作曲家に剽竊を勸めたり、市の價といふことを說いたりする。最後に金を出すところがある。作曲家が見るも穢らはしいといふ風をして憤慨して出て行く。

『あの作曲家に役者の出した金を難有く感激して取るといふやうなところが出て來ると、始めて自己革命といふ重大な意味が出て來るのだ。其處で始めてア

イデアリズムの夢が覺めるのだ。』

私はかう思つて見て居た。

『寄生木』と書いた理由

『婦人くらぶ』に蘆花氏が『寄生木』を書いた理由と言つたやうな話が出て居る。

私は詳しく讀んだ譯ではないが、其中にかうした意味の文句があつた。『寄生木は乃木大將及び夏子、夏子の家族に讀んで貰へばそれで好いと思つて書いたのだ。現に、讀んで呉れたやうであるから、私の目的は達した』、又幽靈の結婚といふ小見出しで、『夏子は幽靈的結婚をしたものだ云々』といふことが書いてあつた。私は變な氣がした。これは訪問記者のさかしらではないかと思つた。しかしさうでもないらしかつた。

私の考では、藝術が人生の爲めの藝術になるのさへ嫌ひだ。藝術に個人を對象しやうなどゝは夢にも思はない。藝術を論說や三面記事と同じやうに考へては人生の眞相が見られやう筈がない、描かれやう筈がない、此頃流行の告白といふ文字も甚だ無意味なことだが、蘆花氏が本當にさういふ意味で書いたのなら、『寄生木』一篇は唾棄すべきであらうと思ふ。

それから實行上(藝術家の)から言つても、甚だ博大な思想に缺けてゐる。夏子は幽靈的結婚であらうが、何であらうが、實際上必至の理由があつて、さういふ道に行て出つたのだ。其處は個人としても尊重しなければならない。その現象に對する價値は蘆花氏が決めることが出來ないものである。藝術家としても、描くより他に決めることの出來ないものである。それであるのに、さういふ風に言明するのは、萬人の生存獨立を貴ぶといふ博大な思想が缺けて居るのではないだらうか。

これはモデル問題以上の問題である。

麥の道

此頃の晴れた日は實に好い。

新綠が漲るやうに日影にかゞやいて居る。『明窓淨几』といふ感がある。『綠蔭幽草勝花時』實際さうだ。

十年ほど前に、獨歩と近郊を散歩したことがあつた。丁度今頃であつた。麥が赤くなつて、日が晴れやかに光つた。獨歩は、周防の田舍に行つて、若い者を集めて、村塾を開いて居た時のことを話した。吉田松陰などがその頃のかれの理想であつた。麥の赤く色付いた田舍道をかれは青年達と將來の希望を語りながら歩いた。あの時分——あの時分と言ひながら、獨歩は郊外の麥の道を私と並んで歩いて行つた。今頃になつて、麥の赤くなつたのを見ると、いつも私

は獨歩の村塾を思出した。

模擬者

山路愛山氏が先月の『新潮』で、獨歩は西洋文學の模擬者で、自然主義でも何でもないと言つて居た。又、その書いたことが眞實でも何でもないと言つて居た。愛山氏は獨歩の生活をよく知つてゐる人である。それだけ私は、その言葉を極端だと思つた。

西洋の模倣者といふよりは、西洋近代文學に見るやうな短篇の創始者だと私は思ふ。明治の文學に、獨歩以前、西洋の近代文學に見るやうな式の新しい、見方の新しい短篇を書いた人があるだらうか。一葉の作品には、決してツルゲネヱフやドオデヱの短篇のやうな味のあるものはない。露伴紅葉は無論のことである。鷗外の二三の短篇(舞姫、文づかひなど)には、新味があるけれど文體

と見方とが餘程日本式である。近頃、短篇作者として名聲を博した水蔭の作中にもさうしたものは甚だ稀である。獨歩に至つて、始めてフレッシな瀟洒なハイカラな西洋にも劣らないやうな短篇が出來たのである。

それから眞實のことが書いてないといふのは、何ういふ意味か解らない。獨歩の作品位日本の社會に活きた人間を書いたものは、この時代にはないと私などは思つてゐる。かれの取つた材料がひろくないと言ふのなら、それは言へるかも知れないが、眞實のことが書いてないなどゝは何うしたッて言はれない。

自然主義でないといふ理由も、ひろく材料を他に取らないといふ點から言つてゐるのかも知れない。ゾラの自然主義などから見れば、さうも言へるだらう。

しかし獨歩は若くして死んだ。生きて居たら、もつと出て行つたらう。獨歩の狹いのは事實だ。しかし眞實なのも事實だ。日本の自然主義が獨歩のその眞實といふ處から出て來たのも事實だ。

寂々

これから先、出て行きやうがない、精神を殺して醉生夢死をするより他が仕方がない。かういふ風に將來を考へる人がかなりにある。しかしそれは一種の空想ぢやないだらうか。さういふことを言ふ人はよく過去の材料に由つて將來を豫想するが、この豫想が矢張空想であると私は思ふ。要するに行つて見なければ解らない。突當つて見なければ解らない。空想や豫想をして否定したり肯定したりして居るのは、まだ其人の見方なり考へ方なりが自然主義的思想に達して居ない證據である。

醉生夢死とか物質的とか言つて、それを卑しいやうに言ふ人があるが、突當つて見て其處に何んな内容があるか解らない。醉生夢死と思つて居たところに、充實した力强きライフがあるかも知れない。一體、ライフを否定するとか肯定

するとか言ふのは、個人及び社會に各其時に當つての考へ方で、否定が全部でもなければ、肯定が全部でもない。風の吹く日には樹が鳴る。雨の降る日には氣分の鬱陶しさを感ずる。要するに Indefference of nature である。

肯定？否定？

だから私などは肯定も、否定もする。又否定も、肯定もしない。突當つて行つて、實際上から得た内容に充實を求めるばかりである。

作品の價値

ある席上で、鷗外先生の作品の話が出た。『何うしてあゝ消極的でせう』とある人が言つた。

『さうですな、消極的ですな』

と一人が應じた。

『消極的？』と默つてゐた一人が問ひ返すやうに言つて、少し考へて、『さうだらうか、消極的だらうか』

『何處か問題を避けるやうな氣味があるぢやありませんか。大きな重い問題はソッとして置くぢやないでせうか』

『傍にソッとして置く處が面白いんぢやないかしらん。消極的だと言へば言へるでせうが、そこがあの人の作品の價値ぢやないでせうか』

私は默つて三人の話を聞いて居た。

私の考から言ふと、折角心を開いて出て來たのである。自己の感じたことだけはドシ〳〵出して了ひたい。躊躇しては居られないといふ心持がする。

しかし飜つて考へて見ると、さう一概にも言はれないところがある。私達と鷗外先生との間には、年齢の相違もあれば、趣味の相違もある。

私はかう思つて矢張默つて居た。

其時、刺戟の強い作者、刺戟の弱い作者といふやうな話も出た。

實際上にいふ刺戟と藝術品の上に顯はれる刺戟といふことの區別を私はそれとなく考へて見た。刺戟が實際上に強いといふだけでは、藝術的にはまだ意味を成さない。刺戟を受ける時は烈しく受けて、さてそれを離して考へて見るといふ心持、そこに藝術品上の刺戟がある。

『矢張、それにも單純に解釋して了ふことの出來ない處がありますね』

私はかう言つた。

逼眞

藝術品が逼眞の境に達すれば達するだけ、讀者は高級の讀者を要することになると思ふ。いかなる想像をも許すことの出來るやうな作品は、普通の讀者に

は受けるかも知れないが、高級の讀者にはすぐその抽象的なところを發見されて了ふ。

讀者も批評家も作者と同一位の經驗を持つて欲しいといふのが作者の願である。知らぬことも解るやうに書いて欲しいといふのが讀者の希望である。

成たけ說明をせずに、成たけ『自然の再現』といふことに骨を折れば折るほど讀者には解り難くなるといふ傾向がある。『自然』を明瞭に見るといふことは實際に於ても、容易に出來ることではない。『自然の再現』の完全に行はれた作品の眞價の容易に讀者に解らないのも無理はない。

解りよく說明で書いてある作品を印象的だとか主觀的だとか言ふのは、馬鹿げた話である。

背面

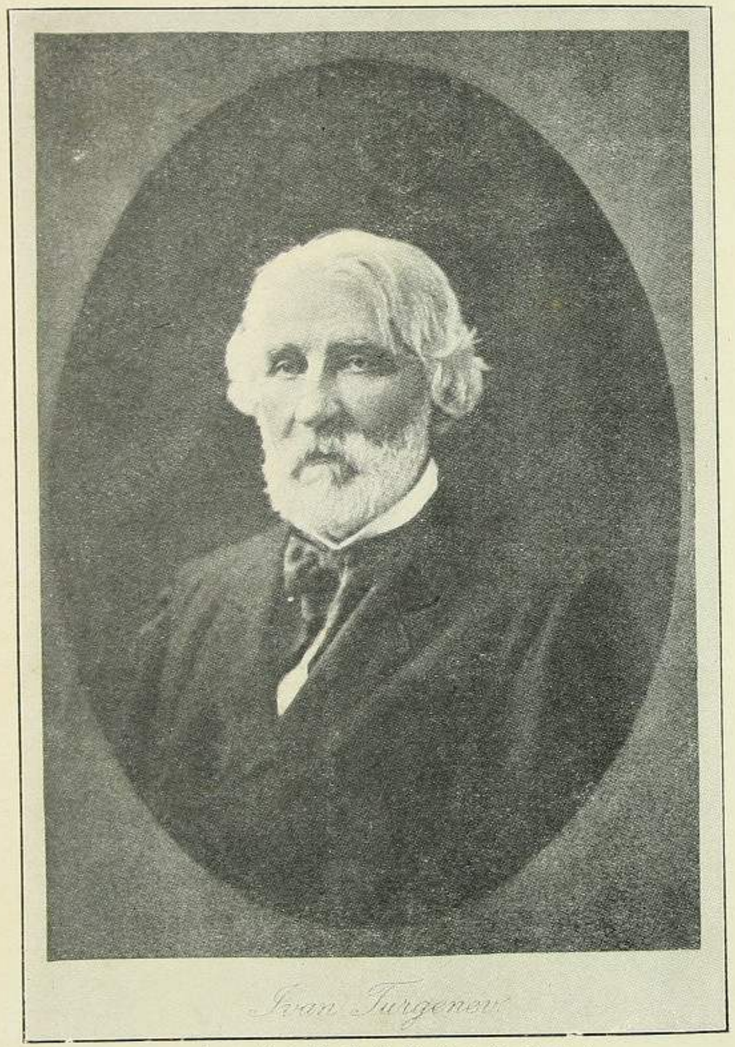
寧ろ見えずに、技巧の文藝だとか、平らに書くと、その背面は見ずに、——

低徊趣味だとか云ふ評家がある。又た昔あつた寫生文だなどゝ言はれる。

しかし考へて貰ひたいのは、同じ寫生にしても百から千まで、作者の見方があるものである。其の作者の見方といふこと——平らに再現を心懸けて居ても、其再現の背面に作者の見方のかくれて居るといふこと、かういふことは見逃してはならない。それを見逃すやうな人は低級なる評家であり讀者である。批評するなら其處を批評するのが本當であると私は思ふ。自然主義を技巧の文藝だなどゝ云ふ人は、其處が解らないのではないかと思ふ。

さうかと言つて自然主義の見方考方までを技巧的だと言ふのでもなかつたやうだ。

雨



イワン・セルゲイヤッチ・ツルゲエネフ

今日は雨が降つて居る。

初夏でなければ味はれないやうな雨の日だ。今朝は降頻る雨の音を夢現に聞きながら、一種の哀愁の加はつた淡い心地を味つたが、かうして机に向つて書いて居ると、言ふに言はれない好い心地がする。

硝子戸を透して、裏の庭が見える。白躑躅がくつきりと雨の降頻る中に見えて居る。周圍の樹が風を交へた雨に波のやうな音を立てる。

いろ〳〵なことが思出されて來る。

友

ある夜親しい友と電車を小川町の角で下りて、町の灯の明るい通を歩いた。

『此頃でなくつちや味はれない町の感じだねえ』などゝ語り合つた。

青年時代には毎日逢はなければ氣がすまなかつたやうな友達にも、此頃では

一月も二月も逢はずに居ることがある。お互に忙しい身になつては、さう逢つて話をしても居られない。さういふ友達と昔よく通つた町を歩くのは嬉しくもありなつかしくもあつた。

友は病氣後を少時山の溫泉に行き度いなどゝ言つて居た。花の殘つて居るやうな山に行き度い。海も好いが、今頃は何うしても山のことだ、――かう友は言つて、彼處か此處かと心當りを探した。其室は川に臨んだ二階の一間であつた。前には傳馬や荷足や一錢蒸汽などが通つた。船に積んである箱は何だらうなどゝ言ひながら、杯の遣り取をした。灯のつく頃、豐かな頰の色をした半玉が、山姥の『あやめ菖蒲や燕子花』といふところを舞つて見せた。

友は歸りに小川町の通で、夏帽子を買つた。二人は其處からいろ〳〵なことを話しながらお茶の水まで來た。

感激のライフ

意義あり内容ある文藝が欲しい。感激が欲しい。白熱度の閃めきが欲しい。かういふことを言つた時代もあつた。さうして、意義とか内容とか、感激とか、白熱度の閃めきといふものに向つて憧憬した。そしてその憧憬の空虛なのを知らなかつた。やがて、實際の充實したライフはさういふものゝ以外にあることを段々知つて來た。其の時の精神の敗滅の悲哀は丁度晩春の愁ひに似て居た。

感激のライフ――それが好いことには相違ないが、私達はもう再び其處に歸れもしないし、又歸る必要もない。

私の書くものだつてさうだ。

南の窓

南の窓の障子に雨が吹懸けた。

障子の紙はしとゝに濡れた。久しく味つたことのないやうな若々しい心地になつて來た。

窓を明けて見ると、芭蕉の若い芽を出したのや、扇骨木や、海棠や、楓のわか葉などの濡れて居るのが見えた。雨はザン〳〵降つた。

濡れた雀が軒で鳴いて居る。

自然物

私は何うかして人間をも自然物の一つとして書くやうな氣分になりたいと思つて筆を執るが、いつも滿足にさうした一行が書けたことがない。

好い木もある、惡い木もある。蛇のやうな毒蟲もある。しかし皆な共通の生存の力を持つて此世に出て來たのだ。何うかして好惡といふ心持を持たずに見

たい。いつもかう思ふが、しかし駄目だ。

藝術と實行の問題は、いつも細かい心理に入つて行く。同じ人間で居て、同じ人間を自然物のやうに見るといふことが、一體初めから不可能のことであるかも知れない。しかし完全に見たり書いたりするには、何うしても其處まで行かなければならないやうに思はれる。現に、自然主義と自然主義以前の文藝との相違はさうした處にある。

醫師は五十歳までゞ切上げて、跡は何か別の仕事をしなければ生存上不利だといふことを或大醫が言つたといふ話を昨夜友の一人がした。

人の生命を預る。それが職業でいくら平氣で居ても自己の生存に影響しないわけには行かないといふ。これが矢張私達の實行と藝術との心理問題と同じ形式である。『さう極端まで行かずに、バランスの取れる邊に留つて居れば好いぢやないか』かう昔の文藝家はいふ。しかし眞劍の生命を預る段になつたら、そ

んな浮いた輕い心地では居られなし、又居られたら、其醫師は餘り信頼するに足りないといふものである。

眞劍

眞劍で離れて居るといふことは難かしいものと見える。だから樂な型に入つたり、實行の人になつて了つたりするのである。社會の爲めの文藝は藝術の眞面目なところに立つて居られずに傍にそれて行つた形であるし、低徊趣味も同じく餘裕を其方面に求めて遁れて行つた形である。

昔の文藝は同情して書いた。自然物の一つと言つたやうに解剖を用ゆるやうなことはなかつた。自然主義以後の文藝との違ひは此處にもある。

此頃の脚本

此頃出る脚本にも注意を拂つて讀んで居る。中には新しい形式を取つたものもかなりにある。しかし第一に呑込めないのは、現代に生きてる人間に注意を拂はないことである。新しいとかめづらしいとかいふ所ばかりを狙つて居る。新しい會話、めづらしい形式、さういふ所を發足點にして、西洋の脚本の眞似をして居る。潑剌たる中心から動いて來るやうな生氣のないのも無理がない。發足點が違つて居るやうに私には思はれる。

新しい刺戟

新しいとかめづらしいとかいふことばかりを搜し廻つて居る詩人の群もかなりにある。私はそれは惡いことだとは思はぬ。しかし私はそれだけでは滿足が出來ない。私はさういふ詩人が何故平凡なる事實、醜惡なる現實の中に新しい意味を發見しやうとはせずに、趣味感情に漂はされて、單に好奇心を滿足させ

るにとゞまるやうなことをして居るかを怪しむ。刺戟に生きんとする文藝と謂ふやうなことをある人は論じた。刺戟？　刺戟？　私などは人間の一大事なる死に對しても刺戟を起さずに平氣で見るといふ稽古をして居る。單に刺戟其物にのみ生きやうとするやうな單純なことは、何うしても考へられない。

生効

何うも趣味がない。何うも面白くない。よく人はさういふことを言ふ。つまり現實から其人の趣味感情に適應したものだけを抽出して喜んだり嬉しがつたりしてゐる。氣に入らないものにはすぐ眼を閉いで了ふ。眼を閉いでは何も見えるものではないといふことは忘れて了つて居る。

私は青年時代に、兄などが平凡なことに甘じて、平凡な月日を送つて居るのを、甚だ意氣地のないことに思つた。あれで生きてる効があるんだらうかなど

とも思つた。生きてる効！　私は此頃では生きてる効などあつてもなくつても好くなつた。生きてる効などゝいふことを言ふ中は、まだ趣味感情などで小さく縛られて生存して居るので、まだ現實に觸れて居ないといふものだと思つた。

現　實

現實に觸れる。人は容易にこれを言ふ。しかし私は其一語の空虛なのを思ふ。現實に觸れるといふことは甚だ難かしいことではないだらうか。現實に觸れると言ふのは、現實に沒頭するといふことではない。つまり普通人の遣つてるやうな無意識狀態を言ふのではない。さうかと言つて現實を唯々單に冷靜に見て居ると言ふのでもない。無意識狀態から意識狀態に移つて、現實といふものを仔細に見るといふ處に、初めてそのまことの接觸作用が達せられる。

仔細に見るといふ心持――何んな刺戟をも平氣で見るといふ心持、單に好奇心にのみ支配されない心持、さうした心持にならなければ、まことの『現實に觸れる』といふことは得られない。

『現實に觸れる』といふ一語は隨分いろ〳〵な方面に用ゐられた。しかし『現實に觸れる』といふことを本當に考へた人は幾人あるだらうかといふ氣がしてならない。

少くとも私はさういふ處を重く見た。さういふ處から發足して來た。何んなことにも目を閉ぐまい。何んなものにも好惡の念を加へまい。そして廣く實際の現象を現象的に見やう。私は今もかう思つて居る。私の言つた『露骨なる描寫』とはさういふ處を發足點にして居る。私はさうした意識狀態に心と眼とを置いてから――內にのみ開いた眼を外に轉じてから、少しは人間のことが見えて來たやうな氣がした。

私は先づ最初に實際上に於ける空想と神經過敏とをかい捨てゝ、そして實際に對して見た。

誤解

世の中によく誤解を遣る人間がある。

私は何が恥しいッて、誤解をする位恥しいことはないと思ふ。

誤解は其人の不聰明を意味する。其の頭の不徹底を意味する。不聰明に不徹底！ 世の中にこの位恥しいことはあるまい。無學はまだ好い、社會的不名譽も猶忍ぶべし、不聰明と不徹底に至つては、忍ぶべからずである。

そしてこの誤解は何から來るかと思ふと、空想から來る。

案ずるより產むが易い。先づ其事に向つて突進せよ。實際に當つて見なければ、其狀態は解らない。其狀態が解らなければ、その判斷がつかない。古今を

問はず、戰術の中心が果敢斷行を以て其極意としてゐるのも此處にある。

空想を排する眞意は此處にある。

弱者の文藝

自然主義の文藝が弱者の文藝の色を帶びたのは、惜しいことだ。同じ傾向でも、作者の種類に由つて、千變萬化するのは當然で、別に怪むに足らないが、自然主義には、今少し强い男性的の處がなくてはならないと思ふ。告白といふ字が流行つり、努力といふ字が流行つたりするのは、其の弱者の文藝たるを表白して居るやうなものである。自己告白、馬鹿にしてはいけない。吾々の作は自己告白なぞを遣つて居るのではない。現象を現象として描いて居るのだ。自己を自己として書いて居るのではなく、盜賊、殺人などゝ同じ血の流れて居る人間として書いてゐるのだ。また努力などゝいふことも考へて居ない。私達が

藝術なり仕事なりを一生懸命に遣つて居るのを他から見て言ふのなら、それは努力と言へるだらうが、私一個人に取つては努力だなどゝ考へたことはない。

世の中では、自然主義は破壞の處に意味があつたが建設に至つて力が足りない。かう言つて居る。私は建設などゝいふことを空想したことはない。或は破壞といふことも豫期して居らなかつたかも知れない。唯々力の充實――空想を排した力の充實を欲したまでゝある。

破壞と建設――何うしてかう人は二元的に物を見たがるのであらうか。

上と下と

然し、面白い傾向には面白い傾向だ。純客觀主義と主觀主義と相交錯して居る此頃の傾向は面白い。上を向くものもあれば、下を向くものもある。現象なるものゝ無意味に踏留つて居られないといふやうな作者も出て來た。ある人は

これを評して、自然主義脫却の傾向とした。そしてその人は自然主義の本旨を技巧主義に置いた。

しかし私は考へる、自然主義の本旨は果して唯だ物を外面的に並べる技巧主義だつたらうか。それは唯自然主義の物を顯はす上の手段だけを見た爲めではないだらうか。現象の再現――その平面的再現の千變萬化、其處に見方考へ方の千變萬化があるではないか。其評家は其見方考方を自然主義以前の文藝と同一に見て居るのであらうか。

イブセン

イブセンは自然主義でないと言つた人がある。乞ふ內容を一檢せよ。乞ふ其の經驗を重んずる所に注目せよ。一行、一語、其處に實際を重んじた强い力が見えるではないか。

背面の主觀

自然主義の背面にある主觀を物質的人生觀とある人は斷じた。物質的人生觀とは、何處から何處までの內容を指すのだか、それは知らぬが、私は其主觀がある一種の人生觀であるやうには思ひ度くない。もつと機微な有機的なものであると私は思ふ。少くとも私は自然がもつと博く映るやうに修行してゐる。

昔は此の背面にある主觀が、或は哲學で塗られたり、美學で塗られたり、あの一種の人生觀で塗られたり、或ひは宗教的情緒と言つたやうなもので塗られたりした。それを一拭して自由な自然な型にはまらないものにし、又しやうとして居るのが自然主義の本旨である。そこでこの自由な有機的な主觀を得んが爲めに修養して居るのである。攻擊するなら、其處を攻擊しなければ、要領を得て居ないと言ふものだ。

ホルツの徹底自然主義は一面確かに技巧主義である。或は甚しく技巧に偏つたが爲めに其の充分の發達を遂げることが出來なかつたのか知れない。しかしあれにも背面の主觀はある。あゝいふ風に現象的に物を見る氣分にならなければあの作は出來ない。其處を考へて欲しい。

だから、私は物質的人生觀などゝ抽象的に言はずに、フオロベルの主觀、ゾラの主觀、トルストイの主觀、モウパサンの主觀、森鷗外の主觀、島崎藤村の主觀、永井荷風の主觀、かういふ風に見て評論して貰ひたい。

自然主義の作者の主觀が、西洋でも日本でも、自然主義勃興以前の作者の主觀に比べて、著るしく自由になり、自然になつたのは事實である。又其主觀が明になり、其領分が擴げられたことも事實である。鋭く徹底した形を帶びて來たのも事實である。

趣味や好奇心で出來た藝術品とは大分違つて居る。

アルツエバアセフの『妻』

此頃では、主觀を迸出したやうな作品が多くなつて來た。フランスの文壇に見るやうな技巧的では滿足出來ないといふ風に突進して來た。昇曙夢君の譯されたアルツエバアセフの『妻』などを讀んで見ても、さうした面白い傾向が見える。主觀を自然のまゝに出して來る。そして其主觀が昔の小さな主觀ではなしに、自由な自然な誰でも點頭かれるやうな主觀である。

この生々とした傾向を私は甚だ意味があると思ふ。私はこの『妻』などの傾向とホルツの徹底自然主義の傾向とを、自然主義の相反した兩極の好い例だと思つた。

一は技巧に向つて突進し、一は內容に向つて突進して居る。

享樂

『歡樂』の作者の作品にさうした傾向があるのは私も認める。しかし何處か張詰めて居ない處がある。遊んで居る。眞劍になれないんぢやなくつて、眞劍にならない處がある。贅澤な文藝といふ趣がある。

私などは自己の作品が贅澤な文藝になるのを此上なく恐れて居る。何をしても暢氣になれない性分だと見える。しかし暢氣な人を私は餘り羨ましいとは思はない。

享樂といふことは何うしても出來ない性分だ。何うかすると、『何うせ一度は死ぬんだ。出來るだけ面白く遊ばう』などゝ思ふこともあるが、一度だつて完全にさうした心地に出會したことはない。遣つたつてさういふ氣分になれないんだから駄目だ。女だツて玩具のやうな氣で玩ぶことが出來ないのだから駄目

だ。

ある對話

ある時かう言ふことを或人と語り合つた。

『今の批評家は作品だけを批評せずに作者をも合せて批評する。こんなことを書いては作者の人格も思ひやられるといふ風な批評の仕方をするが、かういふのが好いのかねえ』

かう言ふと、其人は、

『でもさういふ風に見るのは、作品ばかりを離して見る批評よりは進歩したのぢやないでせうか』

『それはさうだらうねえ、それに相違ない。けれど何故さう人格の上にまで是非上下の區別をつけるのだらう。世の中にはいろ〳〵な人格がある。誰だッて

それを批判して、上下の區別をつける權利はない、僕は飽までも僕だ、君は飽までも君だ。君が僕を批判したッて僕は一毫も減じない。君だッて矢張さうだ批評といふものは、其の君なら君、僕なら僕の現象を現象的に記して、さうして其の妍醜を見る人の判斷に任せるといふ種類のものぢやないかしらん。見る人の批判が自然の立派な批判になるんぢやないかしらん。』

『作者ならそれで好いかも知れないが、批評家はそれぢや不滿足なんでせう』

『左樣かねえ。僕はさうした方が却つて批評家の本領を發揮しやしまいかと思ふんだがねえ。さうすれば、作者がやると同じやうな人生批評も出來るといふもんだがねえ……』

『それが中々出來ないんでせう』

かう其人が言つた。

私も口を噤んで了つた。

ライフ

二三年以來、始めてライフに近づいたといふ氣がして來た。自己の心とライフとがしつくり合つたやうな感じがする。

『もう青年の友ぢやない』

私はいつもかう思ふ。

ボルクマン劇を見に行つた時、青年の群は、あのエルハルトの若々しさに拍手喝采した。

『私は若いんです！』

これが青年の心を動かした。

しかし私は『私は若いんです』と言つて橇に乘つて去つたエルハルトの老年時代を思はぬ譯には行かなかつた。『ボルクマン』はイブセンが晩年の作、老人

の書いたらしい脚本といふので評判だが　成程さうした處がある。作者は無論エルハルトの老年時代をも眼中に入れて書いたに相違ないと私は思つた。人間の若い時から事業に熱中する中年時代、それから老年時代、それを背景にして居るところがいかにも意味が深い。それに最後の幕にフィヨルドを背景に見せたのが深いやり方である。其處には我々は人間と自然との對立を見た。冷酷なる自然を背景にして、人間が戀に熱中し、事業に熱中し、そして終に悶死するさまが歴々と指された。ペスミスチックメロデーの流るゝやうなのを私は感じた。

青年の心、中年の心、老年の心――私は染々とライフを思つて見た。

『私はもう青年の友ぢやない』

私は其拍手喝采の聲を聞きながらさう思つた。

一葉

一葉――紅葉――獨歩――二葉亭。日本でも評論を加へて好い故人になつた作家が大分ある。少し離れた眞價値を論ずるやうな評論が少しは出ても好い。

私は此間、『濁江』を繰返して見た。描かれた男は今から見ると物になつて居ない位拙劣だが、流石女性の解剖にはすぐれて好い處がある。結末は拙いが、女主人公の狀態はよく書いてあつた。一葉の自己の心理描寫といふやうなところがある。

紅葉の『多情多恨』をも讀んで見た。成程旨いものだと感心した。說明と描寫との區別に於ては不十分なところはあるが、文章は中々手に入つたものだ。それに流石に『自家の米の飯だ』と言つたゞけあつて、結構にも自然らしい處がある。殊に面白いのは、想像で書いたのでない處が著るしく生氣に富んでゐることだ。柳之助の描寫の拙いのは、想像に依つたからで、葉山及び葉山の細君の旨いのは事實に依つたからだ。これを見ても、事實の尊ぶべきことが解る。待合の描寫なども、實驗したゞけあつて、鮮かな色が生々としてゐる。

今の立場から詳しく評論して見たら面白いと思つて居る。

獨歩

獨歩はイギリス氣風が好きだつた。イギリスの紳士の立派なことを常に讃えた。それにイギリスの紳士の瀟洒と堅實とを獨歩自分も持つて居た。其作品にも矢張さう言つた風がある。

西鶴の『置土產』

近い田舍に行く時、私は、明治二十五年頃に飜刻した『西鶴置土產』を一冊懷

にして汽車に乘つた。

始めは挿畫などに興味を有つたゞけで、別に引付けられるやうな心持もしなかつたが、一章二章よむ中に段々面白くなつて來た。後には『矢張豪い短篇作家だナア』と獨語ちた。

多くは大盡の紙子になつた生活が書いてあつた。そしてそれがいかにも生々と書いてあつた。嘗て島原で全盛遊びをした男が五十近くなつて、物詣の次手に島原の廓をそゞと覗いて見るところがある。色ある衣裳が掛けてあるところなどが鮮かな簡勁な筆で書いてある。それから嵯峨あたりに行つて、昔廓で端女郎か何かしたことのある女と話をして、その昔太夫を揚げたやうな心持になつて一緒に寢て、旅費をすつかりなくして、歸りには淀の川舟には乘れずに草鞋ばきて歸つて來るといふ一節があつた。いかにも盛りを過ぎた中年者の心持がよく書てあると思つた。それから圍ひ者をして置いた田舍の大盡が廓通を始

める話や、紙子になつてぼうふり賣になつて昔の太夫と一緒に暮して居る處へ友達が尋ねて來る話や、その他いろ〳〵なことがいかにも巧に書いてあつて、ライフの推移といふことを染々と思はせた。殊に細かい處に筆を着ける技倆は立派なものだと思つた。

私は此時代にあつて事件とか筋とかに重きを置かなかつた此作者が殊にえらいと思ふ。

アンドレエフ

描寫が重ぜられて、狀態を書く風が自然盛になつて來た。かうしたのだといふ説明でなしに、かういふ風だといふ描寫を見せることに作者は骨を折つて來た。

しかし少し心を用ゐないと、描寫がすぐ説明になつて了ふ。アンドレエフが

この描寫と說明とを細かい心理を繫いて居るやうな微妙な書方は、容易に企て及ぶことが出來ないものだと思ふ。フロオベルの『シンプル・ハート』なども これがいかにも巧に行つて居る。

客觀といふこと

何が難かしいと言つて、自己を客觀する位難かしいことはあるまい。離れたつもりで書いて居ても、いつの間にか即いて居る。三人稱で書いて居ながら、內容は一人稱になつて居る作が澤山ある。現に、私もさうした非難を受ける作品の多いのを恥ぢて居る。

けれどかういふことがある。自己を殘る處なくさらげ出して來ると——弱點でも何でも忌憚なく暴露して來ると、それが一種の客觀性を帶びて來る。

主觀を押しつめて行くと客觀になり、客觀を押しつめて行くと主觀になると

いふやうな心理作用があると見える。

主觀客觀の問題は、すぐ議論に上るが、さうした心理作用にまで立入つて深く考へて見たい。全然正反對と思はれるものが、同樣の効果を來すところなどは一考すべき價値があると信ずる。

完全と矛盾

人は多く完全を求める。また矛盾といふことを許さない。

しかし實際上完全は求められるものではない。又矛盾といふことも、微妙なる心理作用になればなるほど、多く出て來る。私は思ふ、完全といふことは求めたくない。又、矛盾も人間には必ず免るべからざるものである。苟も考へ其物が有機的であればあるほど、一層さうした傾向があるに違ひない。

私は議論上矛盾したことなどを求めたくない。唯、その心理を趁つて見れば、

其人の情緒がよく解る。

不完全を容れ、矛盾を容れた處から、新しい泉が滾々として流れて出て來る。

私は少くともさういふ處から心が開けて來た。

現今の文壇

分析の苦痛に堪へずに、引返して行つたやうなのが今の文壇の狀態である。

今、少し心を開いて見やう。かう言つて、誰も彼もその方面へと出て行つた。

象徵主義、神祕主義、さては勞働主義、その方面へと氣分が向いて行つた。

これは面白い意味のある運動である。ドイツ文壇の所謂『輓近派』は新を求むること急に過ぎて、あまりに淺露なる好奇と表面的なる模倣とに墮ちたるやうな傾きがあるが、フランスとロシアとはその特色を抱いて、各々特色ある作家を出してゐる。益々見るに値ひする『スツルム、ウンド、ドラング』である。

意識せる分析と無意識に働かれたる分析と、實行的と藝術的と、即いた心と離れた心と、それがXのやうに組み合つて、複雜した內部生命を作つてゐる。混雜、矛盾、惑溺、煩悶、その中から新しい光つたものゝ出て來るのを待つのが今の文壇の狀態である。

デカダンの群

ナチユラリズムの影響を實際方面に受けて、デカダンの詩人の群の輩出したのは面白くもあり意味もあること、思ふ。その影響を受けたのが多くは詩人の群だから猶面白い。感情を歌ひ、情操を歌ひ、憧憬を生命とする詩人は、何うしてもさういふ風に出て行かなければならない自然の傾向と見える。

フランスなどでもさうだ。リコンド、ド、リールから、いろ〳〵分析を食物にするやうな詩人の出て行つたのも、矢張さうした傾向である。分析を自己の主

觀にまで加へることの出來ない群から、デカダンといふ氣分が生れた。

自己を分析しても、それは完全に施されたアナリシスではなくて、分析した自己の狀態をすぐ實行に移して、悲しんだり喚いたり呪つたりする分析である。全意識的の分析ではなくて、半意識的乃至無意識的の分析である。

悲しむのにも、昔の人のやうに唯簡單に悲んで居ない。樂しむにも歎くのにも矢張その通りである。普通の處を通り越して、悲哀の代りに憂鬱を、憂鬱の代りに耽溺をと言つたやうな風がある。惡德、敗德をも猶歌ふといふ風である。

しかし矢張「歌ふ」といふ調子を脱することが出來なかつた。歌ふといふ心よりも描くといふ心。さういふ處まで行かないところに、デカダンの特徴がある。

歌ふ。其處には情操を誇張したやうな氣分が自然に出て來る。分析も本當の分析でなくて、齒を食み切つての分析である。或はわざと極端に趨つて行つて

見た分析である。モウリス、バレスの三部小說などは確かにさうした境である。

この「歌ふ」といふ境から出來た作品は、作者の心地とか情操とか言ふものが、讀者を動かす第一の要素になる。藝術的と言ふことが眞の離れた藝術的と言ふことでなくて、作者の心地の藝術的といふ處から來る藝術的である。普通人の心を披瀝した形と餘り違つたところがない。唯、普通人と違ふ所は、作者の心持なり情操なりが誇張した形になつてゐるといふばかりである。何物にも捉へられないといふやうな再現的氣分にはまだ餘程距離がある。

しかしこの實行の加はつたデカダンの群の心が、一種の深味のある藝術を作り出したことは面白いことだ。ことに、それが詩人の方面に於て最も多く發展したのは、當然のことで、そして意味の多いことである。小說では、ダヌンチオなどがさうした領域を切開いた人と言はれるであらうと思ふ。

香川景樹

文章より見たる現代の小說

一　革新以前の文章

小說の文章が段々變つて行くといふことは意味のあることである。硯友社時代の文章と今の文章とでは、鳥渡見ただけでも解る位に變つて居る。句の切り方が違つて居る。章の分け方が違つて居る。形容の方法なども丸で違つて來た。

形容なども多くは昔からあり來りの文句を使つて居る場合が多かつた。一歩を進めて、新意を出すといふ段になつても、强ひて奇拔な人を驚かすといふや

うな文句を考へることに腐心して居た。だから、今、讀んで見ると、いかにもその誇張されたところが滑稽に見える。馬鹿〳〵しく思はれる。紅葉全集などを繙いて見ると、さういふ弊によく邂逅す。

それから其頃の人達は、文章の綾――句と句との間の飾りや、かけ言葉や、かけ言葉にちなんだ旨い文句や、さういふものに多くの注意を拂つて居た。其頃の人達は、さういふ技巧に就いて隨分多くの苦心を拂つたものである。名句などを選擇してそれを書集めたり、近松や西鶴の筆癖をわざと學んで見たり、文章は多く術として研究されて居た。其頃では『あいつはまだ文章が生だ』とか、『あんな文章を書いて居ては駄目だ』とかよく言はれたもので、所謂文章が書けなければ、殆ど相手にされなかつた。

紅葉の文章などでは、今日見ても、煩瑣な感じの起るものが多い。うそが多い、誇張が多い。面白い文章を書くのに都合の好い材料ばかり採つて居るから、

突込むところが突込んでなく、書かないでも好いところが長く書いてある。簡潔でなかつたといふことが著しく目に付く。

其の門人の連中――鏡花とか風葉とかの文章にもさういふ弊はよく殘つて居る。『戀慕流』などはよく書いてある方だが、それでも内容が文章に伴つて居ない。

この硯友社風の文章と對立して、二葉亭の文章があつた。また一方には露伴と一葉の文章があつた。『浮雲』あたりでも、二葉亭ももう餘程新しい試をして居たが、それは主としてかれの學んだロシアの文學から來て居るので、心から意識して新時代の文章を書いたのは、餘程後のことだらうと思ふ。其證據には二葉亭が曾て『多情多恨』を賞めて、ツルゲネエフに似て居るなどゝ言つたことがある。ツルゲネエフと『多情多恨』の作者の文章内容の違つてゐることは霄壤も啻ならぬものである。『金色夜叉』などに至つては、殆ど全く根柢を異にして

居る。しかし、二葉亭の文章が、今日の文章に多くの交渉を持つて居るといふことは爭はれない事實で――餘り多くの作品はないが、その文章に就いての心懸けは、後に繼いで起つた人達の先驅をなして居た。

露伴は近松と西鶴と、それに自己の特色を交ぜたといふやうな一種特色ある文章をつくつて居た。『風流悟』などといふ文章は今讀んでも而白い。しかし何うした調子か、『一口劍』とか『椀久物語』とかいふ藝術肌の男に興味を持つといふやうな風になつて、其處から型が出來て行つた。しかし、露伴も一度は大にその型に入つた文章から出やうとして努力したことがある。それはかれが言文一致を書き始めた時代である。『雁坂越』などといふ作をした時代には、露伴もつと自由なところに出て行きたいと思つたにも相違ないし、また出て行けるやうにも思はれた。

其時分は雅俗折衷體と言文一致體とが其領分を爭つて居た。紅葉の書齋に雅

俗折衷といふ横額がかゝつて居て、『何うも言文一致では書けないところがあるよ』などと言つてゐた時代である。鷗外が『染ちがへ』といふ文章を書いたといふことが評判になつた時代である。露伴さへも言文一致で小説を書くやうになつた。かういふ評判が文壇では高かつた。

言文一致が雅俗折衷を壓倒したのは、風葉鏡花天外などの時代であつたと思ふ。其時分になつて、小説は言文一致でなくては駄目だといふことになつて來た。

二　鷗外と二葉亭

鷗外は新時代の文章に内容の方面から非常に大きな影響を與へた人だ。單に文章として見ても、大家の風があつた。翻譯の文章は思軒などは大に趣を異にしてゐた。あの堅い文章が柔かい『染ちがへ』となり、それから今日に至つたこ

とを考へると、型を破つて、ドシドシ出て行く態度がいかにも羨やましい。『文づかひ』や『うたかたの記』を書いた人が『心中』だの『百物語』だのの文章を作るといふことは不思議な位だ。

子規は寫生文を唱道した。それが硯友社風のゴテ〳〵した文章に對する對抗運動であることは認めて好い。しかも其影響は文章を書く態度とか、物を見る見方とかで、深い根本の方面からはさう大した仕事はしてゐない。寫生文の陳呉ではあるが、項羽や沛公ではない。その證據には、スケッチばかりて、纏つたものはない。鷗外や二葉亭などの根本から起つて來た影響とは餘程違つて居る。

鷗外と二葉亭とは、其頃の若い人達に非常に大きな影響と感化とを與へた。獨歩なども鷗外と二葉亭のものは、常に注意してよんでゐた。前者では『埋木』『即興詩人』などの影響　後者では『かた戀』『浮草』などの影響が大きかつた。西

洋の文しい文章――そこを若い人達は常に覗つて居た。

硯友社風の文章の敗北は、西洋の新しい文章脈に富んだ人達の勝利を意味をして居た。紅葉露伴時代と今とを比較して見ればすく解るが、西洋の文章に似た文章――翻譯するにもすぐ西洋の文章に移すことの出來るやうな文章が非常に多い。

つまり内面にしろ平面にしろ、狀態を書いた文章が多い。硯友社時代のお話風の作品は非常に少くなつた。

三　物語風の小説と描寫式の小説

小説は物語から始まつてゐる。だから、遂に説明の文字を除き去ることが出來ないものかも知れない。しかし物語風に書いたものよりも現象風に書いたものゝ方が、フレッシな印象を讀者に與へることは誰も承知しないものはあるま

い。

たとへて見れば、物語でも、それをストオリーにして書かずに、あつたことにして書く。その作者の語る話よりも、見た寫生の方が何うしても効果が多い。

一面から見れば、世中のことは物語でないものはない。甲の見た物語、乙の見た物語、丙の見た物語である。世の中は個人と個人との意味のない重なりである。しかしその中に一貫したものがある。――概念ではない――甲の見た世界は乙の見た世界よりも理解と知識に富んで居れば、從つて其趣味も文章も博い意味を持つて來る。其處に物語にも價値の度數が出來て來るやうに、文章にも價値が出來て來る。

今では、文章と内容とを離して言ふことは甚だ無意味に思はれるやうになつて來た。文章と内容と、其處にその作者の持つたスタイルといふことを言ひ出した。主觀的な考を持つた作者の物語よりも、客觀的の考を持つた作者の物語

の方が博く且つまことに近い味を持つて來るのは當然である。

文章を學ぶ上にも、絢爛から平淡といふことがある。陳套な言葉だが、さういふことをよく言ふ。これは取りも直さず主觀的から客觀的になつてゆくことである。

お話風の作品と文章との少くなつたことは前に既に言つた。心を描くにしても心の狀態描寫を心がけて來るやうになつた。硯友社時代の文藝と今の文藝を比較して見ればそれがよく解る。

今は文章が一體に說明的でなくなつた。主觀的傾向のある作者でも、狀態描寫を心がけるやうになつて來た。

花瓶、皿、壺、珈琲茶碗などの雜然置並べてある屋の內に、机を接して仕事をして居る人々の多くは顏の色蒼ざめた職工風の若い男でなければ、貧しい家から通つて來る給金取の娘であつた。斯の仕事場で盛に製造する物は、大抵輸出向の陶器で、形でも模樣でも一定の型に依つて幾百組となく作る。皿なら皿、珈琲茶碗なら珈琲茶碗に相應する大體の模樣の輪廓が先づ素地へ燒つけられる。娘

は容易しさうな部分を塗る。男はその仕上をする。監督する人は別にあつて多忙しさうに机と机の間を歩いたり、手に持つ十露盤で陶器の數を勘定したりした（春——藤村）

※　※　※　※　※

新內を一段聽き終ると、最早三味線の音にも巧みな肉聲にも倦んで、外の冷い空氣に觸たくなつたが、さて思切つて座を出ることも出來なかつた。恣まに席に身體を凭らせて、呂昇の涼しい目の動き、媚を含んだ口元の動くのを見てゐた。豐かな聲で語りながらも、長い一段に疲れたのか、疲勞の色が違くからも見えた。重吉は節その物の面白さよりも、白い柔かい顏に苦澁の色の微見えるのに一層の興を寄せた。幾時間も同じ氣持で、靜かにいろ〳〵の音色を樂むことは、彼れには出來なかつた。ふと路傍に立留つて、二階から洩れる尺八の音に耳を傾けたり、稽古三味線に引寄せられたりする時には、催眠歌を聽かされる赤ん坊のやうに、無邪氣に夢心地になるのだが、樂堂で心搆えして名人の曲を聽いてゐると、次第に思ひの繁く感情の濫費されて。神經はその重荷に堪へがたくなつて來る。（泥人形——白鳥）

かういふ文章も昔にあつては餘り例がない。

形容にわざとらしい形容を用ゐたりしてゐない。唯自分の眼に映つたものを忠實に書いたといふ風だ。それからセンテンスの短くなつたのも一特色である

露伴の文章などには、殆んど何處が切れ目であるか解らないやうに長く續いて、そしていつの間にか意味が變つて行くやうな文章があつたが、今ではそんなものは見たくても見られない。それから實際に對する目のつけ處が非常に發達して來た。昔は誰にも解る事實をよく間違つたり何かして、平氣ですまして居たものだ。今ではもうそんなことはない。事實を間違つた小説は、てんから物笑ひの種になつて了ふ。

四　白鳥と青果と未明と

獨步は器用な筆のつかひ方をした。短い中にすぐツボにはまつて行くやうな旨い處がある。それがかれの短篇に成功した大きな原因である。作者に取つては、ツボにはまらないといふことは常に失敗を意味する。グルぐと周圍ばかりを廻つて居て、何うしても思つた處に嵌らないやうなことがよくある。未明の作にはさういふ弊がある。何處まで行つても同じやうなことを書いて居るやうなところがある。

何うしてさういふことになるかと言ふと、筆に的確した處がないからである。唯茫つとして居る爲めではないかと思ふ。わざと考へ出した氣分は、いくら書いたッて書けるものではない。

白鳥の筆は獨步に似たやうな簡潔なところがある。いつでもツボにはまつてゐて動かない。無駄がない。

眞吉は今まで二人の話にもあまり耳を留めず、ぼんやりしてゐたが、ふと振返つて、「僕はそんな者當てにやせん」と答へた。その聲は不斷に似げなく力强かつた。

「さう覺悟しとりやいゝが」と、退一は鼻先で冷笑するやうに云つて、「これで、身内にヤクザ者が一人でもあると、側の者が皆んな迷惑するんだ」

眞吉は兄の言葉の意味を感ずる風もなかつた。そして、忍ぶやうにその部屋を出て、自分の二階

へ歸つて、燈火も點けずにぢつとしてゐた。澄んだ空に星が爍めいて、海には松明がちらついてゐる。良吉はやがて背伸びをして欠伸をした。だが、まだ寢床に就くには時間が早過ぎたので、所在なげに七夕に程近い天の川を目で捜しなどしてゐたが、ふと又自分と周圍との事が考へられ出して氣が鬱した。若しか父が亡くなつたらば、後はどうするんだらう、自分は兄の目から除物になつてしまうんぢやないだらうかと、此迄ついぞ考へもなかつた事が、ふと心の奥にちらついた。（死後

――白鳥）

これなどはその例の一つだ。

始めは澤（ツヤ）がなかつたが、此頃では大分さうした藝術的の色が出て來たやうに思ふ。但し細かい處に入つて行く筆には、餘程日本風の匂がする。見方などの上に、もう少し餘裕があつて欲しい。

『微光』と『女の一生』とを比べた評家があるが、筆も違ふし、見方も違ふし、構圖も大變に違つて居る。モウパッサンに限らず、西洋の作者には、何と言つて好いか、一寸言ひ難いが、――もう少しオブジェクチイブなところがする。離れて居る上に出來た一種の藝術味がある。

文章にオブヂエクチーフな味の出て來るといふことは餘程難かしいことだと思ふ。自分では客觀的にやつて居るつもりでも何うも出て來ない。作者と作中の人物の離れ方――それなども難かしい。句を重ね、行を重ねて居る中に、いつか作者と作中の人物とが着いて居るのだから仕方がない。『泥人形』などにもさういふ處がある。朝日の記者は『人生の素人』と言つて何か評して居たが、あれなどは、あゝ言はずに、何うも客觀的の味が出で居ないと言つて評するのが至當であらうと思ふ。重吉が徹底してゐやうが不徹底であらうが、それよりも作者が重吉夫婦を取扱つた態度を批評すべきであらう。重吉といふ人間を別に傍に置いたやうな氣分――他人のことを書いてゐるやうな氣分――かうした夫婦もあると言つたやうな氣分――それがもう少し出て居たなら、もつとぐつと好い作になつたと思ふ。讀者の重吉に對する心地があれでは反つて反抗を招くやうな處がある。

此點に行くと、文章＝内容、その一致したスタイル、そのスタイルの價値、そこが非常に難かしいと思ふ。勿論、これは作家が一生かゝつて研究して行かなければならない處で、文章上、非常に微妙な關係のあるものである。

白鳥の文章は其構圖のキリ〳〵としまつてゐるやうに矢張しつかりして固つて居る。奔放なところは寧ろ少ない。瀟洒といふ方面も小ざつぱりして居るといふ方の瀟洒で、藝術的に瀟洒と感じられるやうなものではない。全體から來る感じは何處か餘りに固定しすぎたやうなところがある。

しかし簡潔で、よく事物のツボに嵌つて行く筆は、一寸他人の眞似の出來ないものがある。際立つて濃いところがあつたり淡いところがあつたりするやうなことがない。そして別に力をこめたといふ感じを起させずにいつか人を引張つて行く。青果の文章はこれに比べて力強いやうな處がある。しかし餘り細かく入つて行くことの出來ない處が白鳥と比べて大分違ふ。

青果の筆にも藝術的氣分といふやうなところは少いやうだ。達者——一言以てこれを盡すことが出來る。細かい空氣、言ひかへれば筆と筆との間、句と句との間に味はれる味と言つたものに乏しい。しかし何うかすると、非常に感情に富んだ見事な文章を書いて見せることがないでもない。

時にはこんなことを考へたことがあつた。青果の文章に力のあるやうに見えるのは、根本から來た力ではなくて、感情から來た力ではないかと。その證據には、青果の作には割合に理解力が働らいて居ない。作者の主觀が心から動搖させられてそこから力が出たといふやうな強さがない。その強さは執着力のつよい強さではなくて、ぽつきり折れて了ひはしないかと、おもはれるやうな強さである。感情を根柢にして力のあるのとないのとが青果と未明の相違ではないかと思ふ。

未明は此頃よく作をする。『夜霧』『死』などを讀んで見た。文章は前にも言つ

た通り、散漫で、煩瑣で、的確でない。スタイルの上にもまた動搖したところが非常にある。世の中に對する知識の不足が空想で補はれて居るやうなところ十の七八を占めて居る。例を引いて見れば、

もう夏も逝かんとする今日此頃、實に夕方の景色は、身に浸みるやうに美しくて、しかも悲しい。私は家の前に出て、西の方を見ますと、寺の大きな銀杏樹が空に聳えてゐます。其の樹の梢や、葉の間を透して、青い冴えた空の色が見える。而して、遙かに地平線に沈まんとしてゐる夕日を見ることが出來ます。

なんといふ紅い色でせう。私は、あの酸漿のやうな紅い色を見ると胸が躍ります。賑かな思ひ出もすれば、悲しい、頼りない感じもいたします。ちやうど紅く彼方が燃えてゐるやうに、而して雜然とした町の建物が黑く尖つて、或は高く、或は低くなつて浮き出てゐます見てゐるうちに夕日の色は次第に淋しく、悲しく西空にうすれてしまひます。其の時私は、たゞ過ぎ去つた日の戀、居なくなつた妻の面影を思ひ浮べて、やるせない思ひと、悔恨の情に胸を痛めて泣くより他に考ふることもありません。

さら〳〵と木の葉は、青い、水のやうな人懷かしい夕空に風の鳴つて動きます。开して間もなく眞珠のやうな星の光りが、青海原のやうな空に輝き初めます。其れを見て、私は、詩人であつたら

此の思ひを詩に作りたい。音樂家であつたら、此の怨みを奏でたいと思ひ、其れすら出來ぬ自分はいつそ死んだなら、斯樣な煩悶もせなければ、此の世の苦しみも感ぜずに濟むものをと思ひます。

今の妻と結婚してから、もう三年餘りになりますが、常に愉快だと思つたことがありません。病身なので、私は、もう妻の青い、水腫れのした、眼の中の曇つた顏を見るのに飽きました。それにつけても、おみよのゐた時分のことを思ひ出します。（夜霧――未明）

これなども餘り巧な文章とは言はれない。句と句との組合せの上に匂ひだの、味だの、人格などが必ずかくされずに出て來るものだが、それが非常に混亂した感じを與へるのは、態度が動搖して居るからではあるまいか。

藝術にあくがれたり、不可思議に驚いたり、人情に捉へられたりすることはまだ本當に藝術三昧に入つたとは言へなくはないだらうか。作者自身があくがれたり溺れたり捉へられたりするのではなくつて、あくがれたり捉へられたり溺れたりする人を書くやうな氣分になつて始めて藝術の三昧に入つたと言へるのではないだらうか。

藝術を愛好することがその三昧に入る途中の材料にはなるかも知れないが、それそのものが三昧境に入つた形ではあるまい。そこからは決して藝術的文章の味は出て來ない。

五　讀賣新聞に掲載された小説

讀賣新聞に三十回内外の小説が作者を變へて續いて出て居た。

それを大抵は讀んで見た。

苳三、星湖、薫、三重吉、御風――皆なそれぞれの興味を以て讀んだ。新しい文章、最も新しい文章を知るには、かうした作品を讀むのが好いと思つて讀んだ。

苳三の筆にはセンチメンタルの若々しい匂が充ちて居た。人間の暗い複雜した方面は、知らないと言ふよりは、何うでも好いといふやうな風なところがあ

つた。星湖の筆には、人を惹くやうな花やかなところはないが、人生の中から、何かある意味をさがし出して來やうとする意氣があり〳〵と見えて居た。三重吉の筆には、細かい迂曲した感情をくど〳〵しく描き出して居るのを見た。そしてその根柢となしてゐるものは矢張センチメンタルな感じに近いものであつた。薫の筆には達者な器用な用心深い才子の文章を見た。平面過ぎるやうな感じもした。御風の作は、まだ終結を告げないから、全體としては、何にも言ふことが出來ないが、筆に濃淡が際立つてついて居た。力の強いやうな弱いやうな感じのする文章であつた。

この新聞に掲載せられた作品に限らず、苳三、三重吉の文章と星湖、御風、薫の文章とは全然行き方を異にして居るのを發見して、興味のあることに思つた。

三重吉の一種變つた筆致を持つてゐるといふことは、一頁讀めばす

ぐ分る。ネオ、ロマンチイシズムといふことを心がけて居るらしい。從つて平板に甘じないといふ意見が見えて面白い。その例を擧げて見ると。

いろんな女があてゐろんな事をするものだ。お徹つちやんはどうしてゐる。あれきり手紙もよこさなくなつた。自分で自分のした事をつく〳〵考へ返したらどんな氣がするだらう。——自分はとう〳〵戀といふものを一つもしないで了つた。一つの女を長く買つた事位はあるけれどもそれでも戀をする事は出來なかつた。自分だつて女が欲しいけれども、買はれる女の外には自分の前へは出て來ない。女といふものが求めずして自分といふ籠に還入つたのはたつたお徹つやんだけである。それも。水もくれない餌もくれないで、這入つた入口も開けた儘だから、しまひには仕方なく行つて了つてそれきりである。女が欲しくなかつたのではないけれども——。もし徹つちやんに自分も戀したのだつたら何んなものだつたらう。

——自分は退屈な或日こんな生々しいものゝ言ひさうな事を、考へるともなく考へることもあつた。——お徹つちやんの事を考へると、何だか自分が冷嘲の材料にするために考へでもするやうに氣の毒でもあつた。それは厭であつたのと同時に或同情を持つてゐるためらしい。自分に惚れてくれた償ひにさういふ氣がするのだらう。(いろんな女——三重吉)

かういふ行方だ。隨分まはりくどい文章だ。けれど何處かに自家特有の特色

を持つて居るのは面白い。しかし全體から來る感じは、細い感情を書いたといふに止まつて居る。從つてデリケートな細い所が長所でまた短所である。

薫の文章には、今の鷗外漁史の影響を受けて居るところが非常に多いと思ふ。鷗外の今の作品は現今作家中最も平面的な感じのするものである。唯、書いたといふやうな氣分のするものも隨分ある。何うしてかういふものを書く氣になつたかと疑はれるやうなのもある。『百物語』の中にもある通り、傍觀者——完全な傍觀者だ。白鳥も藤村も傍觀者といふ傾向は無論あるが、いろ〳〵な苦痛やら疑問やらを押へての傍觀者である。齒をくひ切つて默つて見て居る傍觀者である。鷗外の如く平氣で見て居る傍觀者とは餘程違ふ。鷗外の作品は何の苦もなく人生を傍觀してゐる作品である。それを薫は學んで居るやうな傾向が見える。そして年齡の相違と性格の相違がよく其處に現はれてゐる。

文章から言ふと、上手な筆だ。混雜したところがなくすつきりとしてゐる。

惜むらくは筆に影がない。句の持つて居る旨味がない。瀟洒すぎる。單純すぎる。平板すぎる。

星湖の文章は、無論意氣なところとか、瀟洒なところとか、氣の利いたところとかは無い。文章の構造から言つても難の多い文章である。しかし力がある。青果未明の力と違つた力がある。それは暗いねばり強い力である。薫、三重吉などと行方が丸で違つて居る。各作家の持つた違つた特色を比べて見て、興味を覺えずには居られなかつた。

六　自己描寫——草平

自己描寫——これを文壇の沈滯を來した理由の一に數へる人がある。さうかも知れないと思はれる理由がないでもない。

自己の行爲、心理、事件、それを藝術品をつくる材料にすることは無論差支

がない、それは言ふまでもないことである。しかし作者は藝術品をつくるのである。傳記を書くのでもなければ叙情文をつくるのでもない。それも亦言ふまでもないことである。しかし今の文壇には、新しい方の作者に、叙情文を書いて居るのではないかと思はれるやうな作品が大いにある。

自己が完全に作中の人物にならない程度の作品は、其處から何等の客觀的價値を見出すことが出來ないものである。作者の遣つたことが唯見えるばかりでこの廣いライフの中に於ける位置が判然としてゐないから、成程かういふことをしたのかといふやうな事實的興味が先に立つやうなことになる。

事實そのものゝ持つた價値、それは無論あるだらう。しかし其事實は廣いライフの中に何ういふ地位を占めて居るかといふ段になつて始めて藝術品らしい客觀の價値が出て來るのである。事實の興味を以てのみ讀者に讀まれるやうなのは、その作品の恥辱であると言はなければならぬ。

『煤烟』『自叙傳』『未練』を書いた草平の文章は好い文章だ。すつきりしてゐる。鋭敏なところもある。新しい瓜を劈いたやうな好い匂ひもする。それから、その作品の持つた價値にもすぐれて好いところがある。しかし事實を唯書くといふやうな處は甚だ面白くない。自分で自分を憐れんだり、自分で自分を描いて見たところで、それだけでは何の甲斐もないことではないだらうか。

『未練』などになると、ことにその傾向が著しいやうだ。自分で自分のことを書くより他仕方がない。かう言つて居るやうにも見える。『泥人形』を『人生の素人』と評して朝日の記者が果して同一の人ならば、『未練』も矢張り『泥人形』が陷つた自己描寫の缺點に陷つて居るやうなところが尠ならずある。突込んで書いてあるから、事實から來る價値の爲めに、この缺點がいくらか和げられて居るが、缺點は矢張缺點で、藝術品と言つたやうな客觀の價値から來る味は甚だ乏しい。讀んで居る中は釣られて居ても。讀んで了つてからは何の印象も殘らない。

しかしこれは『泥人形』の處にも言つた通り、作者に取つて餘程難かしいところであるには相違ない。

七　所謂新しい文章

新しい文章――さうした人達の叫び聲にも耳を傾けても見た。

ネオロマンチシスム、シンボリズム、ネオリアリズム、いろ〳〵な聲が彼方此方から聞えて來る。麟勃とした氣運が其處から生れて來るやうにも思はれる。

さうした人達の文章の上手になつたことには驚かれる。少くとも自分の書かうと思ふ處はグングン書いて居る。技倆もすぐれてゐる。それに西洋の新しい氣運を逸早く受けて居る。目新しいことを第一として心がけて進んで居る。

傍目を觸らずに自分の思つたことをグン〳〵遣つて居るものは幸福である。

自己の志して居る道の如何なる道であるかを問ふに暇がない。好いと思つたことは何でも好いからそこに向つて突進する。元氣が旺盛である。

新しい文章は絶えず生れて行かなければならない。十年と言はず五年の間にも、文章は絶えず搖いて變化して居る。その新しい文章は多くかうした人達の手から生れることが多い。

白樺、スバルなどの中には、さうした作者を多く發見する。平坦な文章もあれば、沸騰し切つたやうな文章もある。非常に眞面目な張り詰めた心があるかと思ふと、暢氣な、平氣な、フムと鼻であしらつて居るやうな心もある。しかしいづれも新に向つて波打つて居る若い心ではある。

この若い心が凄しい現實の波に觸れた時の狀態は今から注目に値ひするものである。現實の波にさらはれて溺れて行く人もあらう。その大波に恐れずに先へ先へと突進して行く人もあらう。其處から飜つて自己を傍觀するやうな人も

出て來るだらう。その時こそこの若い心が文壇に確たる新しき文章を打立てる時である。

谷崎潤一郎の名を聞いて、未だ其の作を讀んだことのない評者は、近く『飈風』といふ作を見た。成程好い意味でも惡い意味でも『飈風』とある。

これがもし現實の大波をもう少し被つた作者であるならば——性慾の眞の狀態をもう少し詳しく知つて居る作者であるならば、『飈風』は丸で變つた形式と作風とを以て現はれて來たであらうと思ふ。かなり長い作だが、何も書いてゐない。殆ど空虛の文章より他に何も書いてないと言つて差支ない作である。若い空想より他に何物もない作品である。しかし、『少年』『幇間』などはもつと內容が充實して居るさうである。もつと現實的な意味が多いさうである。

志賀直哉といふ人の作品は、しつかりして居る。寫生から發足して何處までも行かういふ趣がある。筆には彩がないが、達者で、思ふ處をグン〳〵書いて

ゐるところが氣持が好い。

これは小説ではないが、北原白秋の詩集『思出』の序の文章を非常に賞めてゐる人がある。殆んど空前の文章だと言つた人もあるやうに思ふ。今、此處に引いて見る。

長い霖雨の間に果實の樹は孕み女のやうに重くしなだれ、もの〻卵はればく〻と潴水のむじな藻にからみつき、蛇は木にのぼり眞菰は繁りに繁る。柳河の夏ばかうして凡ての心を重く暗く腐らしたあと、池の邊に鬼百合の赤い閃めきを先だて〻、烘くが如き暑熱を注ぎかける。

日光の直射を恐れて羽蟻は飛びめぐり、溝渠には水涸れて悪臭を放ち。病犬は朝鮮薊の紫の刺に、後退りつ〻咆え廻り、蛙は蒼白い腹を仰向けて死に。泥臭い鮒のあたまは苦しさうに泡を立てはじめる。七八月の炎熱ばかうして平原の到るところの街々の激しい流行病を仲介し。日ごとに夕燒の赤い反照を浴びせかけるのである。

この時、海に最も近い沖ノ端の漁師原には男女も半裸體のま〻紅い西瓜をむさぼり、石炭酸の強い異臭の中に晝は寢れ、夜は病魔退散のまじなひとして廢れた街の中、或は堀の柳のかげにBANKO(樣臺)を持ち出しては盛んに花火を揚げる。さうして朽ちか〻つた家々のランプのかげから、死に瀕した虎刺拉患者は恐ろしさうに蒲團を匍ひいだし、ただちつと薄あかりの中に色變へてゆく五色花

火のしたゝりに疲れた瞳を集める。(わが生ひ立ち——白秋)

新しい文章としては甚だ物足りない。心持に捉へられたり情緒に捉られたりしてゐる文章である。旨いには旨い、骨折つても書いてあるが、感じが唯綺麗な文章と言ふにとゞまる。

八 荷風の文章

荷風の文章に新味の出て來たのは、歸朝以後だ。抒情、情緒、憧憬……さういふところから生れて來た新味である。

かれはロチの文章を好んで居るらしく見える。ロチが長崎を書いた文章を飜譯して居たのを三田文學で曾て見たことがある。ロチはペインターとして知られた作家である。インプレッショニストとして知られた作家である。かれの書いたものは多くは外形美にある。『氷島の漁夫』でも『阿菊夫人』でも皆な感じの

好いのを主にした繪のやうな小品である。時には心理描寫もないではないが、其方面は先つ閑却されて居ると言つて差支ない。解剖などといふことはロチには何の役にも立たなかつた。

荷風もまた如是觀をなして好いであらうと思ふ。荷風はペインターではあるが、サイコロジストではない。心の閲歷といふものを具體的にかれの作品から覗ふことは出來ない。かれの心の閲歷は多くは情緒的說明に留つて居る。

しかし文章は綺麗だ。情緒な單純でなく、新しい複雜した匂ひを持つた情緒である。時には恍惚として、讀者の心をその中に引込んで行つて了ふやうな好い文章がある。

窓下の三味線はそれとも知らずに大薩摩の合の手を一生懸命に彈續ける、それをば中谷は頭が重くて餘り話もしたくない二日醉の、再び肱枕して默つて聞いてゐると、柳橋の女は女中のお兼と新柳二橋のお客の差別から、茶屋小屋への交際の物費が、此方はどう、彼方はこんな風だと、まるで他國の者同志が話し合ふやう、種々雜多な、然しいつも極つた此の社會の內幕を愚痴らしい話しつ

づける。紅雨は洋服から急に着換へた褞袍の襟頸の寒いにも係はらず、たゞ何がなしに興味深く、明けた雪の窓外の有樣から眼を離す事ができなかつた。

表から見たなら四五軒ほどにもなつてゐるのであらうが、其屋根は長く一棟につゞいてゐるので降る雪は瓦の小口に積つた深さを見せて、山脈の背のやうに圓く聳えてゐる。いづれも同じ造りの二階の窓の外には、處々の切張が目につく二枚立の障子から、一軒毎に物干臺が突出してあつて其處に枯掛つた緣日物の植木鉢が數知れず置いてある處もあるし、渡した物干竿には白足袋が二三足吹雪の中に干忘れられた儘ぶら下つてゐるのも見えれば、赤兒のおかはや、襁褓や、それを干すための竹籠などが、差翳した廂の下に置いてある有樣は、如何なる境遇の中に如何なる子供を生んだのかと其母親なるものゝ身の上靈ろ人の實感を動かす。お歳暮の贈物と知られた鹽鮭の二本ほど下げてある隣の軒下には、腰湯のきゝ目をよくする大根の枯葉の陰干が七五三縄のやうにつゞいて居る。洗つた足駄の褄皮が行列してぶら下つて居る。（冷笑——荷風）

總てかう言ふ風である。だから荷風の作品から受ける感じは、文章そのものから來る感じで、作者のライフに於ける地位とか、ライフに對する判斷とか、ライフに於ける客觀的價値とか、さういふ感は何の作品からも受けることが出來ない。空中に漂つてゐるやうな離れた藝術品的氣分は味ひたくつても味はれ

ない。

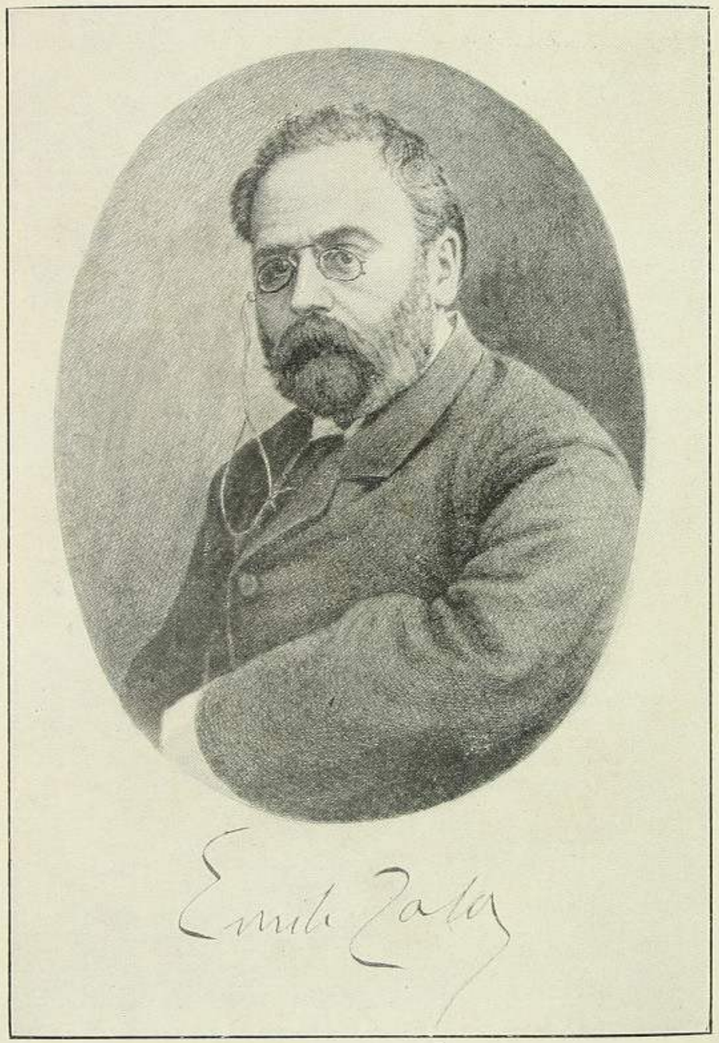
世間では荷風の作品を藝術的だといふものが多い。藝術を愛好する荷風、かういふ風にいつも言はれる。しかし藝術を愛好するといふことは、藝術三昧に作者が入つて行つたのとは意味が違ふ。評家はそれより以上に荷風の作品が何の點まで藝術的具象的氣分を持つて居るかを見なければならない。

單に文章の上から言ふと、質よりも華の方の勝つた文章で、器用な派手なところが人を動かす力となつて居るやうである。

九　漱石と虛子

漱石の文章は特色のある文章である。矢張客觀的と言ふよりも主觀的なところに讀者を持つて居る。

矢張傍觀者の一人である。鷗外とは形と質も違ふが、年齢とか學問とか言つ



エミイル・ゾラ

たやうなものから起る氣分に似てゐる所がある。作者の筆の持つてゐる色、感じ、匂ひ、それが出過ぎる程明かに出てゐる。從つて其主觀の好きな人には氣に入るが、嫌いな人にはすぐ反撥されて了ふ。

暖かい分子よりも冷たい分子が多い。その點も鷗外に似てゐる。

しかし漱石は鷗外ほど完全な傍觀者ではない。從つて文章は鷗外ほど平面的でない。

句と句との間、章と章との間に、所謂低徊趣味が纏綿して居る。旨く行つた時は非常に好いことがあるが、拙く行くと、煩瑣に陷ちて、折角受けた感じがごたゞくして了ふことがよくある。筆としては、よく廻る筆で——むしろ廻り過ぎる嫌ひがあるほどであるが、それでも流石は手に入つたと思はれるところが多い。

しかし漱石の筆は物を具象的に描く上に於ては、甚だ損なところがありはし

ないだらうか。それもつまりは主觀的、低徊趣味的であるからで、興味、趣味の上に彷徨してゐる爲めではないだらうか。作者の情を抒べるのには適當な筆であつても、作者の嗜好と趣味とを沒して、具象的に描くには不適當な筆ではないだらうか。

かれの愛讀者は文章の愛讀者で、描寫された事象乃至意味の方の愛讀者でないことは、その一證とするに足りる。

虛子は漱石に比べると、主觀の色が餘程薄くなつてゐる。それだけ興味がないと共に自由になつてゐる。またそれだけ作の背景をなしてゐる作者の主觀がぼんやりして居る。何うにでも出て行かれるやうな餘地を殘してゐる。

虛子と漱石とは子規の脈を引いて居る。しかし虛子が其の正統であつて、漱石はむしろそれから遠く離れてゐる。漱石には今では寫生文と言つたやうなところがないと言つても好い。

寫生は文章の研究の爲めであつて、寫生即ち立派な文章と言ふことは出來ない。子規の脈を引いた人達は、寫生文に拘泥して其處から一歩も出ることの出來ない人達も多いが、虛子は流石にそこから一歩を踏出してゐる。『徘徊師』ではまた寫生脈が多いが、『東京市』あたりで段々其處から出て行かうとする試みが見える。

時に由ると、虛子は非常にインプレッシーブな文章を書くことがある。しかし寫生の弊たる『冗漫』は未だに全く脱却することが出來ない。

十　葉舟と小劍

句と句との間、章と章との間に、細かい氣分の出ることを重んずる作家に葉舟がある。かれは官能と神經といふことをよく口にする。しかしかれの文章には、材料がない。質がない。ライフから苦心してさがして來たやうな發見も

創意もない。從つて極めて單純である。

複雜から來る單純、さういふ單純ではない。複雜をぬきにした單なる單純である。此作者も藝術を重んずるといふことをよく口にするが、矢張單なる自己描寫に終つてゐる作品が多い。

其文章には氣の利いたといふやうなところはある。すつきりとしては居る。しかし材料、質――さういふ處から來る複雜した味がないから、單純がいつか冗漫になつて了ふ。すつきりとしてゐるのは、本當にすつきりしてゐるのではなくて、單純すぎるからさう思はれるのではないかと思はれる位である。

しかし此作者の書いたものですぐれてゐるものがないでもない。『旅舍』は好い作である。此作者の書いたものゝ中で一番好い作であるばかりでなく、文壇でも稀に見る作である。それから『黎明』といふのもすぐれてゐる。いかにも空氣と氣分が句と句の間、章と章との間によく出てゐる。其の平生の主張をよく

現してゐる。しかし此頃では大分筆が荒んで來たやうだ。『待合室』などでは、文章も感じも丸でバラ〳〵になつてゐる。

小劍の文章はよく緊つてゐる。散漫といふ弊は何處にも見出すことが出來ない。むしろ緊り過ぎてゐるが爲めに、感じが小さくなりはしないかとの懸念がある。この作者の特色である鋭い處をもつと自由に出したやうなところが見たい。

十一　秋聲と藤村

硯友社から藻社の人達、中で一番新しい文章を書く人は無論秋聲である。風葉は『極光』から『半途』に出て、全然舊衣を脱したといふ趣を見せたが、矢張內容と新しい衣とがしつくり合つて居ないといふやうな憾みがある。

秋聲の新しさは派手な新らしさではない。心から新らしさを感じさせるやう

な新らしさでもない。行文の間に現はれる感じの新らしさでもない。しかし自分の持つてゐるものを忠實に出すといふところに、盡きざる新しい泉が湧いてゐる。

コツ〳〵と地道に世を渡つて行つた苦勞人といふ感じが秋聲の作に常に現はれてゐる。現實に壓迫されて、そしてそこから離れることの出來ないやうな執着に一種ねばりの强い力がある。

文章としては、風葉などに比べても、もとから劣つたものに見られて居た。何方かと言へば餘り器用ではない方だ。讀んで心持が好いといふ側ではないが書くことにうそがなく、空想がなく、しつかりした歩調で、一歩々々今の境に到達したといふ趣がある。

藻社の人達は紅葉から何等かの影響とか感化とかを受けないものはなかつた。風葉然り鏡花然り、春葉然り、獨り此間にあつて、秋聲ばかりは、何の影

響を受けずに、獨り別な道を歩いて來た。かれの處女作に『やぶ柑子』といふのがある。その態度をかれは今も持續して居る。

藤村の傍觀者たる意味が鷗外、漱石の傍觀者たる意味と違つて居ることは、前に既に言つた。藤村の傍觀者は火と水の中に居ての傍觀者である。唯、興味を持つて見てゐるのではない。

琵琶法師——朱門のうれひ——若菜集——夏草——それからかれは散文に轉じて來た。詩を書いて居る時分のかれの散文は、當時の所謂新體詩人の文章で、當時の文壇からは殆ど傍系の傍系として見られてゐた。かれの處女作は『うたゝね』といふかなり長い小説で、ロマンチックの匂ひのするものであつた。しかし其時分から綺麗なキチンとした文章を書く人であつた。めさまし草の雲中語で『うたゝね』を評した時には、正太夫は若い作家の中では有望な作家だと言つて居た。

當時所謂新體詩人の文章から段々その臭味を脱して來て、眞面目に作をするやうになつたのは『老嬢』『水彩畫家』あたりからである。

背景を持つた、整つた文章である。新味がかなりに多い。感情を抑へやう抑へやうとして居るので、奔放なところは缺けてゐるが、其代り奥行が深い。近頃では、文章に重苦しい型が出來て來たので、それを破らうとしてゐるやうな趣が見える。

かれの文章は句の排列に餘程骨を折つて居る。文句と文句の間に、書かないで意味を殘して置くやうなところがある。それに、成たけ離れたやうな書き方をしてゐるのが、ことに目に立つ特色である。

ある評家はまだるつこしい文章だと言つた。またある評家は書いてないものを書いたやうに思はせる文章だと言つた。みがきのついた澤のある文章だと言つた。みがきのついた澤のある文章だと言ふものもあれば、努力の痕のあまり

に見える重苦しい文章だと言ふものもあつた。心理を背景にしやうとしてゐるから、何うも突込んだことが書けない。ソツと殘して置くやうなところが確かにある。用心深い筆致から來る抑塞——それが重い感じを人に與へるのであらうと思ふ。

此作者は一面ユーモアを持つてゐるのだが、それがいつも重く抑へつけられて、うまく出て來ないやうな心持がある。此處を出て來たならばといふやうな氣がいつでもする。

小説の文章といふことを書く筈であつたが、やはり例の小説の批評になつて了つた。それももつと文章を引いて、細かに解剖して見ると面白いのだが、それも出來なかつた、小説の文章には事相そのものゝ持つたやうな細かい影がなければならない。叙述や説明ではその影を出すことが出來ない。

新しい文章――其處から絶えず新しい感じのする小説が出來て來る。五年後は如何？十年後は如何？。

文章新語

説明の文章

自分を發足點にして書くといふ場合と、自分を傍に置いて、離して書くといふ場合と、この二つが文章を書く上に明かに區別されて居ると思ふ。

自分を其儘に出すといふ形――それは叙述文でも日記でも記事でも皆さうだ。つまり自分の觀察を中心にして、自分の感情なり思想なりを現はすに都合の好いものをくつゝけて選んで書いて行く。

また觀察が少し位偏つて居やうが何うしやうが、感情が誇張されて居やうが

何うしやうが、さういふことには構はずにドシ〳〵書いて行く。

自己中心の文章――抒情的文章――詩歌のやうな文章――

『あゝわが願』とか、『あゝわが涙』とか、さういふ文字がよく使用されてあつて、作者の感情が生のまゝに出て來る。客觀化といふことが全く加はらない。

此種の文章は書く人も多いし、書きよくもある。やゝともすると、説明の文章、お話の文章、感嘆の文章になる。

投書などを見て居ると、これが可成に多い。それから日毎に見る新聞紙上などにもこれが多い。書いた人の學問と素養とがそのまゝ露骨に解る。

狀態描寫

私の經驗に由ると、凡そ物を離して見るといふ氣分になるといふことは、容易なことではない。いつか自分が出て來る。離れたと思ふとすぐ即いてゐる。

其事を忠實に描いてゐるつもりでゐて、いつか自分がそれを説明したり叙述したりする形になつて居る。

理窟が出て來る。批評が加はる。思想が文字の上にまで現はれて來る。

その狀態を描いて居るのではなくて、筆者が説明したり叙述したりする形になつて居る。

お話をするといふのを例に取つて言つて見ると、上乘なお話は、決して話す人の注釋や解釋が加はつて居ない。唯見たまゝ聞いたまゝお話をする。處が下手なお話はそれとは反對に、其處に説明をつけたり解釋をつけたりする。そしていつまでも聞く人のイリユージョンを破つて了ふ。

筆を執つて書かなければならないのは、其事柄ではなくつて、その狀態だ。

例へて見れば、日毎に新聞の三面に出る記事、あれを讀めばその事件の筋道だけは解る。其理由も解る。時に由ると其中心の思想までも判斷することが出

來る。しかし狀態は解らない。何ういふ男や女が居て、何ういふ事情の下に、何ういふ時日の經過の後に、さうした悲劇が起つたかといふことは說明や記事では容易に解らない。苟も筆を執る以上は、凡そさうした狀態といふ狀態を讀者の眼前に歷々と再現させて見せる位の覺悟がなくてはいけないと私は思ふ。

狀態は描いて見せなければ、出て來ない。描くのには、筆者の頭にその狀態が分明と映つて居なければ出來ない。

口では言へないことをも筆で見せる、描いて見せる。此處に細かい文章の苦心も價値もあるのである。

印象的描寫

『長い叙述よりは短かい描寫。』と私はいつもかう思つて、筆を執る。

何んな文章や小說を讀んで見ても、生々としていつまでも頭に殘つて居るの

は、矢張描かれた箇處である。理窟でもなければ思想でもない。

描かれたものは常に具象的である。常に斬新である。描かれたものはそれ自身の價値を常に語つて居る。

此頃唱導されて居る新傾向の俳句といふものは、その意味に於て甚だ面白いと思つて私は見て居る。難解に過ぎるやうなところはあるが、あれは描くといふ上から來た自然の結果で、それを見る眼を持つた讀者には別に不思議にも難解にも思はれまい。

印象的といふところを深くねらつて入つて行つたのが私は好きだ。

私は昔の和歌や俳句を讀んで見る度にいつもさう思ふが、理窟や思想や譬喩などを用ゐることを喜ぶものは、多くは拙い作者で、すぐれた作者になればなるほど、描寫したものが必ず多い。蕪村の句などをよむと殊に其感が深い。

今の和歌は、その點に於て十分發展して行かなければならない餘地がある。

物を見てフレッシな感を起すといふことは、其作者の眼なり心なりが、描くといふ氣分に達した時の狀態である。

少くとも私一個人に取つては、さうである。分明と物が見える。その物は必ずフレッシに感じられたものである。馴らされない、汚されない、厭きられないものである。

筆を執るものは、描くといふ氣分を貴ばなければならない。

昔は小說は物語風のものが多かつた。說明的のものが多かつた。ツルゲネエフの作にさへさうした慊らない處が隨分ある。一考すべきだと思ふ。

離れた氣分と情調

紀行文でも、さういふ風にして書いて見たい。

連絡などは何うでも好い。筋なども何うでも好い。其の通つて行つた處の土

地のある感じ——地方的色彩の伴つた細かい感じをぽつ〳〵書いて見たい。或は海の一角、或は旅館の半時間、或は橋の上の十分、或は路傍の茶屋と言つたやうに——

西鶴の文章は、味つて見ると、餘程さうした處がある。簡短にして細微、散漫にして整然たる處がある。現象の複雜から來る複雜、それが殊に及び難い。

描くといふ氣分になることの貴ぶべきを私は前に言つた。文章を書くものは先づさうした離れた氣分を修養することが、一番肝心である。

物に頓着しない心と巴渦に捉へられない心と、さうした處から、この氣分の新しい泉は滾々として湧き出て來る。

情緒とか情調とかいふことが此頃よく言はれる。

情調を說くは好い。しかし情調に執するのは、情調を作品に有效に現はし得る路ではない。情調は作品の背景を成すに於て始めて意味がある。

情調を說明で出さうとして居る筆者がかなりある。後戻りであると私は思ふ。情調は消化されたものでなければならない。殊に藝術に於ては——

ノートと寫生

私は文章を書く上に常にノートに寫生して置くといふ方ではないが、しかし時には細かい寫生を遣つて置くこともある。それが外面の寫生ばかりではなく心理の發展する狀態などをも書いて置く。けれども細かい處に入つて行くと、單に寫生では駄目になつて來る。仕方がないからさういふ時は一種の符調見たいなものを記しつけて置いて記憶に便にする。

丁度畫家がノートに人の顏の輪廓やら表情やらを鳥渡書いて置くやうに、會話の一句やら態度の千變萬化などゝ言ふものに注意を拂ふ。癖なども其人物を活躍せしめる程度に於て覺えて置く。

物が見えるとか、周圍が解るとかよく言ふが、これは即ち觀照的になつた形で、筆を執る者には是非ともこの特質がなければならない。それが無ければ修養を積んで、それを得るやうにしなければならない。

ノートに寫生して置くことは、一面それに手賴る處から、忘れる時機を早めるやうなことはないとも限らない。『僕はノートなどを持つた例がない。ノートに書いて置くと、屹度其細かい空氣を忘れて了ふからねえ。忘れて了ては、ノートにいくら詳しく書いてあつたつて、何の感興も起さない』かういふ人がよくある。私も初めはさういふ風であつた。感興々々といふことを非常に重んじた。實際、感興でなくては書けなかつた。しかし感興では細かい處に入つて行けないといふことが段々解つて來た。抒情的には好いが、描寫的には感興は餘り効のないものであるといふことも解つて來た。

私はそれからノートを用ゐた。

私のノートは旅で用ゆるのと、平生使ふのと二通ある。旅の中には小さい手帳で、それに鉛筆で書く。山の色だとか、旅館のつくりだとか、途中で逢つた女の顔の印象だとか、さういふものが無數に書いてある。そしてそれに圏點だの爪點だのをつけてある。平生使ふのは、半は日記半は控帳と言つたやうなもので、思ひついたことを亂雜に書いて置く。他人には解らないが、その亂雜の中に自分はある統一をつけて置くやうにする。

すぐ文章になる材と、三年も四年も持つて居て、それが段々纏つて來る材と持つて居て終には腐つて了ふ材とがある。筆を執り始める氣分になるまでが、中々大變である。

それから書始めが難かしい。これは誰でも經驗する處だらうと思ふが、力を注がうと思へば思ふほど、初めの一行二行が氣になつて書けない。五枚も十枚も空にして了つてもまだ書けない。時には何んなに力を盡しても其の半枚が滿

足に書けない時がある。つまり集中力が十分に働いて來ないためであらうと思ふ。

しかし此頃では、私は餘りその最初の一行を氣にしなくなつた。寧ろ氣にしないやうな癖をつけた。初めが旨く書けなければ好い作が出來ないといふやうな理由のないことが、段々解つて來た。私は唯だ充實を圖ることをつとめた。

『筋』

文章の全體のコンポジションに注意すると共に、局部々々の充實をも十分に圖らなければならないのは言ふまでもない。

私に言はせると、全體のコンポジションより或は局部々々の充實の方が一層大切であるかも知れない。局部の充實が完全に行はれると、全體の感じは、自然と出て來る。

コンポジションといふことは、自然のコンポジションでなければならない。筆者の描いたやうな痕跡が見えると、多くは興味索然となつて了ふ。『實際にある筋』それに注意して見ると、餘程、眞のコンポジションといふことが解つて來ると思ふ。

けれど一方から言ふと、この『實際にある筋』が初學者には容易に見えなくもありつかめなくもあるのであらう。『それが解れば占めたものだけれど……それが解らないから、かうして苦心して居るのだ』かういふ人が多いであらう。道理なことである。

『筋』が分明と見えるやうになるには、第一周圍を見る眼を養なければならない。次に細いものに注意を拂ふ習慣をつけなければならない。自分の興味で物を見る惡い癖をやめて仕舞はなければならない。殊に一番肝要なのは、物に對する批判力である。

すぐれた作品は、必ず筋が線をなしてくきつりと透つて居る。そしてその線の上に立派な自然のコンポジションが見えて居る。

『筋』の上に絶えず注意を拂ふことが必要である。

文章と對話

文章を書くものと、話をするものは似て居る處がある。始めは多くは凝滯して、旨く出て來ないが、一たび絲口を得ると、それからスラ〳〵と出て行く。始めは句と句との組合せなどが順序よく出て來ない。始めに出て有効な句が後に出たり中頃に出たりする。それが絲口を得ると、そんなことはなくなるばかりではなく、後にはそれを顧みて居る暇がないといふ風になつて行く。

しかしこの興に乘じて、筆を走らしたり、口を滑したりすることは、餘り好いことではない。興を抑へて、よく物を考へて、周圍を見廻して、そして筆を

執るなり口を利くなりしなければならない。開いて放てば、背景が兎角空虛になり勝である。抑ゆる心、其處に充實した背景が出來て來る。しつかりした背景の無い文章は、饒舌なる言葉と共に人を動かすことが難い。

句と句との組合せ方、言葉と言葉との組合せ方などは殊に心を用ゐて考へて見なければならない。組合せ方如何に由つて、意味が輕くもなれば、重くもなる。流暢な會話か耳には快く感じても、考へて見ると存外内容が乏しいのと同じく、輕快な文章は、兎角文章の量が内容の量よりも多くなり勝である。才子の文はまことの文章でないと言はれるのもその爲めである。

それから調子といふことも、文章を書くには必要である。しかし、この調子はその人自身の總てから出て來た調子でなければならない。色、音響、姿勢—それら總てそのまゝに出て來た調子でなければならない。此境は難かしい境ではあるが、邪路に入らなければ、容易に達し得らるゝ境でもある。

新しき紀行文

紀行文は今少し發達すべき運命を有つてゐる。今日まであつたもの、今行はれてゐるもの、其以外に今少し特色のあるものが出て好い。

描寫一方で紀行文を書くといふことは、しかし出來ないことだ。紀行文と小說とは、其本來に於て、既に約束が違つてゐる。旅を記するの文は、何うしても叙述の筆を用ゐなければならない。

無論、一人の人が天然の萬物と人間の生活を見て歩くのであるから、其人の眼に映つた感想なり、叙述なり、寫生なりで好いが、その眼に映り方如何によつて、其の内容が複雜にもなり、單純にもなる。

旅行をする人は、直覺が鋭敏であると共に、旅をする地方其ものゝ知識に富んでゐなければならない。知識がなければ、豫めその知識を豐富にして置かな

ければならない。其地方の沿革古蹟は勿論、現今に於ける其地方の生活狀態、産業、地形、さうしたものをも詳く研究して行けば行くだけの利益は必ずある。普通の人は只單に其處を通つて行くばかりであるが、さういふ風に研究して行つた人には、其地方の印象が必ず分明と映つて來る。直覺から來る現象の尊ぶべきは勿論だが、理解から來る印象は、其印象の輪廓を益々鮮かならしむるものである。

若い人達の旅行は直覺の印象を重んずる旅行が多い。眼に映り、頭に殘つたものだけで滿足する。時には、地方の生活狀態などは却つてその直覺を損すものだと思ふことすらある。しかし、旅は矢張知識に富んだものゝ旅が面白い。

知識に富まないものは、一度行つて分るところが三度行つても解らないといふやうなことがある。旅行は一面遊樂であるから、さういふことは何うでも好いといふ人もあらうが、しかし矢張それでは面白くないものだ。研究心があつ

て始めて、旅は興味が複雜して來る。

紀行文は長い連續を要する。一箇所の詳しい描寫よりは、長い連續の上に出來て來る一種の空氣が讀者の興味になる。乙羽君の『千山萬水』は紀行文としては、さう大してすぐれたものではないが、長い旅で、そして細かい處をチョイ〳〵と書いてゐるので、全體としての感じが面白い。

紀行文集を旅の鞄に入れて行く人は、この自分の前に旅行して人の足跡を見て喜ぶといふやうな處があるものである。前人の宿つた旅籠屋などをわざ〳〵探して泊る氣になるものである。かういふ實際方面から言つても、紀行文は小說などのやうに描寫を重んじてばかり居られないといふことが解る。だから昔の人は旅行記にわざと面白い滑稽談を入れて書いた。篁村翁の『旅行記』などは、食物と洒落と失敗とを書いたやうなものが多い。硯友社の人々の書いた『旅行記』にもさうしたものが多數を占てゐる。旅行者の洒落と失敗と、其土地土

地の奇なる風俗の紹介と、さういふもので成立つてゐる。毎年夏になつて、新聞に載る旅行記もすべて紹介的の記事が多い。

で、紀行文は今一段の進歩をして、新しい紀行文が出來て來なければならないと思ふが、では、何ういふ風に書いたらうと言ふと、一問題である。

長い連續を要するから、印象されたところだけを選んで書くといふ譯には行かない。と言つて長い連續を書くと、何うしても單調になり易い。昔のやうに交通が不便で、鬼が居たり蛇が居たりする時代なら、話の種は多くあらうが、今では何んな山の中でも、大抵の人は行つて知つて居る。從つて昔に比べると一層その連續が單調になり易いといふことになる。

西洋の旅行記は、學者の地理的旅行記と、文學者の文學的旅行記と二種類ある。彼方で旅行記と言へば、重に學者の地理旅行記か、探險者の探險旅行記かを指してゐる。モウパッサンの『水の上』のやうなものは旅行記と言つて居ない。其の學者の旅行記は、文章も旨く、學術的知識にも富んでゐるが、しかしわれ等の要求するやうな旅行記ではない。

直覺的印象と理解的印象との好い塩梅に調和されて、實際のロオカルがその句と句との間に出て、そして批評と感興とに富んだやうなものが出來たなら、さぞすぐれた旅行記が出來るであらうと思ふが、單なる理想に過ぎないかも知れない。

つまり新しい紀行文は地圖の精確と繪畫の妙味とを持つたものでなくてはならない。

文章の調子

如何なる人の文章の經歷の中にも、一度は絢爛な調子の好い文體を好んだ時期があるに相違ない。そして何時とはなく其れが厭になつて、まるで反對な文

體を愛するやうになつて來る。此事は其人其人によつて時期の長い短いはあるが、誰しも同一轍を踏んで居るらしい。

絢爛な調子の好い文章を、文に老いた人の眼から評して、彼は幼稚なるが故にあゝした文章を書くのだと言ふのを聞いた事がある。此れは異議の挿めない評言で、幼稚だといふ意味は取去る事が出來ないに相違ない。しかし其れと同時に、如何に文に老いた人であつても、感情の激越した時に作つた文章は、矢張り絢爛な調子の好いものとなつて來る傾向がある。弔文などを讀んで見た時に、彼の人が斯うした文體を書くのだらうかと、其人の平常に比較して寧ろ異樣に感じるやうな事は往々ある事である。

絢爛と平淡とは暫く措いて、文章の調子の好い惡いといふ事は、必ずしも其人の趣味の幼稚と老熟といふ事とは一致して居ないらしい。好い調子を要求すると否とは寧ろ他の原因からのやうである。

我々が單に自分の感情を語るのみで、其の感情が他に如何に響くであらう、又如何に傳へやうといふ事に注意を拂はない場合には、其の文章は必ず調子の好いものとなつて來る。即ち相手といふ條件を取り去つて、手放しに呑氣に物を言ふ場合には、我々の感情は自然に調子を要求して來る。弔文などに於て見る調子の好い文章といふのは斯うした心理から作られるものでは無からうか。

が我々は何時までも此の調子の好い文章に甘じでは居られなくなる。其れは自分の作る文章は別として、他人の作つた其種の文章を讀んで居る中に、我々はさうした文章の我々に與ふる效果の案外に小さなものであるのに心附いて來る。其れは我々の心持は何時も躍つては居ない。いな寧ろ平靜な場合が多い。さうした場合に他人の躍つた心持の文章を見ると、其れが自分の心持とは一致せず、文章だけ前へとつとゝ走つて行つてしまつて此方の心持は後へ殘されてしまふ事を感じる。所謂上すべりをした文章といふ感じを與へられずには居ら

れない。さうした經驗はやがて自分自身の文章を顧みさせる。今迄唯一の文體だと信じて居た調子の好い文章の案外にも駄目なものだと心附いた時には、我々は失望を感じ、續いては如何なる文體で書けば好いのかと迷ひ出して、一しきりは茫然としてしまふのが普通のやうである。

斯うした場合に、文章といふものは唯自分獨りのものでは無い、必ず相手がある。自分の心持の調子の出たとしても、其の調子が相手の胸へも響くものでなければ何の甲斐も無い。文章の優れたものといふのは、自分の心持の調子と相手の心持の調子としつくり合ふもの、即ち呼吸の合つたものである。文章の標準は其所にある、と斯う早く心附いた者も幸福である。

即ち文章は、自分獨りのものであつたのが、新たに相手といふものが加はつて來て、双方のものとなつて來たといふ事によつて、一段の進歩を加へるのである。そして此の相手が次第に明瞭になる事によつて益々進歩の度を加へる。

長谷川二葉亭

そして相手が明瞭に感じられながら、其れが邪魔とならずに恰も相手の無いものゝやうに自由自在に書ける事になつて、恐くは文章の頂點といふのであらう

文章の進歩の路はこの一路に繋つて居るやうである。

調子といふものには我々が乘りやすいものである。又實際我々は或る時或る調子の高い物を讀んだり聞いたりして、其れでなくては感じられないやうな快さを感じる。例せば淨瑠璃のさはりである。我々は上手の語るさはりを聞く時には、まるで音樂を聞いて居るやうな氣分になつて、其中に言はれて居る意味などは二の次として、先づ其の調子に醉はされてしまふ。併し此所に注意しなくてはならない事がある。如何に聽衆を醉はせるを以て能事のやうにして居る義太夫でも、決して初めからさはりは用ひない。其前に必ず地味な部分があつて、調子の高いものがあつて差支の無い場合となつて漸く惜しむやうにさはりを用ひて居る。如何に有效なさはりであつても、初めから終ひまで此れであ

つたならば、其の效果の無いのみか寧ろ倦怠を感じるであらう。

調子の多過ぎる文章と共に厭なのは、國文學者漢文學者の作つた文章の中の或る物である。彼等はあゝでも無い、斯うでも無いと凝つた揚句に、唯自分のみの文章を書き出す。何所までも自分の趣味を滿足させるのを旨として文章の二條件の一つである所の相手といふものを、殆ど閑却したかのやうなものを書く。其人の修養を思つては當然優れた文章でなくてはならないやうな感がして迎へ讀んで、失望に次ぐに反感を以てするのは斯うした種類の文章である。

筆者と相手との呼吸の一致、文章は何所まで進むべきものであらう。

自然の描寫

ツルゲネエフの自然描寫は餘程情を景に托したところがある。人間を自然の中の一部分と言つたやうにせずに、自然と人間とを離して見たやうな處がある。

情迫つて景を叙し、景迫つて情生ずと言つた風だ。自然を描くといふよりも自然を假りて人間の心持を叙するといふ傾向がある。

從つて天然と言ふものが、時には運命說の的になつたり、時には憧憬の情のシンボルになつたりする。流石に形式的の剪裁ではないが、思想上の見方からは、餘程さうした剪裁が施してある。

自然の中の人間——草や木や鳥や獸や、さういふものゝ中にゐる人間、かういふ心持で、ツルゲネエフは自然を取扱つては居ない。此處が印象派の自然描寫とは趣を異にしてゐるところである。

印象派の自然描寫は自然と人間とを離して居ない。人間を自然の一部分として見て、ある時は草や木と同じやうに人間を見ることを憚らない。從つて自然が自然として出て來る。人間が見た自然といふよりも、まことの自然に近い自然が出て來る。

人間の好惡で見た自然でないから、即いてもゐないし離れても居ない。あるがまゝに自然が出て來る。

一つの花が特に他の花に比べて美しいと思ふ心ではなくて、この花はかういふ特色を有つてゐる。この花はかういふ他の特色を有つてゐる。つまり自然の中にあるものにかういふ風に區別は認めるが、自己の選擇上の價値を加へたくないといふ處から印象的の氣分が起つて來るのである。

知識の無い昔にあつては、人間に取つて自然は無關心無關係の狀態にあつた。そして天然の盲目的威力に對すると、唯恐れ戰いて居た。其處に迷信、信仰、神など、いふことが言はれた。しかし知識が加はつて來るに從つて、天然は段段人間に近くなつて來た。今では人間は自分は自然の一部分で、草や木や鳥や獸と同じやうに生活してゐると思つて來た。自然の描寫法も變つて來ない譯には行かない。

山、川、海、草、木——これ皆な人間と同じ存在である。唯、存在してゐるばかりである。各其の意味なき意味を以て存在してゐるばかりである。藝術が善惡の藝術、美醜の藝術である時代ならばいざ知らず、今日の時代では、自然描寫も情を景に托する位の程度には留まつて居られないと思ふ。

手紙の雰圍氣

手紙は雙方の心を打開いた形になるので、それで書くのが難かしい。文の面から互の心持を探すといふ樣な微妙な感覺が常に其上に動いて居る。會話は自由で、そしてすぐ消えて了ふものであるが、手紙はさうは行かない。いつまでも殘つて居る。いつまでも證劵として保存され得る。

手紙からは、先づ第一に先方の氣分を考へて見なければならない。何の位の程度の氣分と思慮と考へとでこの手紙を書いたかといふことを考へて見る必要

がある。そして其氣分を取卷いた雰圍氣の中に先方を見出し、また自分をも見出すのである。

だから、簡單に考へる人に取つては、手紙位簡單なものはないし、複雜に考へる人に取つては、手紙位複雜なものはない。手紙には一小自然を成して居るやうなところがある。

手紙を讀めば、情僞のある手紙にしろ何しろ、大抵其人の氣分と性質とは解るものである。手紙には、其人の心が言葉の調子の中に何處となく必ず現はれて來るものである。この意味から手紙は大切なものだと思ふ。

それだから注意して書く、と言ふよりも、それだから誠實を以て、全心を以て手紙を書かなければならないと思ふ。先方の手紙の文の面の陰にある雰圍氣を細かに判斷して、そして自己の誠實を披瀝したところが、まことの意味の手紙に成立つ。

誠實、全心。これに打勝つ術策はない。何んな術策でも、誠實と全心から來る自然の姿に打勝ち得るものはない。むしろ最上の術策は自然の姿の上に成り立つたものではなくてならない。

古人も手紙といふものは、餘程注意したものらしい。『新安書簡』などを讀んでも、それがよく分る。禮義と誠實、さうした處に常に立場を置いて居る。

青年時代には手紙の遣り取りをよくするものだが、中年から老年になると段段それが少くなつて、後には用向だけの手紙の往復になる。これはいろ〳〵な理由もあらうが、互の手紙の陰の雰圍氣が段々複雜になつて、容易に手紙が書けなくなるのもその一理由であらうと思ふ。

雰圍氣といふことは面白いことだ。

日記の種類

『日記には自己の經驗した如何なることをも書くことが出來るだらうか。日記にはまだ虚飾がありしはないだらうか。』かういふ話を私はある友人としたことがあつた。

『何うも、僕などは、まだいくらか虚飾の心持が其中に交つてゐるやうだ。』其友人はかう言つて笑つた。

獨歩の『欺かざるの記』には、かなり自分の心が書いてある。隨分思ひ切つても書いてある。しかし、まだ虚飾がないとは言へない。それに、全然誤つて居ることわざと筆を舞はして、自分の好いやうに辯護して書いてあるところなどもある。

一茶の『日記』は隨分思ひ切つて書いてあるものゝ一つだ。しかし、あれでも虚飾がないとは言へない。一歩を讓つて、虚飾でないとしても面白がつて居るやうなところがないとは言はれない。×××の印をつけたところなどは、多

少俳諧師としてのユーモアを偲ぶに足るが、しかしこれとて一種の好奇心と言へば言へる。

『人間といふものは一人で居ても、虚飾といふ心を忘るゝことが出來ないものだからねえ。』

かう其友人が言つた。

從つて『日記』の陰の雰圍氣と言ふものも亦面白い。『日記』に顯はれた其人の人物は、大抵正面的で、側面的でない。即いて居て離れて居ない。空中に浮動するやうに浮き出して居ない。だから、作者が『日記』を材料にして其人物を描かうとする場合には、全然其の『日記』を信用することは出來ない。その感想と情緒とは殊に信用することが出來ない。

だから、『日記』は事實を書いて置く方が好い。かう思つたとか、あゝ思つたといふことよりも、かういふことをした、あゝいふことをしたといふ行爲を書

いて置く方が、『日記』といふものゝ本來の性質に叶つてゐる。自己の後年の追懷の爲めにする上から言つてもその方が便利だ。『十千萬堂日錄』は流石に紅葉山人だけあつて、事實が多い。そこからいろ〳〵な場景と情緒とを想像せしむるに足る事實と行爲とを記したものが多い。それに引かへて『欺かざるの記』は前半は感想と情緒とが多く、いつも同じことを繰返し繰返し書いてあるのでちき倦きて了ふばかりか、印象が一つも分明と浮んで來ない。『若い人の日記』と言つたやうなところがある。

新らしき情緒

新らしい情緒と言ふことが言はれる。非常に好いことだと思ふ。新しい人は飽まで其の情緒を新たにし、其の憧憬を新たにし、その內容を新たにしなければならない。

新しき學問、新しき智識、新しき要求、さういふ所から、新しい心が生れて來る。自然は常に同じことを繰返すのではあるが、また常に新しき表現を以て人に臨み世に臨むものである。

情緒は青年に盛んにして、中年老年の境には割合に少ないものである。青年時代は理解せんと欲する念よりも、吸收せんとする情に熱する。いかなるものも生々として見えるものである。それに、經驗が乏しく、理解が十分でないから、想像力も豐富に、好奇心も熱烈である。理解によつて、イリウジョンを破られるやうなことが少い。

今の情緒は往年のセンチメンタリズムとは餘程趣を異にしてゐる。往年のセンチメンタリズムは單なる憧憬の情緒で、その背景も單なる理想と言ふもので塗られてあつた。消極的で、そして小さい判斷力に縛せられてあつた。靈肉の一致の上に生れた情緒を言つたやうなものは殆どなかつた。

情緒は重に感情の部分であつて、知覺の部分ではない。しかし知覺の感情に蔽はるゝ青年時代にあつては、情緒は殆どその全部である。

青年時代に新しい情緒を抱くことの出來る作者は、尠くとも有望な作者である。ナチユラリズムはこの情緒、憧憬などといふところから反對に知的に出て行つたものであるから、情緒を生命にする作者には、入つて行き難い境でもあり、入るのも恐れる境でもある。けれど一度「自然の眞相」に面して立つやうな機會に遭遇する時には、情緒を豐富に有した作者は、一層深い見方をすることが出來ると思ふ。フロオベルのロマンチック、リアリストなどといふ例も此處に引くことが出來ると思ふ。

中年、老年に至るまで、主觀一方、情緒一方で立つて行く作者もないではないが、年齡の分けかたから言つて、人間は何うしても一度は、『自然の眞相』にぶつかつて見なければならない時代が來るものであるから、それの來た時には

思ひ切つて、自己を俎の上に置いて、ジッとしてメスを取られるのを甘んじなければならぬ。

青年の心持の凋落。かういふことは誰も感せずに居るものはあるまい。理想の敗滅、イリージョンの敗滅、それから起る悲哀を味はずに一生を送ることの出來るやうな藝術家は多くあるまい。青年時代の考から云ふと、この「自然」に對した形は、自然に向つての屈服、物質に向つての敗北のやうに思はれるけれど、此境に至つて、始めて自己と自然との深い神秘な關係を知ることが出來るのである。此處に靈肉の一致したるまことの境があるのである。

今の文壇に情緒を唱へる聲がかなり高く聞える。自己の感じを感じたまゝに出さうとする作者も多い。そして其の情緒なり、その感じなりに新しい姿と心とを持つてゐるものも尠くない。しかしこれは其人達の準備時代であることを忘れてはならぬ。今日思ふ心を開いて見せるのは、他日それを押へる階梯であ

ることを考へて見なければならない。新しい情緒、新しい憧憬、それに淫せずに、すぐそれを驅使し得た人に、意味ある深い新しい時代が開けて來ることゝ思ふ。

情緒が其人々の背景になり、其作品のにほひとなるやうな時代が待たれる。

新傾向の俳句

新傾向の俳句は飽まで描寫で行かうとする運動であるらしい。說明的、斷定的になることを第一に嫌ふ。それから作者の心地で物に對しての解釋をつけることを嫌ふ。あはれとか悲しいとかいふ主觀的感情を加へることを絕對に避ける。

梅一輪一輪づゝの暖かさ　嵐雪

此れには餘程作者の感じた主觀が入つてゐて、一輪、一輪づゝに暖くなつて

行くといふ處に手柄を認められて居るのであるが、其處に却つて作者の小さい解釋見たいなものが附いて居て面白くない。何だか自然を拵へたやうな氣がする。

梅咲いて湯殿の崩れ直しけり　利牛

これなども梅が咲いたが爲めに、湯殿の崩れを直すといふ作者の趣味から來たやうな處に小主觀的のいや味がある。湯殿の崩れを直すやうなことをしない人から見れば、この作者の趣味嗜好が甚だ低いと言はれるやうなことになる。これは內容のことだが、內容の是非でなしに、自然に對する見方から言つて見ても、梅が咲いたから崩れを直すといふ風にせずに、梅が咲いた、其處の主人が湯殿の崩れを直してゐるといふ風に見れば其處に描寫——新傾向の味はひが出て來る。作者は主觀の解決を加へずに作者が自然からさういふものを見たと言ふ風になる。從つて大きな解決のついてゐない自然が陰に無限に現れて來るといふ

ことになる。いかやうにも其處から味が出て來る。

春もやゝ景色とゝのふ月と梅　芭蕉

これも矢張主觀の厭味がある。「景色とゝのふ」といふ處に加へないでも好いて、春色漸く闌ならんとする心地を讀者に知らせるやうにするのが描寫の本意である。これでは説明になつて了ふ。作者が無理にその見たところを讀者に強ひるといふ形になる。

月させどよく〳〵暗き椿かな　乙二

このよく〳〵が矢張作者の考になつてゐる。よく〳〵なぞといふ字をつかはずに、もつと具象的に描いて見る苦心がなければならぬ。

春の水ところ〳〵に見ゆる也　鬼貫

「見ゆる也」と言つたところに、矢張作者の考がある。

で、昔の句からかういふものを拾つて見ると、いくらでもある。その半はさういふ種類であるといつても好い位である。蕪村あたりになると、餘程かういふところを脱してゐるけれども、それでも主觀の句がかなりある。

折釘に烏帽子かけたり春の宵　蕪村

春の宵に烏帽子を取合せたところが、矢張趣味といふやうな境を脱却して居ない。前の數首から比べると、それでも餘程平面的、描寫的になつてはゐるがそれでもまだ俳諧の面白味といふやうなものに捉はれてゐる。

初午やもの種賣に日の當る　同

二三の句はいかにも描寫式で好いが、初午やと言つた初五文字が矢張季題趣味に捉へられてゐる。

明治の子規あたりの句にも、まだ矢張さうした處がある。眼に映つたものを、すぐ頭なり心なりに取り入れて了ふ。兎角感じをまとめたがる。剪裁――小さ

い剪裁を施したがる。中心點を求めたがる。描寫といふ意味が根本から徹底してゐない。

よべ梅と見しは雪にほの赤き杏なりし

此處にかういふ句があるとする。「よべ梅と見しは」がいけない。「よべ見し梅は」とすれば、よほど描寫式になつて來る。それに、雪にほの赤きがいけない。雪にほの赤きといふ所が説明になつてゐる。

蜆歩るく砂日に澄んで水淺し

かういふ句を作つた人があつた。これで一通りは聞えてゐる。しかし「水淺し」が説明的氣分になつてゐる。「淺き水」としたら何うだらうと言つた。さうすれば、説明でなく、描寫になつて來る。「水淺し」と作者から説明してきかせられずに、成ほど淺い水なのだなといふ感じが素直に讀者の頭に入つて來る。

男海女海背合せ松を行く汐干

青倫といふ人の句である。博多の天の中道を描いたのである。いかにも描寫三昧に入つた好い句だ。天の中道を知らない人には、その本當の味は解らないかも知れないが、天の中道の春の感じを此位に言ひ得たのは尠いと思ふ。其の實景を知らない人には面白味が解らないやうなところにスペシアルなバアソナリチーがあるのである。

それから近頃見た句の中に、

小春寺に行人語り合へり鶴の事

といふのがあつた。昔なら、小春日に鶴を取合せたことは、舊套に墮したことであつて、甚だつまらない着想でもあり作意でもあるのだが、此句には何處となく一種の新味がある。何故かと思つて、其の理由を考へて見ると、矢張「あつたこと」といふことが其原因を爲してゐる。何んなに古い取合せでも、あつたこと、即ち作者が眼を離れて見たことには、何處かに新しいものがあるもの

である。自然は幾度くりかへしても決して舊くならないものである。必ず何等かの新しい表現を以て顯はれて來るものである。此句なども作者が小春の日に寺に行つて、行人の鶴のことを話し合つて居たのを見た處から出て來た表現の新し味があるのである。

つまり、新傾向の俳句は、餘ほど眼を重んじてゐる。眼から入つて來る最初の現象を細かく再現しやうとするやうなことが際立つて眼に附く。

現象——生々した現象を重んじてゐるので、頭腦や心でこね廻したり何かしないところに新味がある。解釋の自由といふことが其の特色である。

それから難解といふことも、今では新傾向の特色の一つになつてゐるやうである。成程、讀んで見ると、わざと難解を衒つたと思はれるやうなものもをり見當たる。難解は無論新傾向の俳句がその描寫を本にしたところから起つて來るのであるから差支はないと思ふが、しかしその難解は理由ある難解でなければ駄目である。わざと奇を好んで難解にするのは邪道である。

それから、近頃は、この新傾向の俳句を、新しい主觀、新しい情緒といふ方面に持つて行く人があるが、これはその根本の意義に於て違つて居はしないかと思ふ。

模倣と創意

模倣といふことは、若い人には止むを得ないことかも知れないが、餘り好いことではないと思ふ。模倣は皮相に留つて居ることが多い。

若い人達が古今の作家の作品を讀んで、それに感心したといふことは、自分の其時の學識と年齢と經驗との程度に由つて感じたとであつて、決して其の作家の作品の價値の全部に觸れたものでない場合が多い。從つて感心して居るだけならば、修養の補足になつて好いが、それを模倣するといふ段になると、兎

角虎を描いて猫に類するたぐひになつて了ふ。

模倣を遣つて、かなりに旨い文章を書く人は、雜誌の投書家なとにも隨分多く見當る。年が若くつてよくもかう旨く書けると思はれるやうな人が隨分ある。しかし自己の特色を持つて居ずに、模倣のみでやつてゐる人はその型がすぐ出來て、瞬く間に生々としたところがなくなつて了ふ。模倣には創意のやうな自由と複雜とを望むことが出來ない。

苟くも文章を作る人は、だから、模倣などを遣つてゐては駄目である。飽迄自分の特色を發揮し、自己の持つて居るものをドシ〳〵出すやうにしなければならぬ。

しかしこの自己の持つてゐるものを出すといふことは、中々難かしいことである。第一自己の持つてゐるといふものが果して如何なるものであるか、それが解らない。それが朧ろげながらでも好いから解つて來るやうになるには、餘

程の修練が必要である。水と火との戰ひのやうな暗鬪默鬪をも經なければならない。自己の内部の動搖をも經驗して見なければならない。

自己の特色を出し得れば、大抵な人は讀者を點頭かせるやうな文章をつくることが出來るのであるが、多くは、いろ〳〵衒氣や虛飾やがそれをさまたげる。時には、學問や經驗が却つてそれを礙げるやうになることさへある。

文章を書くには、誠意が肝心だ。これは昔の人もよく言つた。誠意はつまりまごこゝろとか眞面目とか言つたやうなものである。一たび筆を執つて紙に向つた以上、何ごとをも捨てゝ自己の本心を披瀝するやうにしなければならぬ。そこから自己が開けて來る。

それにつけても、模倣は無益な努力である。模倣だッて、本當にやらうとするのには隨分骨の折れるものである。それは、初心の中は、古今の作品から其文字の遣ひ方や、文章の書き方を習ふのは好いが、少しく筆が立つやうになつ

たならば、極力自己の創意を尊んで、それに向つて、勇ましく進んで行かなければならぬ。

文字の選擇と辭句の排列

新しい文章を作らうとするには、觀方感じ方を新しくしなければならないのは言ふまでもないが、文字の選擇に就いても大に心を用ゐなければならぬ。

文字は遣ひ方如何に由つて、新しくもなれば舊くもなる。文字は作者の心持にしつくり合つた字を用ゐた時に於て、始めて光彩を放つて來る。

しかし文字にも抽象的になつたものと、具象的に生々した姿を保つて居るものとの別がある。抽象的になつた文字とは、曾て一度巧に用ゐられて、それが人の喝采を博し、その模倣者が澤山出來て、遂に平凡になつて了つた者が多い例を擧げて見れば、『月に叢雲花に風』などといふ文句は、其の最初に用ゐられ

た當時にあつては、頗ぶる面白い比喩でもあり警句でもあつたに相違ないが、今日ではそれが言ひ古されて、何の感興をも惹かぬことになつた。其他漢字の持つて居る面白味なども、漢文のすたれた今日では、何の意味をも持つて來ないといふことになる。「巍然」とか「屹然」とか書くよりも、今の人もすぐ飲込める言葉を以て言ひ顯はす方が讀者を動かすことも出來るし、生々した感じをも與へることが出來る。だから新しい文章を書かうとするには、現代に行はれてゐる活語を注意して使ふやうにしなければならぬ。文字の面から、讀者は新しいとか舊いとかいふ感じを起すものである。

次は辭句と辭句との組合せを注意することが肝心だ。多くは辭句と辭句との組合せの上に、其の文章の巧拙が顯はれて來るもので、其處に其作者が何の位の技倆を持つてゐるかといふことが判せられるものである。下手な人が書くと辭句と辭句との間に何等の含蓄も背景もないが、上手な人になると、其處に無

限の色彩やら含蓄やらうが出て來て、讀者はその辭句と辭句の間に言ふに言はれぬ味を味ふことが出來るものである。昔、昌平黌あたりで、漢文の學生が名文の諳誦につとめたのも、さういふ辭句の組合せ方を名文の中から得やうとした修練法である。それからフロオベルが自作の文章を聲を擧げて朗讀したといふのも、その辭句の組合せ方に苦心した一例である。紅葉山人などもこれには隨分骨を折つたらしい。

そしてこの組合せ方に、其人の文章の生命が懸つて居るのであるから、これが型にはまらぬやうに、自由に、複雜に、生々した姿を帶びさせるやうにしなければならぬ。そしてこの組合せの方法は、自然を主として、その渾圓無礙の境に達する外に術はない、要するに修練である。

觸れるといふこと

文章を文章として學んだ弊であらうが、今の投書家は多くは文章の活用といふことを知らぬ。文章とは娯樂に書くもの、玩弄的に書くものと心得て居るらしい。

投書を調べながら、何時も其嘆の出ぬことは無いので、眞摯なるもの、誠實なるもの、熱烈なるもの——思ひが衷心に溢れて、何うしても書かずに居られなくなつて書いたといふやうなのがない。

日記や書簡文は、其性質の第一義として、純然たる活用的のものでなくてはならぬ。であるのに、投書家諸君はこれを書くのにさへ色彩や空想や虛飾を多くして、其事實を忠實に描いて居るものが乏しい。諸君は凝つて、骨折つて書きさへすれば、それで上手な文章が出來ると思つて居るであらうが、これは抑抑間違の初めで、書くべきことが頭腦に分明と映つて居りもせぬのに、いくら骨を折つて、汗水たらして筆を捻くり回したつて駄目である。否、さういふ人

に限つて、外形ばかり色彩をこね回して、内には何物の無いつまらぬ文章が出來る。

寫生を鼓吹した爲め、寫生的文章は隨分澤山に集るが、此の寫生的文章でさへ、虛僞が多い、虛飾が多い、色彩が多い、今一歩進んで、一種舊式の型に支配されて居る。何うも實際に觸れて居ない。

だから、かういふ風に文章を術と心得て居る人は、型にはまつた文章を書かせると相應に書けるが、一度實際に觸れさせると——人を訪問して其話を書くとか洪水を視察して其實況を書くとか、または實際の物象人物、事件等を書くとかすると、筆がすつかり萎靡して了つて、活氣も無く、精彩もなく、全く其目的を達し得ずに了る。これでは文章を書く甲斐が無い。

また、これとは反對に、かういふ人があつた。手紙を書かせると、いかにも旨い。その表情といひ、實況といひ、心持といひ、すつかり出て居る。である

のに普通の文章を書かせると、整然として立派に出來て居るだけそれだけ感情も境も出て居ない。何うも不思議だ、君は書簡や日記を書いてはあの位上手であるのに文章となると、何うしてあゝ下手なのだらう。これは屹度文章として社行を着たやうな氣持になつて書くからだらう。何うだ、君、書簡や日記を書くつもりで書いて見給へと言つた。けれど何うも其氣にはなれぬ相だ。

實際に觸れる——言ふのは實に容易である。けれどこれが中々難かしいと見える。實際のことを眼に見て居るのだから、何にも難かしいことはなささうなものだ。けれど實際と筆とをすつかり一致させるといふことは容易のことでは無いのだ。

この實際に觸れるに就いての經驗を少し話して見やう。實際に觸れる——誰でも實際にすぐ觸れ得ると思ふ。いや、吾々は既にかうして實際に存在して居る一員である、觸れるも觸れぬも無いぢやないか。かう言ふ人がある。けれど

此處に言ふ『觸れる』といふのはさういふ茫漠たる意味ではない。今少し細かい複雜した意味があるのだ。即ち存在して居るばかりでなく、はた又其實際の一員として實際に觸れて居るばかりでなく、更に實際といふもの、存在といふ意味、實際の一員と言ふ意味に觸れることを言ふのだ。詳しく云へば、吾々が客觀的の體度を以て、實際を見て、これはかう、あれはあゝと批判的の立場に此身を置くのを言ふのだ。實際の巴渦の中から離れてそして綿密に其の巴渦を見るといふ態度である。諸君の文章を書く態度はまだ實際の巴渦の中に居て、そして其巴渦をこね廻して居るやうなところがある。巴渦の中に居て巴渦のことを深く細かく知らうと言ふのは困難なことである。これは實際に觸れて居るのでなく、實際其ものゝ中に入つて居るといふだけである。

苟も文章を書くといふ人は――文章を術として玩んで居るものでない限りは少くともこの客觀的の『觸れかた』を研究しなければならぬ。此の男はかういふ性質、この女はかういふ性質、又此事件はかういふ心理的傾向といふことを分明と頭腦に入れて、そしてそれを充分に大膽に發表しなければならぬ。

さうかと言つて、この客觀的といふことにも餘程難かしいことがある。吾々は曾てかういふことを言つた『文を書く態度は即かず離れず』である、と。いかに客觀的が好いと言つて、作者が其實際を餘り離れ過ぎて觀察すると、其結果として、矢張不自然に陷る。餘り觸れ過ぎて却つて觸れぬやうなことになつて了ふ。かういふ態度にある人の文章は、何だか冷かで、輕佻で、厭な不愉快な氣がするものだ。

この『觸れかた』の如何に因つて、其人の文章の上手下手が極まる。否、これを押し廣めて、その『觸れかた』如何が創作の力と言ふことが出來ると思ふ。

この『觸れかた』を養ふに、何が一番必要かと言ふに、それは知識である。かういふ客觀的態度を重んじなかつた時代の文藝には、感情が詩文を作る上の第

一の要素として重く視られてあつたが、今は知識が却つて感情の上位に立つことになつた。感情も知識の加つた感情でなければ役に立たないことになつた。

自然と不自然

紅葉山人がある人に向つて、『實際にあつたことでも不自然に思はれることは書くな、實際にないことでも自然に思はれるやうなことは書け』と言つたことがあつた。其當時は成程と吾々も感心して居つたが、段々其言葉に疑惑を起して來た。

今では吾々は其の紅葉山人の言葉をかう改めたいと思ふ。『實際にあつたことは不自然に思はれても實際であつたが爲めに書け。實際にないことはいかに自然に思はれても、實際でない故に書くナ』。

紅葉全集の何處の頁を飜へしても、實際でない、鍍した自然が鼻につく程出

て居る。そして實際にある不自然といふことを書かぬ爲めに、事件が却つて不自然になつたり、性格が類性になつたりして居る處が到る處にある。つまりこの信條が山人の自然派でなかつたことを明かに證して居る。

實際の事件人格に不自然なことがあつた。實際であるが爲めに、此不自然は十分に研究し觀察し洞察し、そして自然の路を探さなければならぬ。どんな不自然な性格でも、實際にある人間ならば、その不自然になる自然の經過が無ければならぬ。自然派は寧ろこの自然中の不自然——偶存特徴を描くことを其特色として居る位である。又實際にないことで、自然らしく見えることは書けと言ふが、これも今ではかういふ態度では慊らぬ。

再現といふこと

人は大概生れ落つるとから、かうしたい、あゝなりたいといふ一種の慾望を

懷いて、事々物々それを己が實行の上に表して行かうと力を極めて努力する。醜を避けて美に就き、苦を厭うて樂に行き、惡を排して善をなさうとするなどいづれもこの點から出て來てゐるのである。

斯くのごとき不斷の努力は、また、不幸にして念ひ通りの効果を收め得ないやうに定つて居る。何も知らぬ無垢の心から、あゝしたい、斯うなりたいといふ折角の念願も多くは途中で思はぬ邪魔に逢着することが繁くして、終に滅茶滅茶に壞れて了ふ。然かく單純でなく容易でない現今の社會自然は彼等のその念願を容るゝべくあまりに峻嚴である。この自己の理想念願のあさましく壞されて行くことがあまりに度重なれば、その結果として普通或者はわけもなく墮落して行き、或者はまたわるく悟りすました禪宗坊主のやうな心地になつて行く。我等新しい藝術にたづさはる者は、この場合に當つて、たゞ靜かに心の瞳を濟ませて、周圍に起つて來る諸種の自然の現象を、それから離れて、明らか

に觀ることに務むる、そして更にそれを讀者の前に再現せむことに努力するのである。

世に實行の藝術とも名づくべきものがある。これは右に云つた理想を實行の上に現はして行かむがために最も都合よいやうにと專心藝術を取扱つて居るものゝ謂である。それが果して社會の上に何程の利益を附與し得るやは不問として、單に作品として視る時は不完全極るものであると私は思ふ。これらの作者の作品は勿論のこと自分自身をも理想實行の內に何等のゆとりも無く、足掻きも出來ぬまでにその全部を打込んで居る。そしてたゞ醜を見まい、惡から逃れやう、少しでもよくなりたいとたゞもう世間一般の渦の中に在つて世間に同情し、また世間からも同情せられやうと念がけて居る。是等の人に如何にして寸分の誤謬なき世間自然の眞相が捉へられるであらう、前にも言つた通り世間の自然は決して人間に都合のよいやうにのみは出來てゐないのだ。

よく言ふことだが、こゝに一例として從軍記者のことを引く。眞の從軍記者としての使命は、前後左右何等の顧慮を費さずして、たゞ軍のありの儘の眞相を傳へることがあるであらう。所がそのありのまゝを傳へられては軍の作戰上或はまたその他の事情から軍隊の方に不便なので、從軍記者はその意を迎へて軍隊に都合のいゝやうな報導を作爲する。なるほどこの方が便利は宜からうが眞實の從軍記者としては決して完全なものではあるまいではないか、偉大なる軍の眞相は斯くの如くにして終に不明の内に終つてしまふのである。根本の事實はどうでもいゝ、たゞその時その時その都合さへよろしければといふのならば何も云ふ必要はないが、若し飽くまで事實の眞相を究めやうと云ふのなら、とてもこれで滿足して居るわけには行くまい。

それは兎に角として、斯くの如き理想——自己一身の思想趣味乃至愛憎の念等から築き上げた理想といふものを通じてのみこの大自然を觀ることに不滿足

を感ずる吾等は、全然自己を事實現象そのものから離して、何等の同情なく同感なくしてその物を客觀せねばならぬ。自己自身の悲しみに對しても、徒らにその悲しみを悲しむのみでなく、あゝ悲しんで居るな、といふこゝろもち、又は一個の人間の死骸に對しても、死んで居るな、と見るこゝろもち、それらを持つてゐて初めて溺れざる眞の觀察も出て來るのである。即ちあらゆる歡樂も悲哀も苦痛も、みな眼と心とに映つた現象として取扱ふのだ。

これらは多く經驗に由つて生じて來る、前に言つた如く、自分の理想の破壞せらるゝことが度重なれば重なるだけ、それらの現象に對して靜かに耐へ忍び得るやうになる、それだけまた離れて觀察せらるゝやうになるのだ。然しながらこの耐へ忍ぶといふことはなか〳〵かりそめのことではない、その忍びがたいところを忍んで行くうちに次第に作者の人格といふものが出て來る。人格と云つても右言つた通り理想派の作者達のやうに作者自身が作物の正面に立ちはだ

かつて居るので、これらの作物に表れて來る人格とはよほど異つて居る。作物の表面にはたゞ現象そのものゝ外には表れてゐないながらも、蔭には實に動かし難い作者の影が動いて居る。偉大なる作物になればなるだけそれが強い。茲に於て、鏡のものを寫すがごとくに小說を描くといふ一派とも我等の態度は違つて來るのだ。生きた心と死んだ鏡との上に寫り現はれて居る現象のこゝろもちが同一であるわけはない。ゾラ、モーパッサンの作物の裏には荒凉を極めたゾラ、モーパッサンの影が惻々として讀者の心を刺して浮んで居る。その他ツルゲネフの悲哀、トルストイの苦痛、みな嚴乎としてその作物の內に滿ちて居る。覺めたる藝術家の生涯は終に悲壯である。

遠慮なしに現象そのまゝを書くといふ我等の態度に對しては大分世間に是非の聲がたかい。私の作に就いてもづゐぶんそれは烈しかつた。が、不幸にしてその是非いづれの聲ともに皆あての外れた、作物そのものに關係のない批判であ

つた。或人は重に卑劣陋劣なる醜事實をよくも斯うさらけ出したものだ、文藝の墮落もまた極れりと謂ふべしだといふやうなことで、延いては作者の人格をも云々してゐた。又ある人は作者の尊い懺悔なりと思惟したのも多かつた。いづれもこれは間違ひで、そんな批評に對しては作者は實に何等の痛痒を感じない。繰返して云つたが如く、一度藝術品となつた小說は全く實行上の問題と離れてゐる。作者が自己の生涯を人間として見る以上、いかなる醜事物を描かうが、それは實際の實行方面（道德倫理）には何等の關係が無い。若しその作者のさうした醜事物を責めたいから、作品の上からでなく實際の上から責めるがいゝ。作者にもしそれに似た境遇に邂逅したことがあつて、同一心理の狀態に居ることがあつたとしても、作者はそれを好いことゝもわるいことゝも思つては居ない。要するにある事件に逢着してそれから起つた心理現象である。自然を根本にした心理現象が善惡を超脫してゐることは言ふまでもない。從つて懺

悔などをする必要がない。作者はたゞ忠實に書いて居ればいゝのだ。懺悔談の如きは確かに一種の意味に於ける實行上の利益に資せむがためである。我等の小說と寸毫の緣が無い。懺悔を小說だと信じてゐた時代は既う過ぎた。代つて小說は人生の縮畫、眞の縮畫、事實の縮畫といふ時になつて居る。醜といひ美といふも要するにそれは同一物體の表裏であつて、その中の何れを缺いてもその物體の眞相は露はれて來ないといふことが解つて來た。醜事實の描かれしを厭ひ、小說を懺悔なりと思惟して居る人々は、顧みてかの空なる立場に築かれてゐた宗敎といふものが、科學の進步に由つていかに根本から動搖したかを見るがいゝ。

それから藝術に就いて、何う考へるといふ質問は、それは難問題で、中々一朝には盡されぬが、私の考では『藝術は現象の再現なり』と思つて居る。但し其現象を再現する方法に就いての主觀の必要、技巧の必要、さういふことに就

いてはいろ〳〵考も持つてゐる。

文章と型

私が明治の文壇に就て特に深く感じて居ることは、文章に型が出來て、其爲に沒落の憂き目を見た者が多いといふことである。即ち一種の調子といふやうなものが出來て、それに乘せられて書いて居るうちに、知らず〳〵型が厚くなり、自分で氣付いた時はもう二進も三進も動けなくなつて、遂に文壇的悶死をする。實に文學者に取つては、型の出來るといふこと程恐ろしいものはない。だから若し、自分の文章に多少なりとも型が出來たと自覺したものは、一刻も早くその型を破つて出るといふことに全力を盡すべきだ。

然らばその型とは果してどんなものか、又その型を破るにはどうすれば可いか、――一寸一口には言へないが、型とは作者のほんとうな心持と、筆の先と

が離れた狀態で、曾ては私は確にさうであつた。書くことはいくらも書けるがさて顧みて自分の心持と合つて居るかといふとさうでない。文章が文章として出來上つて居るので、實は中身のない、何處へ持つて行つても當て嵌まるといふ文章である。

さて然らばその型はどうして破つて行くかと言ふと先づ書かんとする思想を絶えず轉換して見る必要がある。例へば此處にマッチの箱があるとして、これを只一方からばかり見て居たならば、決してそのマッチの眞相は見えない。若し片側ばかり見て、いつまでも片側のつもりで書いたならば、やがてその文章は型に入つたものとなるのである。だから常に上から見、下から見、横から見先から見る必要がある。

ところでこの見るといふことは、思想といふよりもまた見方といふよりも、寧ろ頭の働きと言ふことである。頭が鈍かつたならば、いかに努力しても遂に

ある程度以上に達することは出來ない。けれども亦、頭が鋭敏であるからと言つて、それを恃んで居つた日には直ぐまた文章が型に入るやうになる。で、文學者は常に自分の思想の變つて行くのに注意して居なければならぬと共に、社會の思想がどうなつて行きつゝあるかを常に見て居る必要がある。文體といふことは簡單なやうで實は深い根柢を有する問題だ。

尤も、今言つたやうな型はないとしても、其人自身の型はあるに違ひない、言はゞ型のない型だ。佛蘭西などは流石に藝術の國だけあつて、その匂ひが殊に強い。文體といふことで一家の意味をなすので、いくらか「藝術の爲の藝術」といふところがある。即ち好い意味の型を持つて居る人だ。ロチがさうである。ドオデエがさうである。フローベル、ゴンクール、亦さうである。アナトール、フランスの如きは殊にその特色を持つて居る。

フローベルの作では重なものは四篇であるが、その四つの一つ〳〵が違つた

行き方である。尤も是は五年に一篇、十年に二篇といふ風で書いたので、その變り方が餘計によく見えるのでもあるが、然し孰れも惡い意味の型に入つて居ないといふ點に於て、いかに文體といふものを重んじて居るかゞ察せられる。

これを日本に例へて見ると、島崎君は今言ふやうな好い意味の型のある人、所謂アーチストの代表的作家で、故の國木田君や正宗君は好い意味も惡い意味もない、即ち型のない方の代表者である。好い意味の型ある人は、餘程注意せぬと頓て惡い意味の型に入り易いかも知れぬが、型のない人は比較的その憂ひが少いやうである。私は寧ろ前者に屬するが、然し何方かといふと後者の方を望む一人である。

要するに、宇宙間のあらゆる現象は、一事一物みな一つの言葉しか持つて居ない。その言葉を發見して、丁度それに當て嵌めて書き現はしたものが即ち最も好い章で、且つ完全な文體であると思ふ。

旅のインキ壺

三浦半島

此頃は旅行者からの繪葉書を度々貰ふ。木曾の御嶽の正面に聳えて居るのもあれば、上總の海岸の海水浴場の雜沓を撮影したのもある。箱根から、天城から、日光から、大抵は曾遊の地が多い。

雨の降る日、獨り机に向つて、此等の多くの繪葉書を見て居ると、いろ〳〵なことが頭に上つて來ずには置かない。自分の旅姿が其處にも此處にも見える十五六年前に、東京を出てから歸るまで、十日ほども雨に降りつゞけられて困

つたことなどが歴々と眼の前を通つて行く。

三浦半島の一角に松の非常に見事な高原があつた。其處に二階屋ではあるが安普請のガタピシした旅籠屋一軒あつて、其處からは東京灣を隔てた房總山が夕日に美しく彩られて見えた。高原の草の中には鈴蟲や松蟲が晝も啼いて居た。撫子も咲いてゐた。

私達は鈴蟲や松蟲を澤山捕つて、紙袋に入れて、歸京の時、それを土産に持つて來ることにした。其處は波の荒いところで、汽船はいつも十四五町も沖の處で留つて、其處から端舟で往來するやうになつてゐた。私達の歸つた時は、闇い夜で、しかも凄じい雨がザンザン降つて居た。遠くから望んで辛うじて行着いた青い赤い汽船の灯は上つたり下つたりして、船頭が端舟から本船に魚の積荷を移す度に、私達の體は天から地に落ちるやうな氣がした。鈴蟲を入れた袋もビッショリ濡れて了つた。

汽船の中にある細い柱に、私達は其ぬれた袋をかけて置いた。波の音、雨風の音に交つて、其處で夜もすがら鈴蟲が啼いて居た。

漁師の家

凄じい風雨だッた。

端舟は高い波に乘せられて擧つたり沈んだりした。傘などは無論翳されなかつた。私達は吹降りに身を任せなければならなかつた。船頭はそれでも懸聲をして艫を操つた。

墨を流したやうな暗い夜を破つて、沖に見える汽船の赤い青い灯！　それが追々近く近くなつて行つた。

『あの時はひどかつたね。』

『僕はあの時蝙蝠傘を破して了つたね。』

久しい後まで、私達其風雨の夜の海のことを忘れなかつた。

端舟の出入する船着に、一軒漁師の家があつた。暗い洋燈が甜瓜や西瓜や駄菓子を入れた箱の天井のない煤けた屋根裏などを照して居た。漁村の若い男が二三人來て面白さうな話をして居た。年老つた婆樣の後には色の白い娘が絶えず微笑みながら坐つて居た。『お客さん、大變だね、この降りぢや――』かういふ言葉に送られて私達は磯に出た。そして端舟に乘つて沖に出た。

波濤

波濤の美は大洋に見るのを第一とする。廣い海が風を帶びて、一面に白い波頭を立てゝ居るさまは實に何とも言はれない。それに風の日はきまつて海の色が濃い。

碎ける日影も美しい。

アルフオンス・ドオデエ

砂濱の波は單調だ。それも大洋に濱した海岸なら、いくらか雄大な氣分を起さぬでもないが、穏かな海では多く見るに値ひしないと思ふ。岩石のある海岸は、それに比べると餘程特色がある。

丘陵の間の道を通つて行くと、思ひもかけぬ海が見える。岩がある。島がある。彎曲した砂濱がある。帆が一つ偏つて走つてゐるのが見える、海は飽くまでも濃い碧い色を見せて居る。

岬端に見る波濤——これは隨分人の心を惹く。私の記憶では、出雲の地藏ヶ岬の鼻から見下した波濤が一番はつきりと頭に殘つてゐる。

私は燈臺の後の岩の上に立つて居た。其處は海面から少くとも四五十米の高さを持つて居た。廣い廣い廣い海！　碧い碧い碧い海！　隱岐の島の姿が微かに見えて、渡つて行く船もなければ、一鳥の影も見えない。私は立ちつくした。岸から少し離れて、岩が五つ六つ立つて居て、それに波が來ては碎けた。

北海といふ感を私はその時ほど深く味つたことはなかつた。

岬頭

燈臺から下りる路は、丘の腹の處を縫つて行つた。伯耆の大山の頂に白い雲が懸つて晴れ、晴れては懸つた。朝日が正面からさして、波頭は光り、路傍の草や萱に置いた露は美しく煌々した。丘と丘との間には、殘い小さい谷が幾箇もあつて、其處に綺麗な水が淙々と流れて居た。燈臺に勤める人の家らしい小綺麗な家屋が深い樹木の綠の中に見えて、垣に木槿が紅く白く咲いて居たりした。

朝露を帶びた刈草を背負つて、鎌を腰にさして向ふから歩いて來る紺の脚胖をつけた村の若い女にも逢つた。

草の匂ひが四邊に充ちて居た。

屈曲した道はそれでも十四五町はあつた。俄かに前に展げられた活躍した小さい港！　沖釣に出かける船に續いて青ペンキの船體をクッキリ見せて煙突から灰色した煙を吐いて居た小さい汽船、彎形をなした朝の海にズラリと影を蘸した港の家並、其向ふに見える長い埠頭、國幣中社の大きな華表——其處に昨夜泊つた美保ヶ關の港がひらけた。

細い通りがその家並の間を矢張彎形になつてついて居た。

運漕店、理髮店、旅館、雜貨店、料理店などが兩側に並んで、をりをり三味線の音も其處から聞えた。私の泊つた旅館は、海に臨んで居て、欄干のついたその四疊半の一間からは、小蒸汽の發着する長い埠頭が見えて居た。床の間には裏の山から採つて來たらしい色の濃い桔梗が生けてあつた。私は半日を其處に過した。

小國の美

私には九州よりも北陸よりも、山陰道が感じが好かつた。山陰道と言つても、殊に出雲の山水の印象が深かつた。杵築もよかつた。日の御岬も好かつた。備後から越えて行く山の中も興が多かつた。

私の好きな國は伊賀に若狹に出雲に日向に、美作。關東では、相模と伊豆と下野、奥羽では陸中と羽前、先づその位なものである。美作の福山は私に取つて一寸忘れられない記念がある。其處には私の知つて居る石坂厚嘉といふ人の墓がある。其人は中尉か何かで日露戰役に戰死した。私は旅の次手に其人の墓を訪ねたことがあつた。秋の晴れた朝であつた。旅籠屋のすぐ後のあの森が其寺だといふことを、福山生れのやさしい口の利き方をする若い女中が敎へて呉れた。それは早稻田に來て居て、よく私の家に訪ねて來た人であつた。文學の

好きな特志な青年であつた。私は露をわけて其墓に詣でた。

若狹の小濱、伊賀の上野。『何うしてかう國の小さい處に面白い味があるんだらう』などゝ私は友達と語り合つたこともあつた。『小國の美！』かうしたことを話したこともあつた。私は地形から來る風俗氣分などゝいふことを考へても見た。私の經驗で言ふと、大國、大藩などゝ言ふ處には面白い特色は少いやうである。三角洲で生れた人と盆地で育つた人との差異などを考へて見るのも面白いことだと思ふ。

日向は鳥渡面白い處だ。何處となく世を離れたやうな暢氣なところがある。薩摩などよりも面白い。風景にすぐれたところがある。鵜戸岬などは是非一遊すべきところだと思ふ。

北陸では敦賀附近が好い。常宮は風景の甚だすぐれた處である。汽車から見る杉津の海岸も頗る印象的だ。能登は想像したほど面白くない。私は西海岸は

知らないが、東海岸だけでは、それほどすぐれた風景も無いやうだ。和倉などは俗地で仕方がない。七尾も景色が好いといふだけで、別にこれと言つて特色がない。

琵琶湖は西岸に好い處がある。今津、鹽津、海津、竹生島も一寸面白い。

大阪の感化

日向の宮崎は縣廳の所在地としては甚だ振はない處だが、それでも、特色には富んで居た。私は土地の新聞記者に招がれて、紫明館といふ倶樂部の大廣場で酒を飲んだ。百疊以上も敷かれる室であつた。大淀川はもう餘程海に近く白帆が幾つとなく前を通るのが見えた。向ひの山の皺皺は、光線の加減で、或る處は紫に、或る處は緑に、或る處は暗褐色に見えた。

涼しい風が吹いて通つた。

女はすべて大阪であつた。扮裝も言葉も風俗も土地らしい處は少しもない。唄も三味線も皆なさうである。私はかうしたものにも大阪の商業市としての勢力を感ぜずには居られなかつた。一度大阪を西に下ると岡山でも、廣島でも、福岡でも乃至は四國の高松や德島でも、その感化を受けない處は一つもない。大阪の心齋橋通あたりを小さくしたやうな通が何處の市街にもある。それに、少しハイカラな娘達は、皆な上方言葉を使ふのを伊達にしてゐる。裾に厚い派手な袵を出して居る。『すつかり大阪の感化ですねえ』と私は新聞記者の一人に言つた。

九州の他の地方に比して此地方が殊に大阪式になるのは理由のあることだ。それは此處から中央地方に向つての交通機關が、唯一の大阪内海間の汽船で繫がれて居るからで、物質――文明はすべてそれから入つて來るのを例として居るからである。海と舟から文明が開けて來るといふ例は此處でも見える。

港

宮崎から大阪地方に出やうとする人々は　馬車で内海港まで行つて、そこから大阪行の汽船に乘るのを常とする。

内海港――

その内海港を私は鵜戸參詣の行きにかへりに見た。

灣口狹く、波濤高く、風の強く吹く時には船が其處に碇泊することが出來ないで、すぐ引返して行くといふ話である。私の通つた時には、今朝着いた汽船が、さも長い旅に疲れたと言ふやうに、煙突から白い煙を出して其處に碇泊して居た。港には日影が美しくさして、街には白壁造の家が彼處此處に見えた。社の編輯室で、口繪の寫眞などをあさつて居ると、よく見るやうな港の景色を私は丘の上から振り返つて長い間見て居た。

此處から鵜戸に行く山路は登つたり下りたりして、岬の附近に見るやうな特色が到る處にあつた。冬青の樹の深く繁つて居るところもあれば、冷たい清水の岩蔭から湧出して居るところもあつた。磯から磯へと續く岬は右にも左にも海を見渡して、をりからの風を受けた帆が幾箇となく沖を通つて行くのが見えた。

海の大觀を盡すのには、岬頭に立つのが一番好いと私はいつも思ふ。海から見た陸は何うも面白くない。海から見た海も單調だ。海を見るには矢張陸から見た海でなければならない。ことに岬頭から見た海でなければならない。其處に初めて海と陸との相接觸した雄大な景色を見ることが出來ると思ふ。

山水小論

一

名山を望むといふことは、私に取つては、旅に出ての最も樂しいものゝ一つであつた。廣い野の末などに遠い名高い山を望むと、意味もなく胸が躍つて、いつも旅の興が盛に湧いて來た。『行人指點信州山』とか何とか、昔の漢詩の中にはよくさういふことがある。實際山を望む位旅の興を惹くものはない。

平野から望んだ山、海から見た山、峽谷の間から微かにその髻を認めた山、群峰の中からそれと纔かに指點し得た山、高山の頂から廣く一目に見渡した山

——どれもこれも皆面白い。

木曾の御嶽は美濃平野から望むと、頗る雄偉の趣に富んで居る山である。中仙道の太田、御嵩あたりから見たのが殊に大きい。惠那嶽を右に、飛騨山脈を左に高く廣く聳えて居る具合は、いかにも帝王が群臣を帥ひて朝に臨むといふ趣である。木曾の谷に入ると、却つて群山に蔽はれて見えなくなつて了ふ。鳥居峠から見た御嶽は、纔かに肩から上が見える位のものである。

鳥居峠の上から、晴雪の御嶽を見たことが一度あつた。風が凄じく谷底の雪を捲上げて、峠の茶屋を出ると、帽子と蝙蝠傘も吹まくられるといふやうな日であつた。空は晴れて、日が明るく山の雪に照つて居た。純白に薄鼠を交ぜた雲は山の肩の處を、飛ぶがごとく掠めては晴れ掠めては晴れて行つた。

乘鞍、槍ヶ嶽、それから續く所謂日本アルプスの連山、これを望むには、普通松本平を一番好いとしてる。しかし安曇地方に行くに從つて、其眺望は一層

廣く一層大きくなるといふことである。實際其の山脈の雄大な趣は、とても他に求めることが出來ない。中國九州の山嶽などはこれに比べると、孫山位にしか當つて居ない。冬の松本平――風の寒い淺間溫泉、其處では雪がキラ〳〵と日に光つて、山脈が全く其の閃耀を其前に展げて見せた。

此山嶽の背後は越中の立山の連山になつて居る。針木の一路、さらさら越の草路は、夏三月の間、案内者を頼んで、山中に一夜露營して、そして僅かに越えて行くことが出來る。此大山脈は越中の方面から見ても頗る雄大な趣に富んで居る。私は能登半島の小木港から海を隔てゝ遙かにこれを望んだことがあつた。其處には北海行きの帆船が港を埋むるばかりに集つて居た。私は海に臨んだ旅館の二階の欄干に凭りながら、立山を中心にして次第に北に靡いて低くなつて行く山脈を見た。

『彼處が――あの海に盡きて居る處が越中越後の境の親不知だね』

私はかう指して婢を顧みた。

佐渡は見えなかつた。米山も見えなかつた。しかし秋の晴れた日には、微かに見えることがある。かう言つて婢は白い帆の重り合つた沖合を指點した。

米山は低い山だ。しかし海岸に特立して居るので、其岸は風景に富んで居る。佐渡の金北山は越後の海岸からでも、それと分明指點することが出來る。郵船會社の北廻り汽船の甲板の上から見ると、佐渡の夷港を出てから、粟島に至る迄の間に、内地に遠く屏風のやうに連つて居る一帶の山脈が見える。これは羽前と越後の境に蟠つて聳えて居る朝日山脈で、其右が飯豐山、其左が月山山脈だ。しかしこの北海岸中、最も特色に富んで居るのは、羽後の鳥海山である。

鳥海山は周圍が開けて居る割合に、雄大深邃の趣を備へて居る。そして富士山のやうに、かなり遠い處から見られる山である。御物川平野からも見える。西海岸からも見える、羽前の庄内平野からも見える。中でも海から見たのが一

番傑れてゐるといふことである。本庄町の子吉川の橋上から見た姿は、殊に端麗で、形は富士に似て居る。象潟の故址に見たのも美しい。奥羽の名山では、この他に羽前の月山、陸中の岩手山、陸奥の岩木山、それに下北半島の恐山、秋田の森吉山などがあるが、――いづれもそれ相應の特色は持つて居るが、鳥海山に及ぶものはないと私は思ふ。

鳥海山の山脈の海に盡きた處は、かなり高い峠をなして居て、道路はそれを北から南に越えて居る。峠の上からは前後に海が見えて、飛島の一青螺が手に取るやうに見える。女鹿吹浦の長い海岸に波が打寄せて、遙かに酒田の港が見える。酒田は昔の色街、松で蔽はれた丘陵の陰に日和山の公園があつて、芭蕉の『暑き日を海に入れたり最上川』の句が石に刻んである。其附近から見た鳥海山は、秀色殊に鮮かである。

月山――私は其名からして好きだ。『雲の峰いくつ崩れて月の山』實際月が地

平線から其二三分を顯はしてゐるやうな感じのするのは此山である。雄偉とか嶮峻とか言ふ方でなく、平遠な單純なそして大い感じと言つたやうなものを先づ起させられる。日本に大陸的の感じを起させられる山と言つたらまづ此山であらう。金山峠を越えて新庄平野に下る處からは殊にさういふ感じが味はれる。

岩手山――岩木山、趣が稍似て居る。岩手山が盛岡市の岩手山であると同じく、岩木山は弘前市の岩木山である。其附近を流るゝ北上川が平凡であると均しく岩木川も亦甚だ平凡である。しかし秀麗な點から言へば、岩手山は岩木山に一歩を譲らねばならぬと共に、雄偉な點から言ふと、岩木山は岩手山に一籌を輸さねばならぬ。

陸中の南部と陸前とには、脊梁山脈が其西部を劃つてゐるばかりで、名山と稱すべきものは殆どない。牡鹿半島の金華山は名山と言ふよりもむしろ名所と謂ふべきであらう。

福島市に於ける吾妻山と其群山は、感じが稍遠過ぎるやうな處がある。脊梁山脈の一峯として見捨てゝ了つても差支ない。盤梯山は會津の名山である。那須火山群から日光山群に來ると、また餘程趣が異つて來る。

那須岳は淺間、阿蘇と共に著名な活火山である。雲が多くて、那須野を横貫する東北線の汽車の窓からは見えぬことが多い。山麓に處々に湧出した溫泉には、山に凭り溪に臨んだやうな浴舍が多い。

二

關東平野から環の樣に見える山岳の最も北に位して居るのは、日光群山である。男體と女峰との間に大眞名子及小眞名子の二峯を挾んだ一群の山岳は、或は利根川の蘆荻の繁る土手の上から、或は木枯の吹荒るゝ村落の盡頭から、或は織物の市の立つ田舍町の屋根の上から、或は野の榛の疎らな林の間から、それと明かに指點することが出來る。關東平野で一番早く雪を見るのは、富士とこの日光群山とである。蕎麥の花、綿の花、秋も段々更けて行く頃には山の明るい雪が寒く里の人々の肌に染み渡つて見える。この群山から左に上州の奥山、赤城、榛名、淺間の噴烟は時には暗く、時には明るくこの廣い平野に靡いて來る。利根川の渡船の中からは殊にそれがよく見える。『淺間の烟が此方に向いたで、また天氣が變るたんべ』などといふ言葉をよく耳にする。妙義は最低く、只僅かに其嶙峋の頂を見るばかりである。其左に城壁を築いたやうな荒船火山、晴れた日には、其上に蓼科山の晴雪が見える。秩父山塊では武甲山、雨神山、それから多摩の山が連つて、大山、箱根の上に、富士が帝王のやうな威容を示して聳えて居る。夕日がいつも其頂にかゞやき渡る。

この山々から落ちて流れる川は、右から數へて、那珂川、鬼怒川、渡良瀬川、利根川、荒川、多摩川、中で、利根川がその大動脈をなしてゐる。桑畑、稻田

麥畑、村落、林、埃の立つ白い路、乘合馬車、その果てに、東京市の十萬甍がある。

東京には山がないと言ふ。しかしこれは京都などの規模の小さい所に住んだ人の批評で、關東平野位山岳の偉觀を見るに適した處はないと思ふ。比較的廣い濃尾平野、越後平野、筑後平野、何處に行つたッて、關東平野で山を見るやうな偉觀はない。關東平野で山を見るには、粕壁から足利に至る間を初冬の晴れた日に東武鐵道に乘つて行くに限る。

筑波山は平野の一名山である。山上の眺望は他に多く其比を見ないと言はれてゐる。筑波山上から富士を見た風景は富士百景の尤なるものと宗長も言つてゐる。

富士見十三州地圖と言ふ大きな古圖がある。富士山は矢張一番多く古の人をも動かしたと見える。登つてはつまらないが、望む所によつては、富士山は矢

張此上ない名山である。夕日を帶びて濃い鼠から紫に、紫から暗色を帶びた紫に變つて行くさまの美しさは、關東平野に住む人の常に見るところである。昔の畫家はよく富士に尾花を添へて描いた。今の西洋家は多く村落や林や町をその前景にして描く。

海岸から見た富士は、三保、江の浦、蒲原、龍華寺など最も著名である。山から見た富士は、箱根の御尉峠、姥子附近、鞍掛山、十國峠などに指を屈する。平野から見た富士は、柏木、代々木附近浦和附近などである。東京市中では、駿河臺、お茶水に添つた元町の坂路、牛込中町の一路などを私は選ぶ。瓦甍煤烟の中から見た富士の白雪は、坐ろに町の心の心を惹く。

遠く離れては、伊勢の二見浦、志摩の烏羽港日和山、下總銚子の愛宕山、安房の鋸山山上など最も著名である。常陸の霞浦からもよく見える。

箱根は山が淺い。そして規模が小さい。しかし淺いだけに眺望に富んだ山が

多い。駒ヶ嶽、神山など中でも殊にすぐれてゐる。蘆の湖は山中の湖水としては好い方だ。

甲斐は信飛に次いでの山國である。しかし山の大きいのは、信濃に接した地方で、駒ヶ嶽、八ヶ岳などその最も著名なるものである。甲府盆地に入ると四圍の山、殊に北部西部の山岳が雄偉崇大な感を旅客に起させる。韮崎以北、高原性の臺地は深邃な峽谷に添つて開かれ、日野春、小淵澤あたりは山國に珍らしい廣い大きい風景を展開してゐる。日本で高原を求めると信濃の輕井澤附近備中の高梁川上流地方、日向の高原附近など最も著名だが、この甲斐の高原ほど大きな感じを惹起させるところはない。山が第一に大きい。谷が深い。雲が多い。林や草叢が無限に續いてゐる。輕井澤附近も日本には珍しい高原性の特色に富んでゐるが、それより一層荒涼として、且つ嵐氣に富んでゐる。中央線の汽車がこの高原に懸ると、空翠四圍に充ち、晴嵐衣を掠め、雲影俄かに山雨

を齎らし來るといふ風で、無數の隧道を經て來た苦痛を一掃するやうな爽かな氣分になる。小淵澤附近で見る夕暮の富士は、私の多く見た富士の中で最もすぐれたものであると言ふのは憚らない。

三

富士以西の東海道木曾以西の中仙道は、山に乏しい。遠江の平野から見た赤石山脈はやゝ遠きに失して高山らしい感じが起らない。美濃の伊吹山、伊勢の鈴鹿山、唯この二狹隘が二街道の要路になつて居るばかりである。伊吹山は流石に名山である。岐阜あたりから見た姿は偉丈夫といふ思ひを起させる。鈴鹿山脈は東海道を表にし、中仙道を裏にし、琵琶湖を隔てゝ比叡比良の山巒と相映對し、一面近畿の山巒に連つてゐる。

京都附近では、比叡愛宕の二山に指を屈する。比叡は下駄でも上られる山で

あるが、杉樹が多く、幽邃の區を成してゐる。こゝから琵琶湖を見た風景は、流石に艶麗に雄大を兼ねて居る。嵐山の峽谷は狹いが、上流には奇景がある。

金剛山は、近畿では名山と言つて差支ない。木津川の沿岸からも、奈良の市街からも見える。大阪神戸あたりからも見える。大和には南部に金峰山がある。紀州の山は高さはさう大したものでもないが、深さは信飛の山に拮抗するやうなところがある。十津川、大臺原などは日本でも名高い山中の部落である。

近畿の山は信飛や東北に比べると、言ふに足らぬほど低いものばかりである。名山と稱すべきものも少ない。山が山そのもので聞えたのでなくて、歴史上の古蹟とか、神社佛閣の地とか、名所とかで名高くなつてゐるものが多い。從つて、遠く望む山よりも近く登り得らるゝ山が多い。雲の變化なども單純である。谿谷などにも大きいのがないのはその爲めである。

谿谷では、僅かに宇治川、保津川、十津川、吉野川位のものである。

しかし京都は山巒四圍の都である。嵯峨あたりで見ると、比叡連山、愛宕連山、向ふに生駒の連山が見えて、嵐氣は四邊に滿ちてゐる。それに水が綺麗で樹木に富んで居る。自然の色彩は細かで、そして單調でない。

無論感じの大きい、自然な、荒涼とした、荒削りの氣分は得られない。飽までも人工的なのは免れない。どんな山でも丘でも歴史の色彩で彩られて居ないものはない。

兩側に谷を控へて、一筋の道路がその長い丘の脊について居て、其處に町があつたり、寺があつたり、神社があつたするのが、吉野山である。私は金剛山を越えるのに、僅かに半日を費ひやしたに過ぎなかつた。

箕面公園のあるところは、山が稍々深い。谿流も月の瀨の谷と共に近畿では指に屈すべきものである。池田、伊丹――それから播磨丹波にかけて山が稍高い。

中國では、名山の風致を備へたものは伯耆の大山と石見の三瓶山位のものである。山陽地方には殆ど記するに足る高山がない。

大山は流石に名山である。海からも陸からも見るに適してゐる。出雲では出雲富士といひ、伯耆では伯耆富士といふ。しかし矢張伯耆の大山と謂ふよりも出雲の大山と言つた方が好い。何故かと言ふと、伯耆からはこれを望むのに不便である。山の全形を完全に見やうとするには、何うしても松江、でなければ美保ヶ關あたりに求めなければならない。境から美保ヶ關に至る小蒸汽の上から見た大山の雄姿は私の忘るゝこと能はざるすぐれた風景の一つである。

三瓶山は山の形としては、大山に及ばざること遠しである。しかし子三瓶、孫三瓶を帥ゐて立つた姿は、山の少ない石見國にあつては特記しなければならない。

四國では劍山が一番高い。屋島山は形の奇を以て知られてゐる。

四

四國を貫いた山脈が九州に亘つて、豐後から肥後に及んで居る。四國山脈は概して嶮峻峭拔ならんとする勢を有せる大きな山脈である。四國の山が中國に比して高距のすぐれてゐるのもその爲めである。九州での山嶽が豐後の東南部に於て最も高峻なる山嶽を有してゐるのもその爲めである。

九州で名高い山は肥前の溫泉嶽と肥後の阿蘇山と日向の霧島山と先づこの三つに指を屈しなければならぬ「溫泉溫而秀」と山陽が言つてゐる通り、四面皆海なる島原半島の中に聳えてゐるので、山は何處からでも指點することが出來る。有明海の東岸からは殊にそれがよく見える。中でも宇土から三角に至る汽車の海岸は最もそれを見るに適してゐる。夏の夕の赤い雲が山影と共に有明海に其影を涵してゐる風景は、旅客をして車窓を離るゝ能はざらしむるに十分である。

それから長崎から一里、茂木町は丁度島原半島に向つて居るので、朝に夕にその色彩の千變萬化を見ることが出來るので著名である。阿蘇の噴火は日本第一であるばりでなく、其火山圏の規模の大きいことは世界でも指を屈せせらるゝほどである。火口丘、火口瀬、すべて整然として其跡を止めて居るばかりではなく、噴火口の奇觀は驚心駭目の趣を呈してゐる。それに此山は登るのに左程困難でないのが特色である。

霧島山は矢張著名な活火山である。山は鹿兒島鐵道の矢嶽トンネルを過ぎて大隅に出ると、もう其一群の山嶽が鮮かに眼中に落ちて來る。天の逆鉾は東霧島山の絶頂にある。そこから噴烟轟々たる噴火口の緣を廻つて、段々下りて來ると、此山でなくては見られない風景が明かに其前に展開せられる。それは繪のやうな櫻島を中心にした錦江灣を、一目に眼下に見るうつくしいパノラマである。

薩摩の櫻島山、今少し南して薩摩富士と稱する海門嶽、それを船から見た風景はよく人の口にするところである。

五

谿谷で大きいのは、黑部の谷、天龍の谷、木曾の谷、益田川の谷、手取川の谷、高梁川(備中)の谷、熊野川の谷(紀伊)などである。九州では球摩川の峽谷が著名である。

著名な大河で、谿谷の淺いのは、數へて見ると隨分ある。利根の谷もさう大きくない。信濃川は飯山以北小千谷に至る間は稍大きい峽谷をなして流れてゐるが上流は頗る淺く平凡である。北上川は奥羽でも屈指の大河だが、これがまた平凡極るものである。平野を平らに流れてゐるといふのに止まつてゐる。阿武隈川も中流に於ては風景に富んだ處が二三あるが、上流は矢張平凡である。

凡そ谿谷で大きいのは、黒部の谷に若くものはあるまい。黒部川は日本アルプの千山萬峰の相重る間を、急瀨をなして東から西に流るゝものである。長さ二十里餘、その沿岸は絶壁と絶壁と相連り、其間全く人烟を絶つて居る。無人の境をかく長い間流るゝ川は日本にも他に類がないと言はれてゐる。其溪谷には針金のわたしがかゝつてゐて、針木峠から立山に越えるものゝみがこれを渡つて行く。

木曾の谷と天龍の谷とを比較して見ると、天龍の方が餘程大きい。風景も天龍の方がすぐれてゐる。木曾谷は昔は幽邃を以て聞えたが、段々開かれ、崩されて、今では餘程其趣を減殺されて了つた。飛驒の益田川の谷の方が、却つて山水の勝に富んで居ると言はれてゐる。

富士川の谷はかなりに長く、且つ奇勝が多い。關東地方では、この谷と多摩の谷と荒川の谷と狩野川の谷とを稍々大なりとする。多摩の谷は東京に近い耶

馬溪と言つたやうな趣がある。私の見た所では、耶馬溪などよりもすぐれて居ると思ふ。柿坂あたりよりも數馬橋あたりの方が餘程溪聲雲影に富んで居る。氷川の一村は山村としての趣を十分に備へてゐる。それに上流に溯れば溯るほど、路は愈々高く、谷は愈々深く、いかにも深山に入つたやうな感じがする。狩野川の谷は溪流としてよりも、天城の深谷としての方に價値がある。

甲斐の御嶽の谷は規模は小さいが奇岩怪石に富んでゐる。

野州の山水——水の綺麗なのが特色である。大谷川、箒川、いづれも火山岩地方の特色なる「水の清さ」を持つてゐる。大谷の谷はかなりに大きく且つ風景がすぐれてゐる。深澤附近は日本の山水にも餘り澤山見ることの出來ない幽邃と奇峭とを發揮してゐる。箒川の谷は大谷の谷に比べて、餘程淺露に墜ちてゐるか、しかし何處か大谷に見ることの出來ない瀟洒なところがある。鬼怒川の谷は、處に由つては、人跡の至らないやうな僻地もあるが、中岩附近、瀧溫

泉附近、川治附近、上栗山附近は行つて見る價値がある。

奥羽では、陸中一の關附近の嚴美溪は名高いほどにすぐれたものではない。岩石錯落たる一小潭に過ぎない。陸前の材木嚴は、岩そのものは天下の奇觀であるが、溪谷は淺くして且凡である。羽後の稻庭附近に溪流の非常にすぐれた處があるさうである。谷は狹く、其間を溪流がすさまじき音を立てゝ流れ、時には全川一條の瀧と化してゐる處などがあるといふ。私はまだ行つて見ない。

馬淵川の谷は稍見るに足る。紅葉の時は殊に好い。羽前の最上川や大石田附近から清川に至る間に於て雄大幽邃の縱谷を開いてゐる。兩山相仄した間を蓆帆を揚げた舟の幾つとなく重つて行くさまは、鳥渡大陸的の趣がある。

陸奥では、岩木川の上流に風景のすぐれたところがあるといふ。

東海道は溪谷に乏しい。鈴鹿山は谷は大きいが、水が少ない。近畿では、月の瀨の名張川の谷、稍々下つて木津川の谷、それに箕面、保津の谿谷位のもの

である。

紀伊の熊野の谷、これは日本でも殊にすぐれた大きな谷の一つである。熊野川の谷、北山川の谷——其處には著名な靜八町の奇景がある。

靜八町の規模はさう大きくない。深潭藍を湛えてゐるばかりである。しかし山が深いので、感じがいかにもかけ離れてゐる。田戸の小さい旅籠屋の夜は、靜かで、水の音も聞えぬといふ風である。私は今でも潭に落ちた深夜の月の影を忘れることが出來ない。

熊野川は或處は迫り、或處は開けて居る。北山川を併せて一里ほど下つた處は殊に懸崖千仞の奇を發揮して居る。兩岸の絶壁から落ちる瀑を送迎しながら川を下つて行く快は、他に容易に求むることが出來ないものである。

舟の上下する溪流では、富士川、熊野川、球摩川、天龍川などであるが、熊野川が一番すぐれて居ると私は思ふ。珠摩川も鎗倒岩あたりは頗る膽を寒から

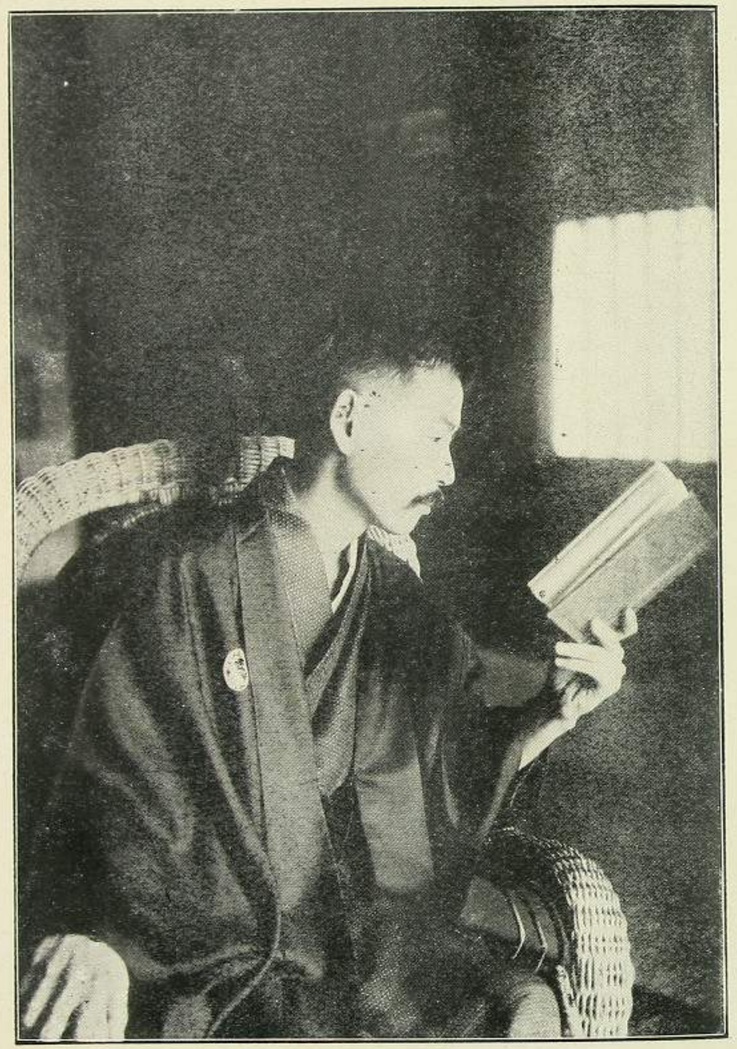
しなるに足るものがあるが、一體に單調に墮ちてゐる。それに山が淺い。

備中の豪溪はまた知らない。高梁川の峽谷は一別區を成してゐる。備後の帝釋は溪流よりも寧ろ岩石の奇を取るべきものであらう。江川は安藝から備後の國境を經て石見に出で、脊梁山脈を南から北に越えて日本海に注ぐ著名なる大河である。三次附近は殊に秀色に富んでゐる。石見に斷魚溪、出雲に鬼の舌震などがある。

九州では珠摩川と耶馬溪とを除いては、殆ど立派な山水がないと言つて差支ない。

六

海――日本の周圍をめぐる海の碧さ美しさ。私は海の音樂と彩色とを思つて胸の戰えを覺ゆる一人である。



國木田獨歩

夕日を後にした海と前にした海とでは其色が著しく違ふ。金色に輝いて暮れて行く海と、紫色から段々暗色に移つて暮れて行く海と――私は銚子の酉明の浦の松原の上に立つて、さびしい海を見渡して居た時のことを思出す。

北國の海は暗いと言ふが、何うも本州島ではまた暗いといふ處に至らない。北海道樺太あたりに行かなければ本當に暗い感じのする海を見ることが出來ない。羽後、羽前、越後あたりの海岸は頗る明るい。それに比べると陸中陸奥あたりの海の方が、却つて北の海のやうな暗澹と寂寥とを持つてゐる。

日本の海岸は頗る彎曲して居る。徒崖と砂濱と巧に相交錯されてある。砂濱よりも徒崖の方が怒濤狂瀾の趣に富んでゐるのは勿論だが、砂濱に長く打寄する波もまた見事でないとは言へない。

外國人は日本を『自然の公園』といふ。それは上海香港あたりから、海の碧の濃い、樹木の多い多島海あたりの風景を見ての感じを言つたのである。實際

日本の海は色彩に富んで居る。然し其色彩は單色から成立つて居る。單色から生ずるクッキリとした色彩と私は言ひたい。

しかし矢張海は大洋でなければならぬ。入海や入江では十分に海から來る感じを味はうことが出來ない。その意味から私は瀬戸内海や有明海や伊勢灣や松島などを好まない。

瀬戸内海は唯島の連續である。波の美、海の色の美は此處では見ることが出來ない。それに沿岸の山が皆低く大低赤く禿げてゐる。折々欹つてゐる松などもあはれなものである。それに海水も淺く濁つてゐる。

有明海も矢張さうだ。九州では、東海岸は概して好いが、西海岸は洲渚や入江が多く、泥沙が多い。

松島も海の美を味はうには、餘りに單調平凡である。潮流や、波濤や、海の色彩や、さういふものは總べて此處では味はうことが出來ない。

表日本よりも裏日本の方が海は概しい好い。出雲の海、石見の海、但馬の海それから天橋立や大門小門や常宮や東尋坊を有する丹後若狭越前の海——其處には汚ない沙濱や泥の深い入江などはない。其處には蛤やあさりなどで滿されて居るのである。廣い深い思ひ切つて碧の濃い海が厚い堆積をなして連續した濁つた海はない。

能登の海、越中の海、富山灣は表日本の相模灘と共に著名な深盂をつくつてゐる。越後では、米山、新潟、海府浦、羽前、羽後では、鼠ヶ關、酒田、吹浦象潟、牡鹿半島、陸奥では大戸瀬、鰺ヶ澤、十三潟、龍飛岬。

表日本でも遠く大洋に面した處には、雄大な風景が少くない。陸前の金華山常陸の海岸、銚子の犬吠岬、上總の八幡岬などは多く裏日本の海に讓らない廣い大きい風景を展げてゐる。

しかし東海道に來ると、餘程波がその高い世離れた音樂を失つて了ふ。伊豆

の絶角は好いが、駿河灣は何處となく穩かな女性的な處があつて、奔放な雄大な趣はぐつと減殺される。富士は風景を明媚にはしてゐるが、雄大にはしてゐない。自然的よりは人工的に近いのがこの山の長所でありまた弱點である。駿河の大崩の海岸などを說く人もあるが、それは裏日本の東尋坊あたりを見ぬ人の言ふことである。

御前岬も凡である。遠江の海岸もまた凡である。今切附近も俗だ。舞坂には湖水の美はあるが海の美はない。それが三河の渥美半島に來ると、づッと調子が違つて來る。半島の絶角伊良子岬は、表日本では指すべき勝景の地である。

岬は志摩と相對して伊勢灣の海門を扼してゐる。此の海門に散點する無數の島嶼、それに打寄する波濤の美しさは他に多く見ることの出來ない美しさである。怒濤の中の島嶼——その眺めがいかにも大きい。

志摩の三岬——安乘、大王、御座、それから伊勢紀伊の沿岸百里、串本の橋

杭石は天下の奇觀である。

紀伊の潮岬と對して、土佐の室戸岬、それにつゞいて佐田岬、豐後水道、豐後日向の海岸、いづれも雄大な趣を十分に備へてゐる。

九州では福岡の沿岸を說く人があるが、泥海で仕方がない。海の中道、香椎、箱崎あたりは、夥しく俗化されてある。それに比べると、唐津附近は明媚で、端麗で、そして雄大だ。虹の松原も好い。しかし此處に來た人は呼子附近まで行つて見る必要がある。呼子港頭の鷹の島の燈臺附近は頗る怒濤狂瀾に富んでゐる。名護屋城趾から見た壹岐島も好い。

天草も富岡附近は好風光の地として知られてゐる。長崎は一種特有のカラーを有つた港で、何處かしれない厭なところもあるが、それでも九州では好い港だ。福岡、鹿兒島などよりも餘程すぐれてゐる。平戸、五島——五島の絶端にある女男列島、其處には生命を賭して珊瑚を獲りに行く舟人の群があるといふ。

肥後の海岸は溫泉嶽の秀容を除いて殆んど取るに足るものがない。しかし八代以南薩摩に近くに從つて、風景は段々とすぐれて來る。隼人迫戸あたりは流石に好い。薩摩の西岸は、市來附近から吹上の濱、南岸では海門嶽を望み得る海岸地方――そこから無數の南島が續いて居る。

南國の海といふ感じは、此處に來ればもう十分に味はれる。

海中に連つて居る大島列島、其處に展げられた天然の色彩は、本州島では見られない特色がある。

其處の海の碧は、暑い日に美しくかゞやく深い碧である。椰子や芭蕉の實の熟する島は、もう內地のやうな氣がしない。

現代の紀行文

一

紀行文といふ名稱があるが、別にさうした種願に分けるべきものではなくて叙事抒情の旅に關したものであることは言ふまでもない。つまり作者の一人稱で旅行を書いたものである。

紀行文は天然を記する文章である。旅行中見聞したものを記する文章である。從つて其の目的とする所は、小說などとは丸で類を異にしてある。小說は人事天然を再現させるやうに描くに反し、紀行文はいつも作者が自から名乘り出て

書いて居る。從つてその種願に於ては、叙事抒情の文や小品文などと性質を同うして居る。

寫生文なども矢張叙事の文章だ。いかに細かい觀察をしても、いかに興味ある叙述をしても、再現を目的とした描寫にまで入つて行つて居ない、またそれを目的とする必要はない。

作者即ち其文章の書き手且つ話手であるのである。

だから紀行文の面白味といふものは、記事其ものゝ面白味とか、作者其の人の人事天然を見たその見方に興味があるといふので、作品そのものが持つた獨立した客觀的價値はそれに望むことは出來ないのである。更に言びかへれば、實用的の分子も含んで居れば、歴史的の面白味もその中に含まれて居るのである。

だから事實の精確と言ふことが、小説などとは餘程意味が違つて來る。紀行

文では、其精確不精確が實用的で、實際の事實と全く相連關して居るのに反し、小説では、實用的に害はなくとも、その精確不精確が獨立した作品そのものに破綻を來して來る。一は即いて居る。一つは離れてゐる。

描寫と言ふことは、以前は叙事抒情にも用ゐられるやうに漫然思つて居たらしいが、嚴密に言つて來ると、描寫の氣分は客觀的文藝でなければ完全に出て來ないといふことが出來る。紀行文や寫生文の中に、非常に精巧な描寫があつても、それは矢張叙述のすぐれたもので、獨立した描寫の氣分は受けることが出來ないものである。描寫の氣分は、其文章が後に何等の實際的補助を有することなしに、獨立した境に至つて、初めて完全に味はれて來るものである。

二

日本にも名高い紀行文はかなりにある。『更科日記』あたりには殊に古い名高

いものである。德川時代になつてからは、淺井了意の『東海道名所記』貝原益軒の『西北紀行』太田南畝の『改元紀行』など殊に著名だ。其以前にも、准后道興の『廻國雜記』源光行の『海道の記』宗長の『東路のつと』などがある。漢學者の漢文で書いた紀行も隨分ある。

橘南谿の『東西遊記』は紀行文と言ふよりも旅の話を書いたもので、前に掲げたものとは、紀行の形式に於て餘程變つてゐる。むしろ紀行文の變態と言つても好い位である。第一行程を明記して居ない。次におもしろい風俗や物語だけを選んで書いて、其土地々々の狀態を書いて居ない。だから紀行文としては讀者はその話の中から、骨折つて其の旅跡をさぐつて見なければならない。芭蕉の『奥の細道』これも名高い紀行文である。しかし矢張行程を詳しく書いたといふことは出來ない。土地々々の狀態を描いたといふことも出來ない。俳諧の詞書にすぎないと言つたやうなところすらある。

今日私達が昔の紀行を讀むとする。第一に興味を感ずるのは、其文の中にある地名である。其地名を記した處に古人の足跡を確實に認めることが出來る。また其地名とそれに關した記事とに因つて、昔と今日の相違をみとめて、一種言ふべからざる興味を感ずる。これに因つて、紀行文は實際的歷史的から來る興味が主であるといふことが分る。今の人の書いた紀行文でも自分の行つて見た處とか、これから行かうとする處とかは興味があるが、見ない所は比較的興味をひかないものだ。かくまでに紀行文は實用的の分子が多いものである。

萬葉時代に富士山に登つた紀行があつたら、さぞ面白いだらう。今日山岳會の人達がするやうに山を研究したものが其時代にあつたら愉快だらう。私達は紀行文を見るとすぐかう實際的に考へる。受ける興味は皆な實際的である。

山岳會のやつて居る仕事、またそれを記した記事、それを見ても、矢張さういふ風に考へる。それは文章が旨ければ、それに越したことがないが、それよ

りも一層精確なる事實を欲する。つまり主觀的なのである。客觀的價値といふことは始めから重きを置かれないやうな性質におかれて居るのが紀行文の本來である。

記事よりは、物語が一歩を進めてゐる。物語よりは狀態描寫が更に一歩を進めてゐる。狀態描寫よりもまことの描寫の氣分の達するといふことが、更に一歩を進めて居る。

だから西洋の紀行文と言へば、探檢とか地理探究とか言ふことが主になつてゐる。文學的紀行文はあつてもさう餘計にはない。そしてその文章は皆な記事である。叙述である。

三

明治になつてからの紀行文には、露伴の『枕頭山水』麗水の『ふところ硯』其

他、桂月の『一簑一笠』其他、烏水の『扇頭小景』『日本アルプス』其他、乙羽の『千山萬水』天隨の『檜木笠』などがある。吉江孤雁の『旅より旅へ』『高原』などもこれに屬する。坪谷水哉の『山水行脚』もまたこれに屬する。

この中で種類を略四つに分けることが出來る。旅行を其まゝ書いたもの、即ち『枕頭山水』『一簑一笠』『ふところ硯』『扇頭小景』のごときもの。次にやや案内記の臭味を帶びたもの、即ち『千山萬水』『山水行脚』のごときもの。次に自己の抒情を以て主としたもの。即ち『旅より旅へ』『高原』のごときもの。次に地理的探檢に旅行の趣味を加へたやうなもの、即ち『日本アルプス』の如きもの、先づこの四つに分けることが出來る。

『旅より旅へ』の著者のやうに、抒情を專らにしたものは、主觀的價値より客觀的價値に向つて進まんとしつゝあるやうなもので、これは事實そのものよりも感興と文章とを主としてゐる。人事ならば、人事の外面よりも内面に入らう

としてゐるし、天然ならば、その天然と自己のその天然に對する印象とを成るべく分明に出さうとしてゐる。つまり主觀的要素を條件にした紀行文を以て、客觀的價値を條件にした小說的描寫を試みんとしつゝあるのである。

しかし私達の經驗では、作者が一人稱で書いて、しかも作者と其一人稱と同一の位置に立つて居る場合では、到底その目的を完全に達することが出來ないと思ふ。日光の山と書けば、それで好いものを、日光の山とは書かずに實際の山を細かに描寫したとて、それが紀行文を讀む讀者をどれだけ滿足をさせることが出來るか。またその山の實際の描寫がどれだけ紀行文の讀者の頭に明かに映つて行くか。往々にして、その細いすぐれた描寫が、一句の說明にすら及ばないやうなことがないでもない。

『旅より旅へ』の著者は、細かに行屆いた筆を持つて居る。やさしい情味にも富んで居る。夕日を描き、高原を描き、北國の雪を描き、更に進んで到る處の

空氣をも描かうとしてゐる。しかし私に言はせると、筆はまだ正確でない。動搖してゐる。そしてその動搖は知識の感情に蔽はれたところから起つて來る動搖である。多情多恨の人が多情多恨を書いたとて、それが十分に出て來ないといふやうな動搖である。

空氣と言ふことは、言はゞ漫然たる感じである。其時々々の心持が非常にそれに影響する。その影響をそのまゝ書いたとて　それで實際の空氣は出て來るものではない。一度行き、二度行き、三度行つて、知識が感情に蔽はれないやうになつて、始めて其の地特有な動かない萬人行つて見ても成程と點頭く空氣が出て來るのである。その正確を『旅より旅へ』の著者は缺いてゐる。けれどもしこれが事實を主としない客觀的文藝なら、さう大して缺點にはならずに、或はその感情の生々した點が却つて其作品の持つた價値となるかも知れないけれど、嚴乎として事實の存在を後にする紀行文では、往々侮慢を招く材料とな

ることが多い。

四

『枕頭山水』は明治の文壇で出來た紀行文の中で、最もすぐれて居るものゝ一つである。それは出た當時にもさう思つたが、今でも矢張さうだ。露伴はその頃でも知識と理解とに富んで居た。

この作者は粗なところは粗に、密なところは密にと言つたやうな文章のコツをよく知つてゐる。旅をしても、他の旅行家のやうに何處も彼處も感情で面白がつて見るやうな弊がない。紀行の中に挾んだ物語も要を得て居る。抒情も誇張されてゐない。

「易心後語」の中の岩手山登山の條などは、作者と事實と巧にくつついてゐてまことに叙事の妙を得てゐる。下北半島を馬で行くところなどいかにも旅らし

い。それから「地獄溪日記」などもよく書いてある。山水の見方にも獨斷がなくつて好い。

けれど露伴は『枕頭山水』一卷の他、すぐれた紀行文を書いたことがない。乙羽と共に東北を旅した紀行其他「秩父紀行」などもあるが、いやに考證に捉へられたやうな形になつて了つてゐる。

麗水も紀行文を隨分多く書いた。この作者が報知社にゐて、思軒門下の四天王の一人に呼ばれる頃には、今にどんなに豪い作者になるか知れぬと思はれてゐた。その頃には、その文章が非常にフレッレな匂ひを持つてゐて、清新豐富な文字は他に類がないとまで言はれてゐた。殊に一山一水を描くに長し、德富蘇峯のごときもこれを激賞した。『富士の高根』『松島遊記』など殊に名高いものである。しかし段々其文章が内容に離れて、難かしい文字が徒らに目に立つやうになつて來た。此作者の紀行文は紀行を見せるのではなくて文章を見せるの

だと人から思はれるやうになつて來た。そればかりではない、後には其文章も生氣を失つて型に入つて了ふやうになつた。

山を記しても、川を記しても、それが皆な同じ叙述で同じ形容である。空氣どころか、カラーさへも出て居ないやうなものが多い。つまり此作者の興味中心は旅を旅として娯むにあるので、唯單に旅に出て知らない土地を踏むのが愉快だといふ風だ。そしてこの快樂が昔の文人の旅に出た時の快樂に似て居る。抒情も今の青年には氣に入りさうにもない。

かれの紀行文には、案内的臭味もなければ、地理的研究もなく、抒情的印象もない。唯作者が文章を書くために歩いて行くやうなのが眼に立つばかりである。感じが文人畫風に似てゐる。しかし俗でないことは此作者の紀行文の長所である。

桂月の紀行文は天眞爛漫を極めてゐる。『一蓑一笠』を始め、短かいものでも

皆なそれ〴〵特色を持つてゐる。勿論、文章の種類から言ふと新しい方ではない。『旅より旅へ』の著者などゝ比べると、確かに一時代違つてゐる。清新な抒情とか感興とか觀察とかを其中に求めることが出來ない。また一花一草にも心を移すといふやうな細緻なところもない。しかしいかにも天眞流露である。筆が純な人情の上に打立てられてゐる。讀んで其人の如しといふのは、桂月の文のごときものを言ふのであらう。妻子を出雲に迎へに行く『迎妻紀行』といふ紀行は中でも最もよく出來てゐる。

桂月の文章は『花紅葉』時代には、また餘程和文の形式に捉へられて、思つたことも十分に出て來ないといふやうなところがあつた。『八鹽のいでゆ』などといふ紀行文は旨いには旨いが、またいくらかさういふ臭味が殘つて居る。それが段々年を經るに從つて、今迄押へて居たものがグングン出て來た。今ではかれには何んなことでも顏赤くしないで書くことの出來るやうな自由な空氣が

出來て來た。其處に盡きない旨味がある。

それに文體の自由、それをかれは始めから心がけて居た。かれの文ほど自由で、物に束縛されないものはない。かれの文章は普通の言文一致よりもかれに取つて自由に見えるところがある。叙事、抒情行くとして可ならざるなきはかれの文章だ。

しかしかれの文章は人情の上に打立てられてある。作者と其人格とが即いて居るところにかれの價値がある。かれは一歩も自己を離れて事象と見ることが出來ない。これがかれの客觀的價値を主とした小説に入ることの出來ない所以である。

露伴が隨筆を書くやうになつてから、小説が出來なくなつたのも、矢張さうした即いた作者の氣分にある。

桂月の紀行文は俗にして俗でないやうなゝ處がある。かれは俗を嫌つて居

ない、また避けて居ない。地理研究といふものはないが、事實はいつも精確に書いてある。旅行の伴侶とするに最も適してゐる。

天隨は一時桂月と肩を並べたことのある紀行文家である。足跡の廣いのは、今の紀行文家中隨一であるかも知れない。『檜木笠』などを讀んで見ても、青年の客氣にまかせて、隨分無理な旅行をやつてゐる。桂月は其文章に和文脈が多い、天隨には漢文脈が多い。そして桂月より文致が乾いてゐる。

桂月よりは餘程厭味がある。俗臭紛々たるこころがある。抒情に於ても、たとへ抒情が清新ではないとは言へ、桂月に於ては、眞情惻々として人を動かすところがあるが、天隨にはさうしたところがない。天然を叙する筆に於ても、細かくない。感じ方も冴えて居ない。

五

乙羽の『千山萬水』は、作品としてはさう評判のあつた書ではないが、賣れることは非常に賣れた。紀行文集の中で一番賣れたと言つても好い位である。

旅行者の伴侶――さういふ意味で賣れたのである。乙羽の趣味は淺俗だが、割合に偏つて居ない。一般の俗趣味を代表してゐるといふやうなところがある。それに歩いた範圍が廣い。案内、手引と言つたやうな便利がこの書をして數十版を重ねしめたのである。

案内記に似た記事は、文章の上から言へば、甚だ取るに足らぬことだが、紀行文にはさういふ記事は必要である。何處を歩いて居るか知れないやうな抒情味の勝つたものはそれは紀行文よりはむしろ抒情に屬すべきものである。若い人達には面白がられるが、一般には通じない。

坪谷水哉は紀行文家として『千山萬水』系に屬すべき人である。趣味は矢張通俗すぎるが、旅行の範圍が廣く、人事風俗の比較が正確であるが爲めに、旅

行者の伴侶としては非常に便利なところがある。『山水行脚』を讀んで見ると、さういふ意味に於て、くだらぬ感想的紀行文よりは餘程面白い。

饗庭篁村の旅行記は、今は餘り見たことはないが、昔はよく出たものだ。一風變つたもので、一九の膝栗毛あたりから系統をひいて居る。洒落れたかけ言葉の多い文章で、丁度若い人達が空想的抒情をのべずに遣ると同じやうに、駄洒落と惡落ちと食物の詮議とで充たされてある。一人の江戸ッ兒の酒呑みの輕口の爺さんが、汽車や汽船のない時代に旅行したと同じやうな調子で旅行してゐる。そこが鳥渡面白いと言へば面白い。それに變つても居る。

一九の『膝栗毛』はあれは矢張一種變體の旅行記であると言へる。あれを書くために、無論著者は其土地々々を旅行してゐるし、輕い誇張した文章の中に其土地特有のカラーも書いてある。あれの當時の人氣に投じた大きな理由は、萬人の旅行する東海道を舞臺にしたからで、今想像しても分るが、其時分の東

海道は、あらゆる設備に於て交通の複雜を極めてゐる。今では鳥渡例を引くに困る位の賑かな複雜した色彩があつたに相違ない。其處には幾多のストオリーが重つて渦をも卷いて居れば、幾多のアドヱンチユアが日毎に盛に行はれもした。人間と言ふものは旅に出ると、存外思ひ切つたことをするもので、家鄕に居ては敢てしないやうなことも平氣で遣る。そこが面白い。一九は『東海道名所記』あたりから思いついて其處をねらつて書いた。

西鶴の『一代男』も半は旅行記になつてゐる。世の助と作者とは餘程離れて書いてあるから、普通の旅行記と言ふことは無論出來ないが、それでも著者の目擊した觀察に成つたらしい描寫が處々にある。そしてそれが細かい生々した筆で書いてある。

通俗な考へを以て旅行記を書くといふことは必要であると思ふ。今の紀行文家には高いところと低いところがあつて、中の部に位して居るものが乏しい。

小說ではないから、到底完全な客觀描寫は出來ないにしても、もう少し觀察を鋭敏にし豐富にして、萬人が皆な點頭くやうな觀察をしたならば何うか。其處には新らしい紀行文の起つて來る餘地が十分にある。

六

烏水は『扇頭小葉』『雲表』などを出して、段々山岳趣味に傾いて行つた。今では地理學者のやるやうなことをしてゐる。『日本アルプス』は紀行文といふよりは地理研究に近い書である。

地理研究と言ふ方から言ふと、中々立派な仕事をして居ると言つて好い。文章が旨いから、書いたことが決して乾燥無味にならない。乾燥無味になるべき科學的報告見たいなものでも乾燥無味にならない。山岳の研究も中々他人には出來ないことをやつてゐる。

忙しい中に居て、それから山岳の空氣の中に入ると、言ふに言はれない慰籍と憧憬とを感ずる。烏水はある時かうしたことを言つたやうに覺えてゐる。地理學者のやうに職業にして居ない處に熱心と生氣とがあるのは當然だ。しかし熱心と生氣とから更に今一歩離れて來なければ、何でも藝術味と言つたやうなものは出て來ないものである。烏水の文章にはまだ離れた味といふものを發見したことがない。

雲を研究するとか、山を研究するとか言ふことは、スケッチ風にやつて行けば非常に有益なことに相違ない。また天然といふものを人事を離して單獨に研究するのも意味の多いことだ。地理學者の乾燥な研究に任かせて置くことは出來ないやうなところがある。しかし天然と人事と交錯した處には、一層深い細い色彩と空氣とがある。單獨なる天然地理の研究は地理學者に任せておいても先つ出來ないことはない。私達は烏水が才と文とを地理的研究に浪費するを惜

むの念に堪へない一人である。

なにがしの書いた紀行文に、飛驒の山中の跋渉を記したものがある。都會の忙しい中に居る自分が萬山の山の中で電車のことを考へたり何かしたといふことを書いて居た。山岳の跋渉もさういふ風に自己の生活を影にするといふやうになつて來ると、其處に意味が出て來るが、『日本アルプス』『續日本アルプス』には、まださういふところがない。多くは山岳に對する自己の憧憬であるやうである。

烏水の文は才に富んで居る。何方かと言へば柔かい方ではないが、スッキリとしてゐて、讀んで氣持が好い。それにかなり眼に映じたものの特相を描き出す力を持つてゐる。これで、桂月のやうな暢達と自由とを得たならばといつも思ふ。

正當な意味から言ふと、烏水の近頃の文章は、旅行記、紀行文と言ふよりも、

天然地理を說明した文章である。

『東西遊記』のやうな旅の物語では無論慊らない。『千山萬水』のやうな淺俗な旅行記では更に一層慊らない。『旅より旅へ』のやうな抒情風のものでもいけない。もつと人事にも近く、天然と人事との交錯を詳しく觀察した旅行記、さうしたものが欲しい。

諸家文章短評

（明治三十九年頃に草せる）

一　森鷗外

鷗外漁史の文章は莊重にして謹嚴、最も論文に適して居る。それに學殖に富んで居るので、自づから渾厚の趣がある。往年、千朶山房に論陣を張つた頃は、千萬言立どころに成るといふ風で、實に明治文壇の偉觀であつた。小說には其文致が少し堅過ぎる。飜譯としても、妙手には相違ないが、原文の實際の調子を出さうとするには不自由であるらしい。言文一致に就ては、二三の試作を爲たやうだが、孰れも成功は爲なかつた。『洪水』といふ飜譯なども二葉亭に比べ

ると、其自由な點に於て餘程落ちる。『染ちがへ』なども今の言文一致から見れば幼稚なものだ。

二　德富蘇峯

飽まで才の文である。近頃では餘程質に注意して來たやうであるが、矢張陰には才情が横溢して、それを押へ切れないといふ風がある。そして才がいつも邪魔をして、時々輕薄といふやうな感を起させる。それに新聞記者の態度として常識を守本尊にして居るのは好いが、趣味が何うも其處からばかり出て來るので稍々淺い憂がある。けれど文章としては立派なものだ。さう大して彫琢もせぬ相であるが、描寫造語などにもそつが無く、新しい言語を巧に調和させる技巧はすぐれたものだ。此人の文章はいくら平淡の境に進んでも、全く乾燥無味になつて了ふ恐れはあるまい。

三　大町桂月

桂月の文は飽まで自然を旨として居るらしい。彫琢の痕が無い、技巧の痕が無い。何でもかまはぬから行く處までは行かうといふ意氣込がある。けれど支那流の倫理觀と日本の武士道との爲めに、何うかすると行く處まで行けずに居ることがある。これは氣の毒だ。從つて皮肉な分子に乏しい、皮肉なつもりでもそれがねつから皮肉になつて居ないやうなことがある。桂月の文は叙事に長じて居る。辨難攻擊の文は稍々上手だが、正面から行つた議論は餘り得手とは言へない。滑稽趣味の文も近頃頻りに試みて居るが、何うもこれも餘り無意味過ぎるので感心が出來かねる。かれの文は矢張叙事文が好い、紀行文が好い。

四　幸田露伴

ギイ・ド・モウパツサン

露伴の文は最初から客觀をぬきにした主觀の色が多かつた。『風流佛』然り、『對髑髏』然り、『新浦島』然り、『五重塔』然り、いつも作者の主觀が中心になつて居た。近頃、愈々其特色が加つて來たやうだ。潮待草などを讀んで見ると、作者が此の人生の千變萬化を觀察して得た結果の上に打建てた人生觀と言ふよりも、作者が自己の性格、性癖に由つて得來つた主觀といふやうな立場に居て此人生を視て居る。昔の儒者が門生に敎へるといふ態度である。成程、これでは小說に筆を着ける餘裕があるまいと思つた。トルストイなどもかういふ行き方から、文藝の道を捨てゝ了つたのだ。惜しいことだ。

五　二葉亭四迷

言文一致の開山だけあつて、宛轉滑脫、實に旨いものだ。近頃殊に平淡の境に入つて、愈々及び難い。けれども難を言ふと、餘りに輕過ぎる、餘りに洒脫

過ぎる、何だか人をちやかして居るやうな處が見え透く。露西亞文學は今少し眞面目な筈だ。今少し暗い色が其背景になつて居る筈だ、敢て露西亞文學者だから創作もさうなくてはならぬと謂ふのではないが、今少し重い處があつても好いと思ふ。

六　江見水蔭

水蔭の筆は描寫の細緻を以て硯友社同人の中に鳴つたものだ。文は拙いが、書いたことに生命がある、箇人性が多く出て居ると言はれたものだ。詩的の筆情緒多い筆として推されたものだ。また、當時日本唯一の短篇作者として自らも大きな抱負を持つて居た。實際、水蔭の文は硯友社の文ではない、紅葉山人の惡影響などは爪の垢ほども受けて居ない。總て皆な自己の苦悶の影であつた。唯惜しいことには、此人には芝居氣がある、好奇心が強い。めづらしいことに

は、他から見て呆るゝほど熱中する。從つて思想が誇張される、筆が誇張される。何うかしてこの人の文から此癖を除きたい。そして今少し冷酷に人生を見て貰ひ度い。

七　幸德秋水

蘇峯三叉以後、論文を以て鳴るものは多いが、幸德秋水の如くしかく縱横自在なるものは無い。殊に及ぶべからざるは、才情煥發して、中に無限の渾厚なる趣を藏して居ることだ。何處かかう優しい處がある。悠々たる處がある。理を盡して足らず、更に情を盡すといふ趣がある。其主義意見も皆な內容があつて他の所謂社會主義者流の如く、沒分曉でない。輕浮でない。兆民居士の高弟だけあつて、何處かかう超脫したところがあるのかも知れぬ。かれの文を讀むと何だが社會主義者流の中に埋沒させて置くのが惜しくなる。

八　三宅雪嶺

雪嶺の文名は嘖々たるものだ。成程旨いに相違ない、かれて居るに相違ない。けれど何うも滋味が無い。何だか干物でも食ふやうで、嚙しめて居ると味は出るが、生を食つたやうな譯には行かない。それに、馬鹿に理窟が多い。趣味が餘り廣くない。蓋し其性格學問から來て居るのであらう。桂月と雪嶺とを比べて論ずる人もあるが、これは達意で冗漫な點が似て居るばかりで其文質と文品とは全く違ふ。桂月は情の文、醉者の文、雪嶺は理の文、覺者の文。けれど聞く所によると雪嶺はよく時事に通曉し、いかなる政界の小潮流をも見逃すことなく、且つ非常に公平な態度を以てこれに臨む、と。公平は誠に然らん、時事に通曉するは疑はし。

九　夏目漱石

俳人の文たることは爭はれぬ。けれど其趣味はまだ決してすぐれたものではない。雜駁でそして幼稚だ。興味中心であることは一頁讀んで見ても解る。誰かが近頃正太夫に似てると言つたが、皮肉といふものを拔きにすれば或は似て居るかも知れぬ。つまり正太夫の正太夫たらざるところが似て居るのだ。それに、行き方は違つて居るが、鏡花の文章に似たところがある。けれど鏡花にはまた何處か光つたところがある。漱石は徒に剪裁の巧に誇るばかりだ。低徊趣味とは何ういふことを言ふのか知らぬが、虞美人草にも、猫にも、坑夫にも餘りさういつた趣味はありさうにも思はれぬ。文章としても疵の多い文章だ。けれど新派の文章であることは拒まれぬ。今の青年の文が硯友社の型に入つたのから脱して、一味清新な語法を用ゆるに至つたのは、猫、坊ちやんなどが與つて力あることは吾輩も認める。

十 小杉天外

天外の寫實主義は文壇の一産物である。けれどかれは寫實といふことを餘程狹く取つた。畫家が實物を寫生する意味にのみ取つた。『はやり唄』でも、『魔風戀風』でも飽まで平面寫實である。主觀を背景に置かない純客觀である。從つて外面描寫の成功した物には、非常にすぐれた處がある。寫實と稱して實は觀察も描寫も無い柳浪などの到底及ぶ所ではない。けれど小說は繪畫ではない、人間の心の千變萬化は、自然物の靜止的のものではない。天外の主唱したといふゾラの寫實にも決してかうした平面寫實ばかりではない。ゾラが人間を取扱ふ調子は、丁度この大宇宙に引懸つて居る餘計なもの、邪魔な物と言つた風な處があると、ある批評家が言つたが、かういふ人がゾラ其人の主觀なのだ。ゾラは決して平面描寫にのみ安んじた人でない。天外の文章は流暢で、癖が無く

つて、最も小說の文章に適して居る。會話も中々手に入つたものだ。唯冗漫なのが惜しい。

十一　小栗風葉

紅葉山人の艶麗な筆を傳へたと評判されるほどあつて、實に旨いところがある。けれど何うかすると、文章が內容に勝つことがある。文章の妙で人を魅して了ふやうな人がある。これは確かに餘りに文章を文章として學び過ぎた此人の弊だ。とは言へ、短所は長所で筆に非常に複雜した滋味がある。唯書いたばかりでなく、周圍の細かい感情も其人物其事件に伴つて出るといふ趣がある。『解脫』などをよむと、此長所がよく解る。けれど此長所を此位で留て置かぬと、すぐ短所になつて了ふ。『天才』や『戀覺』のやうな比較的フレーンな書方も好いが、何だがかうして了ふのが惜しいやうな氣がする。近頃ダヌンチオを

讀んで、大に發明する作があつた相だから、將來の文章に必ず見るべきものがあるであらうと思ふ。

十二　山路愛山

史論は評判が好い。少し獨斷的の作も見懸けるが、何しろ根柢があるので確かなものだ。論文は雄健で、千言立ろに成るといふ風がある。惜むべし、純文學に就ては何等の智識もない。曾て北村透谷と人生を論じた時もさうであつたが、詩を經世的眼光で批評するのだけはやめて貰ひ度い。今は三歲の童兒でも社會と純文學との區別位は知つてる時代だから。

短篇小説の話

短篇小説の話、それは鳥渡面白いですな、と言つて、別に太した話も持つて居りませんが、御需に應じてお話して見ませう。

短篇小説は何うも書くのに骨(コツ)があるやうです。長篇を書くやうな氣でこれに臨んでは勿論好けませんし、それに其才分が短篇に適して居らんければ、何うも卓れたものが出來ぬやうです。其作者の趣味が小さい事件にも面白味を發見し、又は物を細かく見るやうな人でなければいかん。長篇ならば、いろ〳〵叙述をも遣ることが出來るし、感想をも書くことが出來るが、短篇にはその餘裕

がない、短い紙幅の中に無限の烟波をつゝむといふ風に遣らんければならんのですから、見たこと聞いたことを只長々と叙述して居る譯には行かん、省略をもしなければならんし、側寫も爲なければならんし、反寫法をも用ひなければならん、それから言葉も大に簡にして明かなるを要するのです。

短篇には殊に背景が必要です。背景が無い短篇は殆ど見るに堪へん。丁度茶席懸の幅を密畫で遣つたやうなもので、興味が索然として了ふ。つまり一を畫いて十を知らしむるといふ一種のフロットを用ゆる必要があるのです。

けれどフロットと申して、所謂結構ではない。人爲の結構は長篇短篇の別を問はず、私のやうに自然主義を奉じて居るものには禁物である。けれど自然にも結構がある、結構だか何だか知らんが結構のやうに見えるものがある。ある事件の發展を見ても、又、ある性格の變化を見ても、必ず一種結構らしいものがある。そして此結構は人爲の結構の甚だ小主觀的なるに反し變化を極め、複

雜を極め、混亂を極め、千變萬化殆ど端睨すべからざるものがある。そして其中に整正、諧調、溫和などといふ趣をも具へて、飽まで人をして其全部を窺ひ知らしめないやうな自然な處を備へ居ります。この結構を巧に感得して、よく人事と自然との關係を見得れば、それで立派な小說が出來上るのであるが、短篇を作るの骨は、この大結構の一端を捕へて、巧に其背景に其の全部を示すといふ風にするのが第一であらうと思ふ。

早い話が、諸君が電車に乘る、郊外を散步する、ある一家庭の一員となる、或は晴れた日であるとか、曇つた空であるとか、雨の夕だとか、月の夜だとか何でも宜しい、兎に角ある事を遣つたとする、即ち其事は其事と其時の光景と其作者の自然の見方の高下如何とによつて說明するより外に途はないので、其作者が自然の大結構を忠實に緻密に觀察し感得し得るの天分と才能とを有して居る以上、其事實は何んな平凡なことでも立派に一篇の短篇小說を成し得ると

私は信じて疑はないのであります。私は懸賞小說を選んだことがありますが、これが大抵はこの短篇の骨を忘れて居る。無闇に人爲の結構を施して、自分の見たこと感じたことなどは少しも書いてなく、誇張したものが多く、白粉澤山のものが多く、でなければ只々文章を花やかに綺麗にしさへすれば好いと思つて居るらしい。ですから、この懸賞小說には、殆ど見るに足りるやうなものが無い。

短篇小說に限らず、前に述べた自然の結構に正しく觸れると言ふことは、作をする上に最も必要なることでありますが、短篇は短いだけに、一層この客觀的觀察を十分にしなければなるまいと思ひます。

日本では先づ西鶴が第一の短篇作者でせう。『好色五人女』にしろ『好色一代男』にしろ、皆な實際社會を材料にした立派な短篇で、一つ〳〵離して味つて見ると、實に驚嘆に値ひするやうなものがあります。それに『胸算用』『永代藏』

など元祿時代の商人の寫生と申しても好い位で、其の觀察の機敏なこと、細緻なこと現代の諸大家の作も遠く及ばぬといふ感があります。『本朝二十不孝』にもさういふ種類のものが多く、佛蘭西のモウパッサンにも匹敵するに足りるのは、此の元祿の作家です。それに、最も面白いのは、西鶴の文章には結構がなく結末がないといふことです。人生の一面を捉へ來つて、縱横に其眞相を穿ちそして自分は敢てそれに解決を加へず、見る人の心々の判斷に任せるといふ風があります。これが自然主義から見て西鶴の近松以上である所以で、近松には同じ元祿の社會の描寫でも、かういふ自然なところはありません。近松の戯曲でも元祿の衣のかをりを嗅ぐことは或は出來るかも知れませんが、其肉體の臭氣を嗅ぐには、西鶴でなくては駄目です。

西鶴は短篇作者として實にあらゆる資格を備へて居る。結構なく結束なきこと、これ一つ、觀察に富み背景に富みそれで居て文字が簡潔なること、これ一

つ、更に及び難いのはかれが自然に觸れる力のいかに正しくいかにすぐれて居つたかといふことである。私は此間、『胸算用』を讀んで居ると、題は忘れましたが、淀川の乘合船を年の暮に觀察したといふやうなものがありました。いつも笑聲の絶えぬ乘合船、それが大方節季の遣繰に當惑して居るので、誰も彼れも腹でも立てゝ居るやうにひつそりして、波の音ばかり寒く聞えるといふ具合、それから段々と身上話、此の節季の越し難い苦しい物語などが出て、銘々の境遇、性質などを實によく巧に書き分けてありました。實際、日本で西洋に匹敵するに足りるやうな短篇作者は此人でせう。

明治になりましては、一葉女史の作が——或は短篇と言ふべきものではないかも知れませんが——餘程この西鶴の面影を傳へて居ると思ひます。

それから短篇作者としては、江見水蔭氏が一種の才筆を有つて居ると思ふ。實際氏は短篇には深く趣味を有つて居るので、『炭燒の煙』など其結構に多少の

不自然はあつたにしても、餘程短篇としての面白味があると信ずる。其他其短篇集『水車』『戀』などの中にもすぐれたものがく尠ない。

それから柳川春葉氏の短篇にも忘られぬ味がある。

西洋には、短篇作者が多い。それに種々の傾向、種々の主義、種々の流派があつて、ロマンチックの作者もあれば、自然主義の作者もある。けれど現代の批評では、佛蘭西でドオテエ、少し下つてコッペエ、更に大きくなつてモウパッサン、獨逸では稍々舊派に屬しては居るが、パウル、ハイゼ、それから、モウパッサンの流を汲んだパインツ、トオフオテ、露西亞ではアントン、チエホフ、マキシム、ゴルギー。米國ではブレット、ハートなどが其のすぐれたものとしてある。

アルフオンス、トオデエは、自然派の作家で、後に長篇をも盛に作つたが、其價値は依然として短篇作家たるにあるので、長いものではゾラやツルゲネフ

やフロオベルなとに敵はぬ。けれど短篇にかけては、實に巧みなもので、其の彩ある筆、其面白い觀察、其の同情に富める思想、何となく南方フランスの空氣に觸れるやうな氣がする。就中普佛戰爭に關しての短篇に面白いものが多い。コッペエは戲曲家で、史劇には可成り大きいものがあるが、其短篇もまた獨特で、トオデエに比べると、一層巴里式の新しい處があるとの評判である。この二作家の筆はいかにも近代的で、空氣の陰影と光線とを巧に書き分けたやうな好い氣が致します。

モウパッサンになると前二作家に比して、驚くべき奔放、驚くべき諷刺、驚くべき描寫、驚くべき香氣と臭氣、驚くべき得意と失意、殆と嫌厭の念を起す程に露骨に描いて居る。そして如何なる事件を描くにも飽まで簡潔にして明快なる短篇の約束を守つて居るのは面白い。此人などは實際最も多く短篇作家の資格を備へたもので、其二三の長篇も其描寫法は全く短篇式であるのは、注意

すべきことであらう。

獨逸のハウル、ハイゼ。今年七十二三位と思ひます。鷗外漁史が洋行して居た頃、第一流の作家であつたさうで、其作品は其文集に二つ三つ飜譯してあると記憶して居ります。此人は無數の短篇を作つた人で、其全集は二三十卷もあると覺えて居る。自然派ではないが、中には隨分面白いものがある。小金井君子女史の飜譯した『うき世のさか』など面白いものゝ中でせう。

ハインツ、トオフオテといふ人はハイゼなどより餘程若い人で、獨逸の新派の一人ですが、此人も短篇作者としては中々有名で、モウパッサンの明快なる筆を學んで、獨逸の社會を描寫した。

露西亞のマキシム、ゴオルギー。この人も短篇作者としては名高いもので、モウパッサンなどに比べると、一層主觀に出で、其思想も議論も甚しく露骨に出て居て、ロオマチック派の人が見ると、或は恐しく思ふかも知れぬ位である。

飽まで積極的で、五十年以前の露西亞の作者の絕望的なるに比して頗る異彩を放つて居る。チエホフはこれに比べると、稍々モウパッサンに近い。幽欝ではあるが、描法がいかにも明快で、いかにも客觀的になつて居る。モウパッサンとゴルキーの中間にある人と言つて好い。

米國では餘り評判せぬが、カリフオルニヤ短篇作家ブレットハートの名聲の大陸に持囃されるのは面白い現象です。ことに、獨逸あたりでは立派な短篇作家として尊んで居るらしい。カリフオルニヤ山中に住むこと十數年、或は鑛山を描き、或は田園を描き、或は農夫を描き、いづれも其の地方のカラーがよく出て居るので、寫實派全盛の大陸文學の讀者に迎へられたのでせう。

それから希臘に、ビケラスといふ作家がある。此人の短篇は、餘り日本に知られては居らぬが、餘程面白い。例の希臘の島の多い風景の好い地を舞臺にして、そこに住んで居る民の小さい生活のさまを巧に描いてある。讀んで居ると

何だかかう言ふに言はれぬ美しさと優しさとを感じて、新しいロマンチックの情が湧き返へるやうに胸に起る。そしてそれが古代希臘の思潮の影響を更に受けて居らぬところが一層面白いと感じた。此人の短篇は今少し讀んで見たいと思ひます。

短篇作家として私の感心したのは先づこの位。英のヨセフ、コンラードなど讀んで見ましたが、餘り新しいとも面白いとも思ひませんでした。

明治の文壇でも此頃は大分自然といふことに眼を附けて來たらしく、短篇なども、其描法に於て、觀察に於て、餘程進んだのは申すまでもありますまい。人爲の結構にのみ齷齪して、餘り氣の多い、當て氣澤山の作品は、次第に跡を絶つて、少くともまことの人生に觸れたやうなものが出來るでせう。私は此意味に於て友人國木田獨歩子の短篇が比較的最も多くモウパッサンや、チエホフや、ゴルギーの脈を得て居ると思ひます。（明治四十年）

フロオベルとゴンクール

人生と藝術家との間に起る苦闘――それを私は最も明かにガスタブ、フロオベルに見た。渠は寂寞たる五十八年を書齋に引籠つて、重荷を負つた競走者のやうに、辛い〳〵努力に其日を送つた。

渠は自から聲を擧げて、原稿を讀んだといふ。調子の整ふまでは、幾度も倦まずに文章を書更へたといふ。文句の組合せには殊に深く注意を拂つて、出來るだけ感じを現はすことにつとめたといふ。かくして絶えざる勞働と、絶えざる煩悶と、絶えざる絶望とは常に續いた。

毎日十時間の勞作、それが二十年と謂へば隨分長い努力である。そして其結果は僅かに四種の長編と三種の短篇！

渠がある婦人に與へた手紙に、かういふことが書いてあつた。『我等藝術の憐むべき勞働者よ！。普通の人々にはしかく簡單に自由に與へられるものも、我等には何故に容易に許されぬであらう！　それも理である。普通の人々は眞心を持つ！　我等は遂に其眞心の何物をも有たぬ。我等は到底理解されざる人間……Gsisette で、そして Troubadour の昔の夥伴の最後の生存者……』

普通の人は眞心を持つ！　我等は遂に眞心の何物をも有たぬ。何等深き藝術の苦闘！　私はフロオベルの矛盾と寂寞と勤勉との意味を其處に發見したやうな氣がした。そして飜つて考へた。眞心の何物をも持たざる所以は眞心の總てを持つ所以ではないか、と。

かれは戀を避け、世を避け、社會を憎み、道德を憎み、習俗を排して俗惡極まるものとした。かれは眞心を持つことをさへに敢てせぬ程に自由の翼を欲した。藝術の自由の翼を得て自由に空に飛ぶことを欲した。

渠は望み通りに、自由に空に飛ぶことが出來た。けれど其空は荒漠として居た。花もなかつた、樹も無かつた。かれの勤勉は其寂寞を醫す爲めの勤勉であり、かれの努力は其の單調を破る爲めの努力であつた。理解されざる心、滿されぬ難き希望――其の進んだ路は荒涼たるものであつた。

かれは其少年期をロマンチックスクールの全盛時代に過した。當時、習俗を排するの風が盛であつた。テオヒル、ゴオチェが赤短表衣を着て、態とらしい一種の調子のある演說をした。かれも其時代の感化を受けぬ譯には行かなかつた。廣く緣取つた大い帽を冠り、恐ろしく廣いを着、腰のあたりでぴたりと緊

るやうな服を好んで着て歩いた。夏は一見土古耳人と見えるやうな上衣を着た。

其少年時の思潮の影響は、かれの文章を見ればよく解つた。作品の背景にも其影響が明かに指すことが出來る。否此の情緒的感情と、醫者の子息としての科學的思想と、この二つが矛盾したまゝに發達して行つたところに、實にフランス近代の文藝が其萠芽を生じたのである。

眞心を持ちながら眞心を持たぬといふ心、醉ふを欲しながら醉ふこと能はざる心、一層深く觸れんが爲めに一層深く離れたる心、憧憬と冷靜、藝術と實際其處に『マタムボワリー』の大作は生れた。

エンマはかれの愛する兒であつた。深く大いなる同情を持つて、かれはこの人生の悲劇に對した。理想と實際の相違、一方の翼を美しい黃金の空に、一方の翼を汚く深い泥濘の波に、作者の心が其の中間に漂つて煩悶して居たやうに、エンマも亦其間の細かい感情の衝動を受けて悲劇を構成した。エンマは矢張

Bourgoeisie と相容れることの出來ぬ女性であつた。簡單に普通の人間に許されるものに滿足して居ることの出來ない女性であつた。理解すべからざる心を持つて居た。更に詳言すれば、矢張 Troubadour の夥伴の最後の生存者であつた。

かれはエンマの最後を、冷かなる態度で立派に書いた。十三章の一章はフランス近代文藝の最もすぐれたる描寫である。

Emma, her chin sunk on her breast; lag with open, staring eyes.

沈默の煩悶、秘密の煩悶、吾一人の煩悶、此處に悲劇の分子が最も多く存在する。沈默と開放、秘密と暴露との間に薄い膜が一枚あるが、此膜は或時は微細なる音響の波動に由つても破られるが、或時は鋭利なる刀を以てしても猶且つ破ることが出來ないことがある。エンマの場合に於ても、作者自身の場合に於ても、其場合は後者であつた。

ブランデスは書いた。

『かれはクロッツセにかくれた。最後の作の不成功に深く心を傷けられて、全く寂寞の境に自己を閉ぢた。そして再び新に書かうと思ひ立つた。けれどかれはもう老いた。舊友ジョウシ・サンド、テオヒル・ゴオチエを失ひ、幼稚朋友で思想上の朋輩なるブイユエ、ゴンクールを失つた。かれは愈寂しくなつた。健康も次第に惡くなつた。散歩も不可能になり、――果ては他人の散歩を見るにさへ堪ぬやうな有樣になつた。それに財産も無くなつた。親切なその心柄から、愛する一人の姪を信用して萬般それに任せて置いた處が、その姪の夫がそれを全く使ひ果して、後年には生活のたつきにさへ心配しなければならぬやうになつた。次第に巴里に出て行くことなども少くなり、果ては庭にさへ出なくなつた。日常の動作は寢床から書齋にをり〳〵歩いてゆくのと、さびしい食事に下階に下りて行くばかりになつた。

『千八百八十年の五月に、かれは死んだ。墓はルーアンにある。葬式の列はさ

びしく、巴里から來た二三の友人が、かれをかれの最後の墓に送つて行つたばかり、ルーアンの町からは殆ど見送に立つたものはなかつた。町ではかれを知つてゐるものは少なかつた。知つて居る少數の人も、不健全な、不道德な作者として、常にかれを憎んで居た』

エンマは毒藥を仰いで死んだ。眞心を持たぬ眞心は眼を見開きながら驚く夫に護られて死んだ。理解せられざる作者の心も矢張さびしい書齋の中で死して行つて了つた。

フロオベルの作品は一篇毎に異つたリズムかあり、異つたスタイルがあるといふ。文章はフランス文の中で、殊にすぐれて居て、新しいフランスの散文の匂ひは此處から開けたとも言はれて居る。『ベトオベン、オフ、フレンチ、フロース』と言はれて居る。けれど私の胸に一番響くのは、矢張理想と感情の衝突、

憧憬と冷情との衝突、情緒的感情と科學的思想の衝突である。

メレジコウスキーは短かい批評の中に、かれの手紙に材料にして、かれの心理を歸納的に評して居る。實際と藝術との觸れ方離れ方に就いて、フロオベルほど面白い意味ある生涯を送つた人は少いと私はそれを讀んでつくづく思つた。かれは實際を厭離した。通俗の思想を賤んだ。藝術にのみ價値ある世界があると思つた。戀——最も價値ある意味ある戀愛そのものに就いてすら心を動かさなかつた。一度、實際の泥濘の中に足を踏入れたが最後、自己の藝術は汚れて了ふと思つて居たらしい。かれの眼とかれの心とかれの感覺とは、實際の種々の穢れたものを其儘に寫す研きすました鏡であつた。

この鏡を研くのに、かれは驚くべき意志の力と、贊歎すべき憧憬の念と、明快なる科學思想とを以てした。『サランボー』に就いての努力などは、今日考へて見ても、實に驚歎に値する。歴史の舊い黴臭い中から、あのやうな豐富な材

料を蒐集して、それを現代的小説にしたのは、到底他の企て及ぶところではない。易きを捨てゝ難きに就くとは實にかれの謂である。『サランボー』に於ても、『感情教育』に於ても、『サンアントニイの誘惑』に於ても、『マタムボワリー』に由つて得たやうな喝采を博することは出來なかつたが、しかしかれの藝術的良心は決して衰へなかつた。

ブルジエはモウパッサンと比べて、フロオベルの競走者としての態度は、重荷を負つての競走で、モウパサンのやうに自由でない、驅ける度に其重い足やら身體やらが眼に立つて見えるとかう評して居た。この重荷？　此の重く見ゆる足や體？　是は何であらうか。私はこれは藝術の重荷であると思ふ。實際を離れて藝術に行けば行くほど、この重荷は段々重くなつて、遂に全く自由を失つて、身動きも出來なくなつて了ふと思ふ。フロオベルは自由を求めて、實際から藝術に行つた。けれど藝術に執着して、藝術の重荷の身に加はるのを知ら

なかつた。『マダム、ボヴリー』時代に新しかつた衣が段々汚れて穢なくなつて行くのに氣が附かなかつた。

かれの晩年は藝術から實際へ立戻つて來たやうな傾向である。藝術ではかれは遂に滿足が出來ぬのを發見した。餘りに離れた生活は遂に堪へられぬものであることをかれは考へた。

けれどそれは餘りに遲かつた。

何故かれは『マダム、ボヴリー』を繰返して書かなかつたらうか。何故かれは自己の實際の研究を其儘に出さなかつたらうか。其晩年をエミル、ゾラは評して、『この偉大なる勢力旺盛なる天才が段々古いミソロジーの形を取つて行くさまを見るのは實に悲しい。フロオベルは段々大理石像になつて行く』と言つた。傷しいこの大理石像！

かれは體格は大く、音聲は鐘の如く高く、威風堂々として、歩くさまから笑ふさま語るさまに至るまで、常に一種すぐれたる壯嚴な相を持つて居た。肉體の十分なる發達を遂げて居たことは、寫眞を見てすぐ解つた。この肉體から『マタムボヴリー』『サランボー』などの大きな作品の出たのは意味がある。

ツルゲネーフとかれとを比較して見るのも興味のあることだ。ツルゲネーフはよく常に作中の人物に動かされた。勉めて平然たる態度を取つて居ても、それでも猶その筆は主人公と共に泣いたり笑つたりした。ツルゲネーフの作のパセテツクであるといふことはその爲めである。フロオベルには其憂はなかつた。かれは全く離れて居た。

ゴンクールの日記を此處に引く。

三月二十八日——日曜日

今日われ等は出發した。ドオテエ、ゾラ、カルパンチエル、及び予。クロッセに於けるフロオベルの家の晩餐會に赴かんが爲めに。今夜は一泊の豫定。

モウパッサンはわれ等を迎へるべく馬車を飛ばして來た。フロオベルはカラブリヤ形の帽子に、丸いチョッキ、皺の寄つたズボンを着てにこ〳〵して出て迎へた。

屋敷は實際綺麗であつた。今は分明と覺えては居らぬが、前にセイネが美しく流れ、吾々は高い帆の影を、丁度舞臺の後に行たり來たりするのと同じやうに見ることが出來た。樹木は皆な大きく高く其枝をひろげ、風が心地よく其間を吹いて通つた。果樹も多かつた。それに眺望よき高樓、……實際文人の理想的家屋であつた。

……

五月八日——

『貴郎は日曜日にフオロベルさんの處に御出懸けになるでせう?』とペラジーは言つて、『フロオベルが死んだ』と唯二語書いてある電報を私に示した。私は驚き且つ惑つた。私は何を爲しつゝありや、何處に向つて馬車を驅りつゝあるかを知らぬ位であつた。私は數週間前、別を告げた時に、涙がかれの睫毛を濡して居たことを思ひ出して悲しくなつた。

五月十一日——

私は昨日ルーアンに向つて立つた。

此朝ポウヘが家から出る時に、私に、『死んだのは卒中ではなくッて、癲癇だつた相だ。若い時から其病があつたと言ふことは君も知つて居る。東洋に旅行してから、全く癒つて、それから十六年一度も起つたことはなかつたのだが、姪から受けた心配で、又不意にそれが起つたものと見える。日

曜日に、不意に發作して、死んで了つたのだ。口に泡を出してゐたのがそのしるしだ。……

ゴンクールの兄弟はフロオベルの昔からの親友であつた。彼等はフロオベルと共に新しい文藝を祖述した。フロオベルの『マタムボワリー』を說く人は、『ゼルミニイラセルトウ』を必ず讀まなければならぬ。

『ゼルミニイラセルトウ』は下婢の戀を描いたものである。其描寫は飽まで外面描寫を試みつゝ、背後に暗い神經の動搖を寫さうと企てた。

フオロベルの藝術に比べると、ゴングールの藝術は餘程プレーンである。全體の感じも重々しい暗い力が全身を壓するといふよりも、針でさしたやうな神經の衝動を至る處に覺えると言ふ風である。描寫の方法に至つても、前者のいかなる細い所も寫して殘さゞらんとするのに引かへ、後者は多い細かいスケッチの中から、時にエフエクチイブな叙景、叙情、會話等を點出して來つて、その全體の感じを顯はさうとして居る。前者は刷毛を以て塗抹に塗抹を加へるのを辭さないが、後者はアッサリと簡單なる彩色で滿足した。

事實を絶對に重んずるといふ傾向はゴンクールに至つて極つた。かれ等は事實に捉へられるといふ評を到る處で受けた。偏僻、零細、怪奇の非難をも尠からず被つた。極端なる自然派の作者！　これはかれ等が二十年間に贏ち得たる惡評である。フロオベルは、其の豐富なる想像を自由に使役して、事實と想像との縫目つなぎ目を、手際よく解らぬやうに瀰縫する手段を用ゐて居たが、ゴンクールは全く其の想像を捨てゝ、一に自己のスケッチに賴つて小說を書いた。

『作者は唯作者の目擊したるもののみをよく描き能ふ。』

これがかれ等の主張であつた。

從つて、かれ等は、『刹那の現はれ』に就いて、非常に深い注意を拂つた。想像で描いたコンポジションや舞臺や會話や景色はすべてかれ等にあつては無意味で愚なることで、瞬間に表はれた人間の表情、行爲、會話、――人間は其處にある、眞理は其處にある、自然は其處にあると信じた。かれ等に取つては平凡なる一事象でも、其行爲と空氣とを描き得れば、それで立派な小説である。だから、フロオベルの藝術に要した想像は、此處では取材の上に於ては用ゐられずに、材料をいかに紙に上すべきかの上に於てのみ用ゐられる。

かれ等が文藝と寫眞術と一所にしたと言つて非難されるのもその爲めである。

其行き方は繪畫に於ける外光派に甚だ似て居た。

外光派の畫家は一枚の風景畫を描くにしても、先づ其地の氣候、地質　空氣等を十分に觀察する。筆を下たす時間に關して殊に重きを置く。十分の相違を

も喧しく言ふ。決して一枚の畫を其時書上げるなどといふ空想的なことはしない。幾日でも同じ時刻、同じ天氣の日を選んで出懸けて書く。

ゴンクールの叙述は總てさうした行方が多い。だから、『ゼルミニー』などにも田舍の有樣を書いた短かい筆の中に、非常にすぐれた叙述がある。貴族社會にしろ、下等社會にしろ、又は文人仲間の社交にしろ、かれ等は必ず手帳を其隱袋から離したことなく、其印象の消え去ぬら間に、――丁度畫家がスケッチをするやうに、其調子、會話、行爲、空氣を寫生した。

そしてこの寫生の堆積から一篇の小説をかれ等は常に作り上げた。

『セルベゼイ夫人』は肺病を病んだ宗教社會の婦人を描き、『レニーモウプラン』は甘やかして育てられた現代少女の心理狀態を想像を用ゐずに事實に由つて描き『ゼルミニーラセルトウ』はかれ等の老從姉の家に傭れた下婢をモデルにした。

ではゴンクール兄弟は、單なる寫生、單なる外面描寫のみであるかと言ふのに、決してさうではない。矢張フローベルと同じく、初めはロマンチックスクールの感化を受けて、感情を感情として歌ふ作者の群の一であつた。ハイネを愛讀したといふことでも略々其當時を推すことが出來る。殊に、弟ユールは感情に富んで居たと傳へられた。

科學思想に由つて起つたフロオベルの反動よりも、一層極端に行つたのは、ゴンクール兄弟の反動であつた。フロオベルは物の外部に留つて、深く內部まで入り得なかつたに引かへ、ゴンクルは常に極端に心理狀態に進んで行つた。かれ等の執つたやうな外面描寫で、そして心理に深く入らうと企てたのは、まことに進んだ企と言はなければならぬ。

ゴンクールは科學の精確に神經の衝動を加へて、自己の苦悶苦痛を常に其作の背景とした。曾て、『われ等こそ神經を小說に用ゐたる最初の作者』と言つた

が、それは決して意味の無い空しい誇ではなかつた。兄は胃病に苦み、弟は頭痛を持病にした。しかも其苦痛の中に孜々として勉めて倦きなかつたのは、フロオベルの努力と共に吾人の最も讃嘆する所である。

兩者の文章、其れを較べて見ても二人の特色が分るといふ。フロオベルの文章は謹嚴にして豐麗調子が非常に好いのに引かへ、ゴンクールのは、勉めて其冗句を去り、調子には餘り重きを置かず、唯自己の必要と感じた處に向つて、大膽に筆を着けて居る。コンベンショナルな處は少しもなく、句々皆な生氣に富んで居る。ことにかれの用ひた省略法は頗る其目的とした印象描寫に適つて居ると稱せられる。

『ラ、フオスタン』の後半部の叙述——女優が其戀人と雜踏せる巴里の喧騷の中を去つて、瑞西の山中に靜かに日を送るの條などは、頗る精彩に富んで居る。それから『アルマン』と稱する一小短篇がある。矢張女優の田舍行を書いたも

のであるが、平面に平氣に叙した處に無限の味があつた。

ゴンクール(兄)其著作のさまを語つて言つた。

『私は午後二時頃からそろ〳〵考へ始める。そして日の暮れる頃、町の方に出かけて行く。丁度街燈の點される頃で、往來の人の影が長く地上に曳く。――私はそれを見やうともせずに歩いて行く。店にはやがて火の光が溢るゝやうに漲り渡る。適宜の運動と夕暮の色とが力强く私の神經を打つて頭腦が分明として來る。起つた考を一々手帳につけて置いて、そして家に歸る。晩餐をすまして、その手帳に書いたものを整頓して寢に就く。私の一章を書くのは翌朝八時から十二時までの間である。』

フロオベルが死んでからは、ゴンクール(兄)が少時フランス文壇の主人となつて居たが、ゾラ、ドオデエ、モウパッサンなどが續々と踵を接して出て、遂にナチユラリズムの偉觀を呈した。

ロマンチックスクールの感化を受けて、一面科學思想の反動に胸を動かした二大小説家の姿を、私は時々想起す……

アルフオス・ドオテエ

アルフオンス、ドオデエは佛蘭西に於ける新興文藝の驍將で、フロオベルやゾラの起した寫實主義に參して、大なる功績を十九世紀の文壇に殘した。

フロオルベにゴンクール、ゾラにドオデエ、吾人はこの二組の名を並べて人のよく口にするのを聞く。千八百五十年時代を前二者が代表したとすれば、千八百六十年以後は後の二名が代表したと謂つて好い。そしてゾラは暗黑を描きドオデエは光明を描いた。

讀書趣味の健全なのを誇として居る英國の讀者社會を見渡して見ると、二人

の傾向と特色とがよく解る。英國ではドオデエの全集は立派な裝釘で、詳しい傳記まで附けられて公にされて居るが、ゾラの全集はまだ出版したといふ噂を聞かない。英國人はゾラの忌憚なき露骨な描寫を惡むこと蛇蝎の如くである。好奇心で讀むには讀んでも、あとはすぐ捨てゝ了ふ。これに比べると、ドオデエの評判は大したものだ。ヂツケンスの再生だとまで言つて居る。英國人が近代文學の唯一の誇として居るヂツケンスに比べる位であるから、ドオデエの明るい、樂天的な作品がいかに英國に歡迎せられるかが推量られる。

大陸文學者で英國に歡迎されるのは、ドオデエ、ツルゲネーフ、メテルリンクなどである。その中でもドオデエの讀者の範圍は一番廣いやうだ。ドオデエの特色はユーモアに富んで居て、そして餘り痛い皮肉が無く、事件人間を取扱ふにも自己の趣味を餘程多く加へてある。新聞小說的に面白く筋を運んだものもあるし絢爛な文章で貧しい內容をごまかしたやうな處もある。佛蘭西初期の

自然主義の作者の中では、著しくアイアデリスチックな色を帶びて居る。

フロオベルなどにもロマンチックな處はある。けれどそれは文を書く上の用意や、觀察の爲方などにあるので、作者としての態度は全く客觀的である。草や木を見ると同じやうに人間を見やうとして居る。その作者の趣味やら好惡やらは加はつて居ない。ドオデエにはこの態度が乏しい。餘程作者の趣味が其中に入つて居る。

文章の絢爛なことは、佛蘭西文學者中にも彼に比すべきものは澤山は無い。渠も又實際文章には骨を折つて居る。けれどフロオベルやモウパッサンなどゝ比べると、其骨折り方が違ふ。フロオベルやモウパッサンは其事實と印象とを完全に現す上に於ての鏤骨彫心の努力を爲て居るが、ドオデエのはさうではない。文章を文章として書いて居るやうな空疎な處が見える。同じリアリストでも、餘程趣が違ふ。

自然派の作家は手帳と鉛筆とを隱袋から離したことは無い。ゴンクールでもゾラでも、ノートの上にノートを築いて、そして一篇の小說をつくり上げる。ドオデエも矢張さうであつた。書かうと思ふ處へはよく出かけて行つた。妻と子とを伴れて、よく一緒に出懸るので、ドオデエは北海の鯨のやうだなどと言はれた逸事がある。ノートは隨分作つた方だ。けれど性質が敏活で、傾向が樂天的であるから、其のノートがいつも自己の趣味と感情とに支配されて、ゴンクールやフロオベルのやうに客觀的で居ることが出來なかつた。

ドオデエは佛蘭西近代文學に於ける短篇作者の祖である。渠が最初に名聲を博したのも短篇作者としてゞある。ドオデエの作品が長篇よりも短篇に長けて居ることは、一般の輿論で、『俄分限者』『流竄王』『ヂャック』などよりも『粉小屋より』『月曜物語』などにある短篇の方が、作者の長所を發揮して居る。就中普佛戰役に關する短篇は、かれが名を世に知らるゝに至つたもの、大に當時の時

好に投じたのである。けれど其傾向は矢張文章中心で、アイデアリスチックなところが非常に多い。

佛蘭西の短篇作者では、――巴里風の氣の利いた短篇では、ドオデエと、コッペエと、それから稍々後れて出たモウパッサンとこの三人である。モウパッサンの短篇に比べると、ドオデエのは、餘程明るい。所謂同情に富んで居る。樂天的である。描き方に氣が利いて居るのは同じであるが、ドオデエのは少し執拗い。その代り文章の絢爛なのや、着想の理想的なのを好む人には、讀んで忘れ難い味がある。從つて、近代文藝の特色なるアイロニカルなアクチーブなところは何處の頁を探しても見ることが出來ない。ドオデエ其人はゾラやモオパッサンのやうに根性の惡い性質ではない、溫厚篤實な感情的な君子人であつたのである。英國人に愛讀せられるのも道理だ。

ドオデエの作に『リットル、グート、フォア、ナッシンク』と言ふのと、『巴里

の三十年』といふのがある。これにはドオデエの自傳らしい生立が書かれてある。『リットル、グート、フォア、ナッシング』には其少年時代の家庭の衰退、不幸なる生活と學校教師などのさまがよく描かれてあつて、渠が少年時代をいかに過したかを明かに知ることが出來る。渠は南方佛蘭西の小さな町に產れた。其年は千八百四十年であつた。十八歲の時、如何かして文學者にならうといふ考で、其頃兄のエルネストが巴里である會社の書記をして居るのを賴つて上京した。其時の光景は『巴里三十年』中の『到着』といふ最初の一章によく出て居る。兄のエルネストが停車場に迎へに來て、車に荷物を積けて其下宿に歸る途中、とある下等な料理店で朝飯を食ふ處など眼に見えるやうだ。それから下宿屋の二階に居て、空想に耽つたり何かして少くとも一二年は書生生活を爲た。『巴里の三十年』の中に、蠟燭を一本立てゝ髮の毛を長くして熱心に原稿を書いて居る挿畫がある。ドオデエ其時の心を記して曰く『雜誌店の前に立つたり、

劇場の前を歩いたりして、所謂當代の大家の得々としたさまを見ると、若々しい奮勵の念が漲るやうに胸を刺して、一本の蠟燭を携へたまゝ、二階を音高く立てゝ登り、一生懸命に筆を執つた』と。此時作つたのは多くは詩で、後に此を出版しやうと思つて、彼方此方の書肆に歴訪して斷はられた時の心地も其章の中に書いてある。其後、一篇の小品を巴里の有力の新聞『フイガロ』に送つた。處がそれが幸に主筆の眼に留つて、時々掲載されるやうになつたので、段段青年作者として世に名を知られるやうになり、多くの當代の文人とも交際した。兎に角ドオデエの青年時代——巴里書生時代は、ゾラなどに比べると、餘程多幸で、間もなく當時の大臣の秘書官になつて、非常に可愛がられた爲め、生活上の苦悶もなく、時々は彼方此方に旅行することさへ出來た。六十年から六十七年位までは、短篇を多く作つた。有名な『粉屋より』は六十三年頃から始めた。此間、渠は絶えず旅行を爲て居たので、其見聞は多く其頃の短篇に出て居

る。『月曜物語』を讀むと地中海の海岸のことや、コルシカのことや、アルゼリアの風俗などがよく書いてあるが、これは皆其旅行の賜である。さうかうして居る中、例の普佛戰爭になつた。此の戰敗の悲劇に對しては、渠は愛國的悲憤を痛切に感じた一人で、其事件と活劇とを書いた短篇は隨分多い。『伯林の包圍』『最後の敎課』『新敎師』『アルサス、アルサス！』など皆な一種佛蘭西人的の感情の熱い血が流れて居る。それから比較的長いもので、『ロベル、ヘルモン』といふものがある。畫工が巴里の近郊セナルの森の隱家に身をひそめて、普軍の進入を見て居る趣向で、文章にも觀察にも頗る新しい處がある。長篇では六十八年に『リツトル、グート、フォア、ナツシング』を書いたが、其翌年妻を娶り、七十一年に、其出世作『タアタリン、タラスコン』を書いた。

此作は有名なる滑稽小説で、作者の故郷に近いタラスコンの町の出來事を材料にして、輕快なる筆を揮つた。此作が當つたので、ドオデエは同じタアタア

リンといふ主人公を材料にして、『タアタアリンオブアルブス』を書いた。

けれどまことの意味に於て、文壇の大家となつたのは、七十四年、卅五歳の時に『プロモンリスリー』を書いてからである。

今重なる著作を擧れば、『リットル、フオア、クット、ナツシング』『粉小屋より』『タアタリ、ンオブ、タラスコン』『プロモンリスリー』『月曜物語』『ヌマ、ルーメスタン』『俄分限者』『流竄王』『サツホー』『タアタリンオブアルブス』『ロベルヘルモン』『ヂヤック』『エヴンジエリスト』『フオートタアタリン』等で、其他『巴里の三十年』『一文人の追懷』といふ二冊の追想錄がある。千九百九十一二年頃に『ゼ、ベット、オブ、ファミリー』といふ作を公にしたが、これは餘り評判が好くなかつた。

脚本も二三種書いたが、劇壇では餘り成功した方ではなかつた。『わが劇の最初印象』は『巴里の三十年』の中に書かれてある。

熊谷直好

千九百九十七年に、劇場で突然發病して死んだ。餘り急なので、一時は刺客に逢つたと誤傳された位であつた。年は五十八歳である。

ドオデエが作には、巴里の影響が非常に多い。世界著名の美術の都會は確かにかれの一生の頭腦を支配した。渠の作を讀むと、巴里の空氣が髣髴として身に迫つて來るやうな心地がする。それから渠の作品に影響した今一つは、フロオベル、ゴンクール、ゾラなどと交際して、所謂『リアリスチックスクール』に參したことである。ドオデエの如き性格では、この寫實主義の影響を受けなかつたならば、純ロマンチック風の作者になつたのは、言ふを待たぬことで、作品中に見える精密なる描寫は遂に見ることを得なかつたであらう。晩年にはゴンクールとの交情親密に、かれのシャンプロセーの別莊は常に平和なる團欒の場となつた。渠の長男は父の跡を襲いて、文學家の一人となつたが、今でも其名は餘り高くないといふことだ。

——アルフオス・ドオテエ

要するに、ドオデエは佛蘭西自然派の中では主として明るい方面を書いた文章の旨い作家であつた。

『太平記』と南朝の遺蹟

幼い頃好んで讀んだ故か、太平記の人物や故蹟をいつもよく思ひ出す。近畿を旅行すると、殊に其感が深い。

京都の市街は昔はもつと西に廣がつて居たといふ。二條離宮附近に殘つてゐる昔の大極殿の跡、それを中心にして考へて見ると、今でも略々見當がつくが、鴨河以東は所謂都の近郊を成して居て、平家時代から南朝時代に至る間の政權を握つた六波羅は、實にその近郊の地であつた。

それは丁度鳥部山の下に當つて居て、五條の末六波羅密寺の南から七條の末

法住寺殿の遺址附近にまで及んでゐるといふ。平家物語に、『南は六はらが末賀茂川一町を隔て、元と方一町なりしを、此相國の時造作あり。家數百七十餘字に及べり。是のみならず北の鞍馬路より始めて、東の大道を隔て、小松殿まで二十餘町に及ぶまで造作したり。眷屬の住家細かにこれを數ふれば二千二百餘家云々』と書いてあるのを覺えてゐる。私は鳥部野の下に連れる瓦甍の街を感慨なしに見ることが出來なかつた。

鴨河、比叡山、皇居——六波羅から鎌倉に捕へられて行つて、東海道の菊川驛で誅せられた俊基朝臣のことなども思ひ出された。義貞が皇太子を奉じて、後醍醐天皇に別を告げて、死を決して北國に赴いた北國街道のことなども考へられた。

しかし南朝時代のことを偲ぶには京都は餘り便利ではない。此處では平安朝時代源平時代の豐富な遺蹟が寧ろその印象をみだして了ふ恐れがある。後醍醐

天皇のことにしても笠置とか吉野とかに置いて考へる方が京都に置て考へるよりも餘程印象が分明として來る。『太平記』の語つてゐる悲劇は、『平家物語』の語つて居る悲劇のやうに花々しくもなければ詩的でもなかつた。同じ敗滅の歴史であつても、それを飾つて居る色彩がなかつた。舞臺に出て來る人物も多くは戰鬪の將士で、『平家』に見るやうなやさしい色彩のある女性は何處に於いても見出されない。義貞と義經、靜と勾當内侍、それだけでもその悲劇の差違がわかる。

しかし私は何故かこのじみな、灰色の、ジミジミと腐つて行くやうな南朝敗滅の悲劇に動かされたことが尠くなかつた。手を挽がれ、足を挽がれ、遂に天下の大勢に離れて行つた其狀態が、いかにも哀れで、そしてまたいかにも意味が深い。

『太平記』のメロヂー、それは決して『平家』のやうな浮立つたメロヂーでは

ない。それは吉野落ちの琵琶を聞いただけでもわかる。一體に暗澹として居る。荒涼としてゐる。濁つて居る。

賀名生の行宮址、觀心寺の行宮址、それを今日行つて見たことのある人は、その末路のいかに暗いかを知ることが出來るであらう。私は千早の古城址の上にある楠正儀の小さい墓の前に立つて、思はず暗涙に袖をぬらした旅客の一人であつた。

木津川の大きい谷は東から西へと開けて居た。松の多い丸い笠置山、今はそれを汽車の窓からでも見ることが出來た。私は其頂にある行宮址から、前に連る波濤のやうな山を指して、後醍醐天皇の一夜迷はせられたといふ物語を案内者の口から聞いた。戰鬪の巷に一生の精力を銷盡して、他を顧みる暇すらなかつた時代は、到る處に其の辛酸の跡をとゞめて居た。

今も石の多い笠置山であつた。汽車から見ると、こんな山でよくあれだけの戰爭が出來たと思はれるほど低い小さい山だが、登つて見ると、流石にこれでは敵も攻めすぐんだであらうと思はれた。大きな伽藍、勢力ある僧徒、谷に架し山に枕した無數の僧房。敵の迫る度毎に上から石を投落したといふ當時の有樣も略々想像せられた。天武の朝に建てられた偉大な伽藍が其時の兵燹にかゝつてすつかり燒け盡したさまも思ひ遣られた。

笠置の沒落から天皇の隱岐遷幸がすぐ續いた。この遷幸の道順は今の神戸から播磨に出て、備前の上郡から皿山道を美作の福山へと向つた。兒島高德が鸞輿を奪ひ奉らんとしたのは三石の險である。福山の西北には高德の赤心を披瀝した跡に作樂神社が祀られてある。それから四十曲の險を越えて、伯耆の米子、出雲の美保ヶ關、海上には遙かに隱岐の一青螺が指さゝれた。

私は地藏岬の絶端に立つて、遙かにこの一點の青螺を見た一人であつた。海

は荒涼暗澹として居た。天皇がひそかに島を脱し去つた船路は、實にこの渺茫たる絶海の怒濤を凌いで、右に遙かに伯耆の大山の長い裾を見たあたりである。

楠正成が北條氏八十萬の兵を引受けた千早の一孤城は、金剛山から流れ落ちる小さい溪流の奥の奥に位してゐた。それは小さい村落で、城の址はやゝ高い山の半腹のやうなところにある。成程、後は金剛山、前は幾人も並で歩かれないやうな谷に渡つた細い道で、其が赤坂の城のあつたところまで長い間通じて居る。北條氏の軍が却つて其兵力の多いのに苦んだのも尤だと思はせるやうな地形にある。

南朝の末路——山の奥から奥へと引込んで、攻めたくつても攻められないやうな處に行宮を拵へたといふことは、南朝の歴史地理を研究するものゝ皆な知つて居る處だが、以前に於ては正成がこれを千早に行つて奇捷を博し、以後に於ては、何等の反響をも天下に起さなかつたといふことは、大に考へなければ

ならぬことである。潮流に乘つた以前と、潮流に負き去つた以後との差別はこれにもわかる。

十津川の谷は護良親王の一時身を遁れたところであつた。玉置山、水無瀬川其處に花折塚といふのが今でもある。高野から落ち延びて山又山、人跡の至らぬやうなところに僅かに難を免れた辛勞のほども思ひ遣られる。私は曾て南朝の諸皇子といふことを考へたことがあつた。鎌倉の土窖の中に弑された護良親王、金崎の落城と共に戰死した尊良親王、同じ時に捕へられて兇手に毒殺せられた皇太子恒良親王、九州の菊池氏に迎へられて遂に肥後の邊土に薨去せられた征西將軍宮懐良親王、陸奥に赴く途中、伊勢の海門で颶風に逢つて、尾張の篠島に避難せられた義良親王——辛酸に辛酸を重ねた悲劇は諸皇子の身邊に纒つて曾つて少しも離れなかつた。ことに宗良親王が或は信濃に、或は遠江に、或は武藏に、征旅の中に其髪の白きをも忘れて鞅掌せられた辛勞はまことに思

ひやるだにかしこい心地がせられる。その終焉の地を示した遠江の井伊谷神社は濱名湖畔から遠からぬところにある。

南朝の末路は木の葉の散るやうであつた。回復に回復を謀つても、いつもそれは徒勞に歸した。

長慶天皇の御陵墓參考地と言つたやうな遺蹟が到る處にある。近畿の山中にもその勢を保ち得なくなつた後の南朝の敗滅史は、九州四國奥羽に其蹟を留めて居る。幾度か消えんとせる火は燃され、燃されんとせる火は消された。

陸奥地方には比較的南朝に心を寄せた豪族が多かつた。ことに、南部の一族は陰に陽に常に南朝を援けて居た。南朝がいざと言ふと、陸奥地方に親王將師を派して、其勢力に頼らうとしたのはこれが爲めである。又、南朝の沒落後に於て、其親王の子孫、公卿の子孫等の其地方を遁れたものゝ多いのもこれが爲

である。長慶天皇の御陵墓參考地と稱するものゝ多くは、これ等親王乃親王の子孫の墳墓であらうといふ。

陸奥の馬淵川の邊に名久井岳といふのがある。此處で最後の南朝回復の擧が企てられたことがあつた。今その跡が殘つてゐる。

しかしかくの如く敗滅し去つた南朝も一たびは勝利者であつた。凱旋者であつた。後醍醐天皇の鑾輿が隱岐より攝津に入つて來た時には、實に朝日のごとき勢であつた。天下の武人皆なこれに集るといふ概があつた。『太平記』は『平家物語』に比すれば、記實の書である。併しこの一たび屬した天下の大權の忽ちに過ぎ去つた暗潮に就いては、多く記するところがなかつた。

この暗潮に乘じ得なかつた處に南朝の悲劇がある。

金崎城の陷落は『太平記』中の最も悲慘な一齣である。

義貞は死を決して、雪の應に來らんとするを期して北國街道を湖の西岸に沿うて進んだ。金崎の城址は、今、敦賀の景色の好い處にある。其處に官幣社金崎宮がある。義貞の戰死した燈明寺畷附近にも今日其蹟が殘つて居る。

楠の子孫が近畿地方で最後まで王に勤めたと同じやうに、義貞の子孫もまた關東地方で屢々回復の師を起した。義治、義宗、義興――ことに義興の傳記が最も色彩に富んで居る。そしてこの新田勢と鎌倉勢との戰爭が、『太平記』時代の武藏野の古蹟の大部分をなして居る。新田の故郷に近い笠懸野から、川越、入間川、分倍川原、到る處にその戰爭はそのあとを留めて居る。利根川までは打つて出る餘裕がないので、鎌倉勢は大抵多摩川を擁して此南下の軍勢を拒ぐのを例として居た。其頃の鎌倉街道は戸塚近傍から丘陵の間を越えて、直ちに武藏野の中部から上野方面へと通じて居たので、今の八王子街道の府中町が略々其地の中心をなして居た。今猶ほ近郊の森の中などに當時戰死した勇士の墳

墓を探すことが出來る。

しかし何と言つても南朝の遺蹟は吉野山であつた。前に吉野川を帶にし、左右に深い谷を控へ、馬の背のやうな間に今の吉野町と昔の藏王堂とが連つて居るが、それが花に埋めらるゝ時のさまは實に何とも言はれない。其處には昔の面影と今の光景とが細かに織り込れて、一種明るい哀愁が、詩のやうに漲り渡つて居た。『太平記』の吉野山行宮の歷史は、全體の暗い調子に似もつかぬ明るさと花やかとを持つて居て、此處にのみ『平家物語』に見るやうな藝術的の匂ひを味ふことが出來る。

吉野落ちに戰死した村上義光の墓は、花見客の醉ふてぞろ〳〵通る路の畔にある。『萬人買醉攪芳叢――』と詩人の歌つたのも道理である。後醍醐天皇が絕世英邁の資を以てして猶ほ怨恨を飲み劍を按じて崩御せられた吉水の行宮、其

處には吉水神社が祭られてあつて、今猶ほ玉座の間といふのを存して居る。天皇の御製にある『花にねてよしやよしの丶吉水の枕の下に石ばしる音』のさゝやかな流は今も音を立て丶流れて居る。

谷を隔てた如意輪堂、後醍醐天皇の山陵、殊にこの邊は花が多かつた。ある詩人は『南朝天子御魂香』と吟じ、ある詩人は、『落花深處說南朝』と歌つた。

戰鬪の記事を以てのみ充たされた『太平記』武人の權力の爭奪のみを記した『太平記』、それにもかうした詩のやうな繪のやうな境があつた。山櫻のやうに散つて行つた南朝の末路は何故か私に深い印象を殘した。

『方丈記』に現れたる源平の盛衰

方丈記を讀んでひどく感じたことがありました。何でも今から十三四年も前のことで、私の家に居た晩學の書生と涙も零さぬばかりに話し合つたことを覺えて居ます。

其時は自分の身につまされるやうな事情もありました。心持もセンチメンタリズムに傾いて居ました。しかし其感じが今になつてもはつきりと頭に殘つて居るのを見ると、隨分強い印象であつたと思はれます。

『あの時代だから長明のやうな人物が生れた。』私達はかう話し合ました。『あの

時代だから、長明のやうな人物が方丈記を通して浮み上るやうに見えるのだ。長明が方丈記を書いたといふことは、一面から見れば、平家の沒落よりも、頼朝義經の武功よりももつと大きな意味のあることかも知れない。平家物語や源平盛衰記で見せられる詩のやうな悲劇も、これで見ると、一種敗滅のにほひがある。』

私はかう言ひました。

力強い句の短かい感じの強い文章が、大きな源平盛衰の歴史を背景にして居るといふことが、深く私達を動かしました。この短かい文章の陰には、清盛も居れば重盛も居る。佛御前、祇王、常盤、維盛の妻などゝいふ女性も居る。木曾の冠者義仲を始めとして、頼朝、義經等といふ勇しい武功を立てた人もあるのでした。建禮門院のやうな哀れな歴史を世に留めた人もあるのでした。滅びるものは滅び、榮ゆるものは榮ゆるといふ凄しい巴渦の中で浮きつ沈みつした

人々の生活——その人々の中に『方丈記』の作者が一人交つて居たといふことは、深い意味を私達の胸に齎らすのに十分でした。

私は其時分の京都の市街を考へました。花々しい歴史の巴渦の中に居りながら、それとも知らずに、音も香もなく生れて死んで行つた人がさぞ多かつたことでせう。さういふ人々の平凡な人々の生活が不思議にも私の眼の前に現はれて來ました。私は『方丈記』よりもさうした人の當時の日記が見度いとも思ひました。

長明は福原の京のことを書いて居ります。『北は山にそひて高く、南は海に近くて下れり。浪の音道にかまびすしくして、鹽風殊に勵しく』かう書いてあります。今の神戸——賑かな神戸、開港場の神戸。私は朽ちざる自然の中に逸早く物語を殘して過ぎて行つた人間を考へずには居られませんでした。

『寫生した處に此文章の價値があるんですねえ。平家物語を見ても、盛衰記を

見ても、其時分のものにこれほど寫生をして居るものはないからね。』

私は書生にかう言ひました。

個人の見たる源平盛衰の悲劇――さういふ處に私は深い興味を持ちました。

長明の性格、さういふ方面も尠からず私を動かしました。

感想を書いた中に、長明の性格がよく現はれて居ると私は思ひました。ひねくれた處があつて、そして力がない。鋭敏な頭で、神經も鋭くつて、そして常に懷疑の念に惱まされてゐる煩悶家と言つたやうなところもある。私はかう思ひました。正直だけそれだけ人の不正直が眼に附く。頭が鋭敏だけにそれだけ人の弱點がよく解る。さうかと言つて、充實した力を用ゐて、その欲するところに向はうとするやうな勇氣もない。センチメンタリズムの小さい型――さういふ處が確かにありました。

從つて當時の榮華衰亡の烈しい潮流の巴渦は、かれに取つては、實に堪へ難い刺戟であつたに相違なかつたのです。それは佛の悟りといふ方面からあゝした心地になつたにも相違ないが、それよりも、かれが世に容れられない實際上の不平がその第一の原因を成したのでありませう。

寧ろ其處に長明の性格があり、『方丈記』の價値があるのではないかと思ひました。

『實際の不平が厭世の根本を成して居るところが面白い。其處に人間らしい熱い血も流れて居るし、『方丈記』の人を動かす大きな動機も横つて居る。何も彼も露骨に出したところに生々した長明の性格も顯れて來るし、其感想も寫生も力を添へて來るといふ譯ですね。』

私はかう言ひました。

晩學の書生と謂ふのは、辛勞多い半生を送つて來た田舍の人でした。其時三

十五位でした。國語の中學檢定試驗を受けやうとして居ました。何處か根本性情に厭世的なところがあつて、何方かと言へば、望の多い割に力の乏しい方でした。

『長明が小さい型の性格を以て見もし聞きもした世相――それが日本歴史上最も變化に富み、最も光彩に富んだ源平時代だから面白い意味をつけて來たんです。日野山に隱遯した記事などは、確かにその烈しい世相に對する自然の反語でもあり、意味ある對照でもある。滅び行く人、榮え行く人、それを傍觀的に見たと言ふよりは、やむなく隱遯して耳を塞ぎ眼を閉ぢたといふ處を私は注意して見たいと思ふ。』

私は續いてかう言ひました。

『これから考へて見ると、人間といふものは個性を十分に發揮した處に不朽の分子がこもつてゐるのだ。何んなことでも好い、何んな小さいことでも構はん、

自己の眞實に感じ、眞實に思つたことをぐんぐん行るなり書くなりして置きさへすれば好い。それが其人々の持つて生れて來たライフである。……人はよく其の自己のライフの偉大ならんことを欲し、花々しからんことを欲するけれど偉大といふことも、花々しいといふことも、平々凡々一生を音なく香なく暮すといふことも、時の上から見れば、大した差別のあるものではない。皆なその人々の始めから得來つたライフである。……小さくつても構はない、貧弱なライフでも構はない。それを充實させて行くより他仕方がない。』

この主人と住家と無常を爭ひ去るさま、いはゞ朝顏の露に異らず。或は露落ちて、花殘れり。殘ると雖も朝日に枯れぬ。或は花萎みて、露猶消えず。消えずと雖も夕を待つことなし……

私達は其時かうその簡潔な力强い文章を朗讀したことを覺えて居ます。何故

『方丈記』に現れたる源平の盛衰

であつたか知りませんが、それが甚しく私達の心を撲つて、平凡なこの言葉にも何となく深いことが思はれるやうな氣がしました。

日野山隱遯の條などはことに私達の心を動かしました。如何なる生活でも貴ぶべき自分の生活である。大臣宰相と雖も如何ともすべからざる生活である。まことなる生活！　その言葉がまた若かつた私達の胸を深く衝きました。

私は其時分積極的厭世といふことを考へて居ました。厭世家の事業といふことなども考へて居ました。消極的にのみ見た厭世から一歩踏み出して、充實した生活に入らうとして居ました。で、自然の結果として、私達は厭世といふことに就いて語ることになりました。

長明のやうなライフは、しかし送りたくないといふのが私達の考でした。壓迫に壓迫されて自然とうめき出したやうな聲は餘り出したくはありませんでした。壓迫して來たものにはドシ〳〵突當つて行つて、其の成行を見る方が男らしくもあり痛快でもあつた。『當つて碎けろ』私達はその諺の方に行きたかつた。

尠くとも、勝つても負けても、當つて見れば、其處に新しい境地が開ける。勝敗が問題でなくつて、新しい境地に對する計畫が其處から生れて來る。私達はかう話し合ひもした。

『方丈記』に見えた無常、それは自然の法則には相違ない。それは私達が平生物に觸れ事につけていつも深く感ずるところである。又一方から言つて、宇宙に痛感するといふことは必要なことであるに相違ない。それにも異存はない。併しそれは自然の法則がさうであると言ふ一種の知識であつて、亡びるまでは、人間は生存力の充實と滿足とを計らなければならないのである。むしろそれをやるやうに人間は出來てゐる。生死の問題よりも當面の問題――私達はかういふことを盡きずに話しました。

『方丈記』の背景の歷史の舞臺に顯はれた人々のライフ、さうしたことも私達

『方丈記』に現れたる源平の盛衰

は語り合ひました。生死とか無常とか言ふことを考へる暇もなく、舞臺の上に出て、そして永久に消えて行つて了つた人々――其人達に取つては、生死の問題なぞは何でもなかつたかも知れません。十五分間の呼吸の壓塞、もつと早く死んで行つて了つた人もあるかも知れません。昔の人の殘した跡を見て、私達が嘆いたり悲しんだりしたッて何の甲斐もないことです。

私達は其頃はまだ若かつたので、さうした話は容易に盡きませんでした。

其日は秋の晴れた日だつたと覺えて居ます。庭には菊が咲いて居ました。私は妻を貰つた當座で、赤い手絡をした妻は、日の當る緣側に茶器などを運んで來ました。裏の林にはこがらしが立つて、楢や栗の葉がガサガサと庭にころがつて居ました。

三年ばかりして其の書生は國に歸つて、肺を病んで死んで了ひました。

私は其時きり『方丈記』を讀んだこともなければ、其話をしたこともありませんでした。これを書くについても、『方丈記』を讀かへさうと思ひませんでした。

『浦のしほ貝』に見出したる『自然』

『浦のしほ貝』は尠くとも私の若い心に深い印象を殘した書の一つであつた。私はそれを離したことはなかつた。その歌のあるものは今でもをりをり私の口に上ることがある。

林の陰、山里、風の立つ落葉道――さうしたところが『浦のしほ貝』の歌を思ひ出すのに最もよく適して居た。淡い中に深い趣を包んだ歌の姿、輕いしかしながら淋しい情緒、それが私の胸に何んなに小やかな藝術的憧憬を齎したか知れなかつた。

熊谷直好といふ名は、桂園門下の歌人としてはかなり世に知られて居るが、しかしその歌に就いては、これまで餘り多くの批評も言論もなかつたやうである。從つて其の眞價を知るものは極めて少い。

蓮生坊直實二十四世の孫で、周防の岩國に生れて、十六歳の時香川景樹からその詠草の奥に『みにならん秋を思へは小山田のいね難きまでうれしかりけり』といふ賛辭を得て、京都に上つてからは、歌の道と、禪の道に一生を傾けて、晩年には管絃の道にまで心を寄せて、七十六の高齡を以て大阪の北濱の假寓に逝つた人の一生――私は『浦のしほ貝』の一卷にいつも其一生の餘響を聞くやうな思がする。

感じとか情緒とか空氣とか言ふことは、唯其感じたまゝを直接に言つたばかりでは決して出て來るものではない。露骨に言つて了つては、それが多くの場

『浦のしほ貝』に見出したる『自然』

合、説明の形になつたり、ジヤスチフイケーションの姿になつたりする。自己に私するといふやうな調子が少しでも出て來ると、その作品から受ける印象がすぐみだれて了ふ。

作者の箇性、それが作品に必要なのは言ふを待たないが、其箇性が小主觀小觀念に煩はされずに徹底した形を持つて居なければ、その箇性の爲めに、作品がつまらないものになつて了ふことは常によくある。歌の場合に於てなどは、殊にそれが著しいと思ふ。作者の箇性を縱横に作品の中に發揮して、それが厭味にならないといふやうな境には、容易に達せらるべきものではない。

『浦のしほ貝』の作者に於て、私は特にその作者の箇性の渾然として甚だ『自然』に似て居るのを及び難いと思ふ。自然！　いかにも自由な見方がしてある。いかにも形に捉はれないやうなところがある。技巧ならざる自然の技巧、私はかう言ひ度い。

感情でも情緒でも、生（ナマ）であつてそして生でないといふやうな境によく達して居る。感情を露骨に出す時には、それが屹度作者の感情ではない『自然』の感情になつて居ないことはない。

里の子が澤にしぎわな張りしより心にかゝり夜こそねられね

私が此歌を好きなのは、この歌に歌はれた内容に由つてではない。いかにも感じがよくこなれて出て居るからである。其境がよく描かれて居るからである。澤、しき罠、里の子――これだけで複雜した描寫を巧に遣つて居るのがことに頭に殘る。

描いたものでなければならない。『浦のしほ貝』の作者は尠くともかう思つたに相違なかつた。『自然』に似た自己の箇性、それに映つた客觀（外物）の姿、それを描きさへすれば、作者の情緒をも完全に具へた歌が出來るとかうかれは思

『浦のしほ貝』に見出したる『自然』

つたに相違なかつた。其處にかれは寫生、描寫の意味を發見した。

從つてかれの歌には他の歌に見るやうな斷定的な感想が少なかつた。花を見ても、月を見ても、自家獨得の感想を歌ひ出すのを特色とした當時歌人の中にあつて、かれはそれよりも寧ろ自己の練磨した主觀をひつたりと客觀の外物に持つて行つて押當てやうとした。かれの歌から受ける印象が作者の感情其ものではなくて、作者と讀者との同一心理狀態に達した外物に對する一種の同感乃至發見であることはその爲めである。

おそくとくみなわが宿にきこゆなりとゝろどころの入相の鐘

人とはぬわが山里の柴の戸は風ぞひらきて風ぞ閉ぢける

汐ひれば眞砂つゞきとなりにけり沖の小島と思ひしところ

笹の葉の白きは霜の光にてまだ夜は深し岡の邊の里

もみぢ葉にわが山道は埋れて時雨も今は通はざりけり

かきくらし今時雨れたる松の葉に夕日さす也住吉の濱

かうした歌はある人に取つては甚だ平凡であるかも知れぬ。もう少しく獨創の感興、獨得の感想がなくては歌にする甲斐がないと言ふかも知れぬ。しかし私は此平凡な中から、作者の淡い情緒、『自然』に似た心、なつかしい淋しい藝術的憧憬をさがすことが出來る。

『自然』に感興を求め刺戟を求めるといふことも惡くはない。人々の年齢によつてはさういふ時代もある。しかし『自然』は面白いと思へば面白いし、面白くないと思へば面白くないものである。『自然』はあるがまゝのものである。あるがまゝで何うにもならぬものである。藝術家の胸の鏡には、尠くとも此あるがまゝの自然があるがまゝに映つて來るやうにならなければならない。作者の小さい感想を見せて貰ふよりも、作者の主觀を透した『自然のあらはれ』を見せて貰ふ方が何れどけ好いか知れない。讀者は其處かなら自由な束縛されない

『浦のしほ貝』に見出したる『自然』

印象を得ることが出來る。

作者が歌に詠んだ入相の鐘とか、柴の戸の風とか、曉近い岡の邊の里とか、夕日とか言ふものは人間が此地球の上にある限りあるものである。曉の笹の葉の霜の光などは『浦のしほ具』の作者時代にも今の時代にも朝早く旅などをするとよく邂逅する光景である。小さい感想を交へずに、自由に其狀態を描いてそつと投り出たやうな處にこれ等の歌の亡びない價値がある。『萬葉』の歌の今日私達の胸に響くのも、矢張小さい感想や理窟がなく、ひつたり心に合ふところがあるからである。

『浦のしほ具』には天然を詠したものが多い。『天然の中に住んで居る人間』と言つた風の趣がある。私はそれを面白いと思ふ。

世の中に景色歌といふことがよく言はれる。今では叙景詩などといふ熟字も

出來て來た。しかし嚴密に言へば、簡單なる叙景詩などといふものが世に存在すべき筈がない。私の歌の師匠が『これは景色歌ですな』と言つて簡單なる叙景の歌を排した理由が今になつてよく解る。

私は『浦のしほ具』の平凡なる歌の中に、『天然』と『人間』との相觸れて存在して居るさまを認めて今も不思議に感ずる一人であることを斷言して憚らない。

大伴のみつの濱荻枯れしより風の音こそ高くきこゆれ

風なくてそよくと蘆の見えつるはかくれて人の刈るにぞありける

思ひかね妻こふ鹿やわたりけんうはにこりせる谷川の水

しくるゝは山路の常と思ふらん降るにもうたふ柴人の聲

『天然』と『人間』との交渉を歌つた歌の作者は隨分ある。しかし『浦のしほ具』の作者ほど自然に無邪氣にあるがまゝの境に達したものはない。其師景樹

も其自由な天眞流露した點に於ては一歩を讓らなければならない。私はいつもかう思つて居る。

それに一層すぐれて居ると思ふのは『自然』の見方に飽まで作者の色をつけて居ないといふことである。かれの歌が多くの場合輕々に看過されるのはその爲めであると言つても好い位である。かれが實際の社會にあつて如何なる人であつたか、如何なる一生を送つたか、傳記が缺けて世に傳はつて居ないからよくは解らないが、兎に角藝術に深く身を委ねた人であることは爭ふべからざる事實である。

禪から來た影響、それがかれの歌の背景を成して居ることは此處に書かなければならないことだ。かれは京都の相國寺で、誠拙禪師に參禪し、悟入を得て、香一居士の號を授つたといふ。閑寂な恬淡な歌の味は實に此處から得て來たの

であらうと想像される。しかしかれは長明の行つた道、西行の行つた道、芭蕉の行つた道とは餘程違つた道を歩いて居た。自己を投げ出したやうな感慨や感想は何處を探してもなかつた。さうかと言つて、皮肉に世を見るといふやうな激しい調子もなかつた。わざと世を面白がつて暢氣に笑つて送るといふ風なところも無論見當らなかつた。

『桂園一枝』にはまだ餘程激しい處がある。センチメンタリズムの積極的になつたやうな處が隨分ある。當時の歌壇に奮鬪した人だけ、さうした弱點がかなり著しい。しかし『浦のしほ貝』にはさういふ處は全く無い。日常の平凡生活、それをかれは落附いた眞面目な心で仔細に見てゐた。

日常の平凡生活が詩に入つて行くといふことは意味のあることだ。私は二十四五の頃、『浦のしほ貝』によく讀み耽つたが、零細なことに趣味を發見するといふ傾向は、この一卷の歌集に負ふ所が多かつたことを今も言ひ得る。日常の平

『浦のしほ貝』に見出したる『自然』

凡生活から築き上げられたライフ、それを餘所にして『詩の領分』のないといふことも私はそれから學んだ。

今少し私は私の好きな歌を擧げて見たいと思ふ。

あけのこる松の木の間の月見れば老の寢覺もうれしかりけり

てる月を松のかげなる岩清水したゝる音のさやかなるかな

有明の月も木の間になりにけり獨りやこえん逢阪の關

今ぞしる草にも木にもおく露はみなたび人の涙なりけり

おき出てゝ一人ぞみつる在明の月ににほへる白きくの花

きくの花のこり〳〵て冬の夜の在明の月に逢にけるかな

小夜ふけてをり〳〵雪やましるらん重げになりし雨の音かな

あるかぎり衣かさねて猶寒しいく重つもれる山の雪ぞも

それをだに音するものと頼みつる寛の水もこほりゐにけり

思ふとち夕の酒にゑひ伏してむすふ氷もしらぬ夜半かな

これは『浦のしほ貝』拾遺の冬の卷と雜の卷とから選んだものだが、かうした作は到る處にある。

夕附日さして匂ひはなけれども垣の小草花咲きにけり

此歌などは殊に昔の歌人の集中にはめづらしい新味がある。簡單な言葉の中に野に近い家の趣が鮮かに眼に映つて來る。

兎に角、私に深い印象を與へた歌集――寂しいしかし明るい平面的な感じを與へて呉れた『浦のしほ貝』一卷、私は今でもこれを人にすゝめたいと思つて居る。

『浦のしほ貝』に見出したる『自然』

花袋文話

終

著作權所有

（定價金八拾錢）

明治四十四年十二月廿五日印刷
明治四十四年十二月廿八日發行

（花袋文話）

著者　田山花袋

發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎

印刷者　東京市小石川區久堅町百八番地　水谷景長

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館
振替貯金口座東京二四〇番

田山花袋氏著書

近作十五篇

全一冊四六判上製
裝釘瀟洒美本
邦助君挿畫十四枚

正價 金七拾五錢
郵税金八錢

内容

◎拳銃死　一家の主人
◎庖丁幼兒　竹馬の友
◎父の墓丘の家　町より山へ
◎寫眞二階の一間　騎兵士官
◎罠錘　二人づれ

◎南船北馬　全一冊袖珍五〇〇頁　正價四拾錢　郵税六錢

◎續南船北馬　全一冊袖珍四一六頁　正價廿五錢　郵税六錢

◎第二軍從征日記　全一冊菊判四六〇頁　正價六拾錢　郵税拾錢

—(博文館發行)—

田山花袋氏著書

美文作法

全一冊四六判美本
紙數三百八頁

正價 金卅五錢
郵税金六錢

内容

○美文とは何ぞや
○美文と實用文
○美文と寫生文
○美文の價値
○美文の本領
　情緒と煩悶、今の美文
　新派和歌と新體詩
○美文作法
　美文組立、美文に要する各要素
　漢文和文洋文脈、現今の作家略評、作例
○小説作法
　概論、試驗と觀察、描寫、結構
○附録
　事實の人生、露骨なる描寫所謂新派に就きて、抒情と自然主義

◎小説作法　全一冊四六判　正價卅五錢　郵税六錢　三〇〇頁

◎花袋文話　全一冊四六判　正價八十錢　郵税八錢　四五〇頁

—(博文館發行)—

文學博士

幸田露伴君著

普通文章論

全一冊四六判上製　紙數二百七十頁　正價金七拾五錢　郵稅金八錢

實用的文章を作らんと欲する者は讀め、美術的文章を作らんと欲する者は讀め、本書は、露伴先生が、後進扶掖の爲め、如何にして普通文章を作るべきかを敎へたるもの、明鬯の議論、精細の指導、片々たる俗書の比にあらず。世間作文難を唱ふる士は、先づ一書を購ふて先生の精論を熟讀せられよ。

◎釋評　田山花袋君　前田木城君　共著
新古文範　全一冊四六判　正價七拾錢　五三六頁　郵稅八錢

◎文範　故、小室屈山君　遺稿
自然と社會　全一冊四六判　正價五拾五錢　四三〇頁　郵稅八錢

—(博文館發行)—

文學士

鹽釜天飈君著

ゲーテの詩研究

全一冊四六判美本　紙數三百八十頁　正價金四拾五錢　郵稅金六錢

本書は ゲーテが詩に現はれたる理想感情を繹ねて彼が僞らざる人間性を曝露すると共に技巧風格を極めて横溢せる詩美を鐘愛せるものゲーテが靈肉兩界の眞面目を知らんと欲せば此書を措て他に求むべからず文藝に志す人は乞ふ一本を備へよ

文學士　樋口龍峽君著（全一冊四六判　三百五十六頁）
◎**時代と文藝**　正價四拾五錢　郵稅六錢

太陽記者　長谷川天溪君著（全一冊四六判　四百十六頁）
◎**自然主義**　正價五拾錢　郵稅六錢

—(博文館發行)—

中村春雨君著

最近 歐米劇壇

全一冊四六判上製
紙數四百三十頁　正價 金壹圓　郵稅金八錢

劇壇革新の時機は正に迫れり、此際斯界に新活動を試みつゝある著者は、其既往三年有半の間、歐米に遊びて專ら劇壇の研究に從事し、獲たる處の智識と見聞とを擧げて本書を出す、イブセン、シヨウ、ハウプトマン、ウエデキンド、ストリンドベルヒ等の舞臺的觀察を始め獨逸、英國、露國、佛國、米國、希臘等の劇界及び文藝界の最近の消息を傳へて趣味と研究と兼備せり、苟も劇壇に志ある人は勿論、世間一般の社交界と家庭とに一讀を薦む。

文學士　小山内薰君著　（全一冊四六判三九〇頁）

◎演劇新潮　正價金五拾五錢　郵稅金六錢

土居春曙君譯　（全一冊菊判三百五十一頁）

◎新譯社會劇　正價金六拾五錢　郵稅金拾錢

——（博文館發行）——

四明翁　中川重麗君著

形似神韻 觸背美學

一名新俳諧美學

全一冊洋裝菊判　正價 金四拾錢　郵稅金六錢
紙數二百三十六頁

本書は俳諧不離不即の理を推して繪畫、彫刻、演劇、能樂、音樂、建築、模樣等の藝術は勿論、非獨立の諸藝術にも及び、パノラマ、活人畫、盆栽、盆景、生花、園藝、儀式作法の類に至るまで諸家の議論を引證して說明を下し、挿畫にはロダンの傑作あり、印象派の代表作あり、加ふるに多くの俳句を加へたるもの近來稀に見る珍著たり。

中川霞城君著　（全一冊菊判二五〇頁）

◎平言俗語俳諧美學　正價金參拾錢　郵稅金六錢

內藤鳴雪君著　（全一冊四六判二五〇頁）

◎鳴雪俳話　正價金廿八錢　郵稅金六錢

——（博文館發行）——

四條亞相公任卿選集

高井蘭山氏集解

和漢朗詠集國字抄

全四冊和裝
和紙木版刷　正價 金壹圓廿錢　郵稅金拾貳錢

和漢朗詠集は四條亞相公任卿の選集する所なり、和に在ては卽ち菅公、貫之、漢に在ては卽ち李、杜、樂天等、一百六十人の名品佳什、朗詠すべきものを採摭すること九百首の多きに及び、古代名匠の傑作蓋し玆に盡く、歲を閱すること六百有餘年の今に至りて仍ほ其流行を止めざるもの、實に所以ありと言ふべきなり、而して此書江家の註あり、覺明、玄慧の抄あり、永濟、季吟の釋ありと雖も、蘭山高井氏の集解、最も通俗、最も妥當、最も時好に適して最も廣く世に行はる、本館這回其木版を購入せるを以て、訂正補刻、以て博雅君子の需求に應ぜんとす、海邊風清き邊、山中、氣爽なる處、且詠み且逍遙せば其興趣や蓋し言ひ得ざるもの あらん。

梁南　渡邊殖君編（全一冊四六判四五〇頁）

◎註釋 **和漢諷詠類選**　正價金八拾錢　郵稅金拾錢

本書は著者が穩健豐富なる筆に成れる諷詠の資料にして從來行はるゝ詩歌のみを集めしものとは大に其の選を異にし、漢文、漢詩、和歌、和文、俳文、俳句等各種文學中の名品佳作を網羅したるもの以て吟誦の友とすべく以て習文上の範とすべし

文學博士

姉崎正治君著

停雲集

全一冊四六判上製
紙數五百八十頁
寫眞版四十餘頁　正價 金壹圓卅錢　郵稅金拾貳錢

亡友を想ひ、異國の友と思を交へ、曾遊の地を追懷し、停雲徘徊して、追へども去らざるの情この一篇をなす。感想と記行とを經とし、繪畫と戲曲とを緯とす、清閑の友旅窓の伴侶として情緒と趣味の人に薦む。

同君著

◎**花つみ日記**　（全一冊四六判上製函入）（寫眞版三十六枚挿入）　正價 金壹圓卅錢　小包料 金八錢

坪谷水哉君著

山水行脚

全一冊四六判上製
寫眞版數葉挿入

正價 金八拾錢 郵税八錢

（一〇）

一枝の筆と一個の寫眞機を友とし、暇が有ても無くても、毎年數回必ず山水の間に漫遊し、殆ど旅行狂と呼ばるゝ著者が、過去十數年間の紀行を集めたるは本書なり。五畿八道は言ふに及ばず、琉球臺灣の隅々まで、普く駈け廻りたる脚と筆との達者な上に、挿入せる百餘の寫眞と相俟ち、其の時その光景を寫し出して實地に瞭るが如し。失敗あり滑稽あり。冒險記あり。趣味實益兼ね備ひ、旅行にも臥遊にも、最好の友として推薦す。

◎詩集 **槲の葉**

正價 金四拾錢
郵税 金六錢

（全一冊袖珍三百三十頁）

與謝野鐵幹君作

詩壇の平靜を破つて一石を投ずるものは此書なり。小曲六十篇、雜體四十二篇、短歌數十種を收む。詩の愛深き人々よ。ふと思へつめたる刹那の『我』を彈じて高調を出だす著者の奇才を見給へ。

文學士 大町桂月君著

關東の山水

全一冊四六判上製
紙數五百五十頁
寫眞版三十四圖入

正價 金壹圓拾錢
郵税 金

露を吸ひ霞を喰ひ飄々乎として行き悠々然として止まる高山の巔窮谷の底健脚到らぬ隈もなく靈筆縱横關八州の名所細大漏らさず文章山水渾然一致し高士紙表に躍動し雲烟机邊を繚繞し人をして遺世超俗の思あらしむ洵にこれ大町桂月先生獨特の文境加ふるに地圖あり數十葉の寫眞あり中村不折小杉未醒丸山晩霞高村眞夫諸先生の挿畫あり皆當代の逸品錦上花を添ふるの觀あらむ

同君著

◎行雲流水

全一冊袖珍裝釘
瀟洒紙數三百頁
正價金參拾錢
郵税金六錢

大町桂月先生の近業數十篇を收む議論敍事抒情何くに往くとして可ならざるは無く高きを求めずして自から高く衒はず伴らず風骨稜々として氣韻生動す行雲流水の趣は當代の文壇獨桂月先生の筆にのみ見らるべし

（一一）

田村松魚君著

北米の花

全一冊菊判特製　正價 **金壹圓拾錢**　郵税金拾錢
表裝華麗美本

著者は今の青年文士中一種の風骨を有す。年少氣鋭、未見の山河と未知の社會を研究し、別に其作風を起さんとするの慨あり。三十六年北米の野に遊び、爾來六年間の長星霜具さに米大陸の天地に放浪し、研鑽琢磨功を積んで後歸朝。今春東都の文壇に立つ、此書は即ち著者が新らしき生涯と新らしき趣味とを世に公にせる其第一聲なりとす、卷中收むる所の長短篇小説數種及び隨筆數項は皆北米の花の美と其艶麗を競ふ。

◎あめりか物語　正價金六拾五錢　郵税金六錢

永井荷風君著（全一冊四六判美本　紙數三百九十頁）

◎北米世俗觀　正價金參拾五錢　郵税金四錢

田村松魚君著（全一冊三六判美本　紙數二百六十二頁）

——（博文館發行）——